

茨城県教育財団文化財調査報告第118集

都市計画道荒川沖木田余線街路
改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

宮 前 遺 跡

平成9年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第118集

都市計画道荒川沖木田余線街路 改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

みやま 前 遺 跡

平成9年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



宮前遺跡遠景



宮前遺跡発掘全景

序

茨城県は、長期的な展望のもとに県土の基盤整備を行っております。道路網につきましても、県土60分構想の具体化や円滑な都市交通の確保を図るなど、ゆとりある社会の実現を目指して快適な道路の整備を進めております。

都市計画道荒川沖木田余線街路改良工事は、この整備事業に伴う宅地関連事業を推進するために、土浦市の荒川沖地区から右槻地区にかけての交通渋滞の緩和を目的として計画されたものでありますが、その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である宮前遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成6年11月から平成7年3月にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は、宮前遺跡の調査成果を取録したものであり、本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただきましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成9年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成6年11月から平成7年3月まで発掘調査を実施した茨城県土浦市摩利山新田90番地の1ほかにも所在する宮前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 宮前遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇 橋 本 昌	昭和63年4月～平成7年3月 平成7年4月～
副 理 事 長	小 林 秀 文 中 島 弘 光 齋 藤 佳 郎	平成6年4月～平成8年3月 平成7年4月～ 平成8年4月～
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月
常 務 理 事	一 木 邦 彦 梅 澤 秀 夫	平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～
事 務 局 長	藤 枝 宣 一 齋 藤 紀 彦 小 林 隆 郎	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重 沼 田 文 夫	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫
	課 長	小 幡 弘 明
	課 長 代 理	根 本 達 夫
	係 長	清 水 薫
主任 調査員	海老澤 稔	平成6年4月～平成8年3月
	小 高 五 二	平成8年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明
	課 長	河 崎 孝 典
	主 査	鈴 木 三 郎
	主 査	田 所 多 佳 男
	課 長 代 理	大 高 春 夫
	主 任	小 池 孝
	主 事	軍 司 浩 作
調 査 課	課 長(部長兼務)	安 藏 幸 重
	調 査 第 二 班 長	小 泉 光 正
	主 任 調 査 員	萩野谷 悟
	主 任 調 査 員	池 田 晃 一
整 理 課	課 長	山 本 静 男
	副 主 任 調 査 員	大 関 武

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、福島県の縄文時代中期の土器の実見に当たっては、福島県文化センターの鈴木良一氏、松本茂氏、並びに福島市振興公社の原充広氏、植村泰徳氏、高荒淳氏に御協力を得た。また、滑石製品の編年については、栃木県文化振興事業団の篠原祐一氏にご指導いただいた。
- 5 土壌分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その分析結果については付章として報告する。
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 7 遺跡の概略

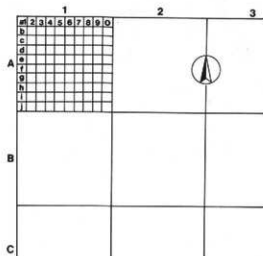
ふりがな	としげいやくどうあらかわおきだまらさんがいるかいりょうこうじちないまいぞうふんかざいちようきほうこくしよ						
書名	都市計画道荒川沖木田余線街路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	宮前遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第118集						
編著者名	大関 武						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発行年月日	1997(平成9)年3月25日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地						
宮前遺跡	茨城県土浦市 摩利山新田 90番地の1ほか	08203-A-19	36度 02分 18秒	140度 11分 00秒	19941101~ 19950331	4.064㎡	都市計画道荒川沖 木田余線街路改良 工事に伴う調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
宮前遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 38軒 土 坑 117基 陥し穴 6基		縄文土器・ミニチュア土器・土製円板・石 鏃・横器・磨製石斧・小形磨製石斧・打製 石斧・磨石・石皿・凹石 縄文土器・土器片鏃・土製円板・石鏃・石 鏃・ナイフ形石器・磨製石斧・小形磨製石 斧・打製石斧・磨石・石皿・凹石 土器片鏃		縄文時代中期の遺 構・遺物が数多く確 認され、当地域にお ける中核的な集落で あったと思われる。
		古墳時代	竪穴住居跡 4軒 土 坑 4基		土師器・須恵器・手捏土器・土玉・白玉・ 紡錘車・刀子・鏃		
		中世	土 坑 1基				
		時期不明	土 坑 3基				
		溝	1条		釘・骨・耳金		

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系を原点とし、X軸=+4,320m Y軸=+31,480mの交点を基準点(A1a₁)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……J、西から東へ1、2、3……0とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ₁、₂、₃……₀と小文字を付し、位置を表示する場合は、大調査区の名称を冠し、「A1a₁区」、「B2b₂区」のように呼称した。(第1図)



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物及び土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 竪穴住居跡-S I 土坑-SK 陥し穴-T P 溝-S D ビットーP

遺物 土器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-T P

土層 攪乱-K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

(1) 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 各遺物の実測図は、縄文土器については4分の1、その他の遺物については3分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

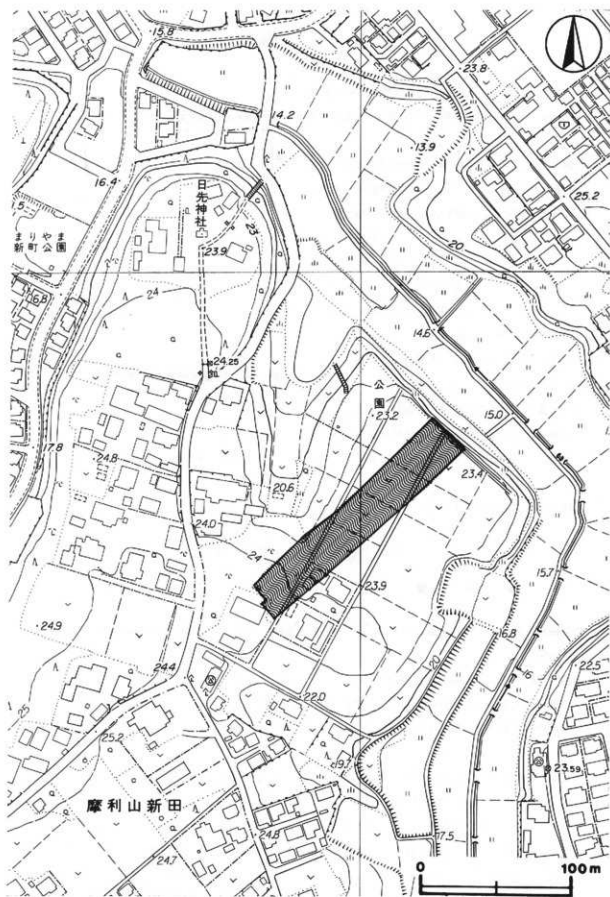
なお、種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々にS=△/○と表示した。

(3) 「主軸方向」は、炉を通る軸線、あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E N-10°-W)

なお、「長軸方向」は、最大幅をとる軸線を長軸とし、主軸方向に準じて計測し表示した。

(4) 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径、E-高台高とし、単位はcmである。

なお、現存値は()で、推定値は[]を付けて示した。



第2図 宮前遺跡周辺地形図

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 宮前遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土坑	62
(3) 陥し穴	142
2 古墳時代の遺構と遺物	145
(1) 竪穴住居跡	145
3 その他の遺構と遺物	161
(1) 土坑	161
(2) 溝	164
4 遺構外出土遺物	164
第4節 まとめ	180
付章 宮前遺跡自然科学分析報告	パリノ・サーヴェイ株式会社 190

写真図版

插图目录

第 1 图	调查区称呼方法概念图	
第 2 图	宫前遗迹周边地形图	
第 3 图	周边遗迹分布图	6
第 4 图	宫前遗迹遺構配置图	7·8
第 5 图	宫前遗迹基本土層图	9
第 6 图	第 4 号住居跡実測图	11
第 7 图	第 4 号住居跡出土遺物実測·拓影图	11
第 8 图	第 6 号住居跡実測图	13
第 9 图	第 6 号住居跡出土遺物実測图	13
第 10 图	第 9 号住居跡実測图	15
第 11 图	第 9 号住居跡出土遺物実測·拓影图	16
第 12 图	第 10 号住居跡実測图	17
第 13 图	第 10 号住居跡出土遺物実測·拓影图	18
第 14 图	第 11 号住居跡実測图	19
第 15 图	第 11 号住居跡出土遺物実測·拓影图	19
第 16 图	第 12 号住居跡実測图	20
第 17 图	第 12 号住居跡出土遺物実測·拓影图	20
第 18 图	第 14-A、B 号住居跡実測图(1)	22
第 19 图	第 14-A、B 号住居跡実測图(2)	23
第 20 图	第 14-A 号住居跡出土遺物実測·拓影图	24
第 21 图	第 14-B 号住居跡出土遺物実測·拓影图	25
第 22 图	第 15 号住居跡実測图	26
第 23 图	第 15 号住居跡出土遺物実測·拓影图	26
第 24 图	第 16 号住居跡実測图	28
第 25 图	第 16 号住居跡出土遺物実測·拓影图	29
第 26 图	第 18 号住居跡実測图	30
第 27 图	第 18 号住居跡出土遺物実測·拓影图	30
第 28 图	第 19 号住居跡実測图	31
第 29 图	第 19 号住居跡出土遺物実測·拓影图	32
第 30 图	第 20 号住居跡出土遺物実測·拓影图	32
第 31 图	第 20 号住居跡実測图	33
第 32 图	第 21 号住居跡実測图	34
第 33 图	第 21 号住居跡出土遺物実測·拓影图	34
第 34 图	第 23 号住居跡実測图	35
第 35 图	第 23 号住居跡出土遺物実測·拓影图	35
第 36 图	第 24 号住居跡炉実測图	36
第 37 图	第 25 号住居跡実測图	37
第 38 图	第 25 号住居跡出土遺物実測·拓影图	37
第 39 图	第 26 号住居跡炉実測图	38
第 40 图	第 26 号住居跡出土遺物実測·拓影图	38
第 41 图	第 28 号住居跡実測图	39
第 42 图	第 28 号住居跡出土遺物実測·拓影图	40
第 43 图	第 29 号住居跡実測图	41
第 44 图	第 29 号住居跡出土遺物実測·拓影图	41
第 45 图	第 30 号住居跡実測图	42
第 46 图	第 30 号住居跡出土遺物実測·拓影图	43
第 47 图	第 32 号住居跡実測图	44
第 48 图	第 32 号住居跡出土遺物実測·拓影图	45
第 49 图	第 33 号住居跡実測图	47
第 50 图	第 33 号住居跡出土遺物実測·拓影图	48
第 51 图	第 37 号住居跡実測图	49
第 52 图	第 37 号住居跡出土遺物実測·拓影图	49
第 53 图	第 40 号住居跡実測图	50
第 54 图	第 40 号住居跡出土遺物実測图	51
第 55 图	第 41 号住居跡実測图	51
第 56 图	第 41 号住居跡出土遺物実測·拓影图	51
第 57 图	第 42 号住居跡実測图	52
第 58 图	第 43 号住居跡炉実測图	53
第 59 图	第 43 号住居跡出土遺物実測·拓影图	53
第 60 图	第 44 号住居跡炉実測图	54
第 61 图	第 44 号住居跡出土遺物実測·拓影图	54
第 62 图	第 45 号住居跡炉実測图	55
第 63 图	第 45 号住居跡出土遺物実測·拓影图	55
第 64 图	第 46 号住居跡炉実測图	55
第 65 图	第 47 号住居跡実測图	56
第 66 图	第 48 号住居跡炉実測图	57
第 67 图	第 48 号住居跡出土遺物実測·拓影图	57
第 68 图	第 49 号住居跡炉実測图	57
第 69 图	第 50 号住居跡実測图	58
第 70 图	第 50 号住居跡出土遺物実測·拓影图	58

第71图	第51号住居跡実測図	59	第94图	第32号土坑出土遺物実測・拓影図(1)	112
第72图	第51号住居跡出土遺物実測図	59	第95图	第32号土坑出土遺物実測・拓影図(2)	113
第73图	第52号住居跡実測図	60	第96图	第32・33・41・44号土坑出土遺物 実測・拓影図	114
第74图	第52号住居跡出土遺物実測・拓影図	60	第97图	第44・45・52・54・55号土坑出土遺物 実測・拓影図	115
第75图	第53号住居跡炉実測図	61	第98图	第56・58号土坑出土遺物実測・拓影図	116
第76图	第17・18・19・22・24・26号土坑実測図	88	第99图	第57・59・60・61・64号土坑出土遺物 実測・拓影図	117
第77图	第27・28・31・32・33・41号土坑実測図	89	第100图	第62・65・66号土坑出土遺物 実測・拓影図	118
第78图	第44・45・52・54・55・102号土坑 実測図	90	第101图	第66・67号土坑出土遺物実測・拓影図	119
第79图	第56・57・58・59・111号土坑実測図	91	第102图	第72・79・81・82・84号土坑出土遺物 実測・拓影図	120
第80图	第60・61・62・64・65・66号土坑実測図	92	第103图	第83・85・90・91・92・94号土坑出土 遺物実測・拓影図	121
第81图	第67・72・79・81・82・83・129号土坑 実測図	93	第104图	第94・95・96・97・98・99号土坑出土 遺物実測・拓影図	122
第82图	第84・85・90・91・92・96号土坑実測図	94	第105图	第97号土坑出土遺物実測・拓影図	123
第83图	第94・97・100-A・104号土坑実測図	95	第106图	第100-A・102・104号土坑出土遺物 実測・拓影図	124
第84图	第107・108・110・113・114・118号 土坑実測図	96	第107图	第104・107・108・110・111号土坑出土 遺物実測・拓影図	125
第85图	第116・120・121・123・125・126号 土坑実測図	97	第108图	第113・114・118号土坑出土遺物 実測・拓影図	126
第86图	第127・128・131・132・133・134号 土坑実測図	98	第109图	第116・120・121・123・124・126号 土坑出土遺物実測・拓影図	127
第87图	第137・139・140・141・144号土坑 実測図	99	第110图	第125・126号土坑出土遺物 実測・拓影図	128
第88图	第4・6・12・13-A・B・15・16・ 20・23・25・29・30号土坑実測図	100	第111图	第127・128・131号土坑出土遺物 実測・拓影図	129
第89图	第37・39・40・46・47・49・50・ 51-A・B・53・68・73・77・89号 土坑実測図	101	第112图	第129・133・137号土坑出土遺物 実測・拓影図	130
第90图	第93・95・98・99・100-B・C・ 103・105・106・109・112号土坑 実測図	102	第113图	第132・134号土坑出土遺物 実測・拓影図	131
第91图	第115・117・119・122・124・130・ 135・136・138・142・143号土坑 実測図	103	第114图	第139・140・141・144号土坑出土遺物 実測・拓影図	132
第92图	第15・17・18・19・20・22・23・26号 土坑出土遺物実測・拓影図	110	第115图	陥し穴実測・出土遺物実測・拓影図	144
第93图	第24・27・28・31・32号土坑出土遺物 実測・拓影図	111			

第116図	第1号住居跡実測図……………146	第130図	遺構外出土縄文時代土製品 実測・拓影図……………171
第117図	第1号住居跡出土遺物実測図……………147	第131図	遺構外出土旧石器及び縄文時代石器 実測図(1)……………172
第118図	第2号住居跡実測図……………149	第132図	遺構外出土縄文時代石器実測図(2)……………173
第119図	第2号住居跡出土遺物実測図(1)……………150	第133図	遺構外出土縄文時代石器実測図(3)……………174
第120図	第2号住居跡出土遺物実測図(2)……………151	第134図	遺構外出土縄文時代石器実測図(4)……………175
第121図	第3号住居跡実測図……………154	第135図	遺構外出土縄文時代石器実測図(5)……………176
第122図	第3号住居跡出土遺物実測図……………155	第136図	遺構外出土古墳時代及び近世遺物 実測・拓影図……………178
第123図	第7号住居跡実測図……………157	第137図	縄文時代遺構配置図(1)……………181
第124図	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図……………158	第138図	縄文時代遺構配置図(2)……………183
第125図	第1号溝実測, 出土遺物実測図……………165	第139図	縄文時代遺構配置図(3)……………185
第126図	遺構外出土縄文土器実測・拓影図(1)……………167	第140図	古墳時代遺構配置図, 出土土類分類図187
第127図	遺構外出土縄文土器実測・拓影図(2)……………168		
第128図	遺構外出土縄文土器実測・拓影図(3)……………169		
第129図	遺構外出土縄文土器実測・拓影図(4)……………170		

表 目 次

表1	周辺遺跡一覧表……………5
表2	宮前遺跡住居跡一覧表……………159
表3	宮前遺跡土坑一覧表……………161

写真図版目次

- PL 1 調査前風景、遺構確認状況、調査終了状況、第4号住居跡完掘、第12号土坑完掘
- PL 2 第6・9・10・11・12号住居跡完掘、第6・9・10・12号住居跡遺物出土状況、第20・89・92・93号土坑完掘
- PL 3 第14-A・B・15・16・18・19・20号住居跡完掘、第14-A・B・15号住居跡遺物出土状況、第90・97・98・103・105・106号土坑完掘
- PL 4 第23・25・43・47号住居跡完掘、第21・23・24・26号住居跡炉完掘、第20・26号住居跡遺物出土状況、第37・113・114号土坑完掘
- PL 5 第28・29・30・32号住居跡完掘、第29・30号住居跡炉完掘、第29・32号住居跡遺物出土状況、第55・102・110号土坑完掘
- PL 6 第33・40・41号住居跡完掘、第33・37・41号住居跡炉完掘、第32・40号住居跡遺物出土状況、第81・130号土坑完掘
- PL 7 第42・50・51・52号住居跡完掘、第44・45・46・48・49号住居跡炉完掘、第115・116・118・119・120・124・142号土坑完掘
- PL 8 第53号住居跡炉完掘、第51号住居跡遺物出土状況、第4・6・13-A・B・15・16-A・B・136号土坑完掘
- PL 9 第17・18・19・20・22・23・24・25号土坑完掘
- PL 10 第26・27・28・29・30・31号土坑完掘、第27・28号土坑遺物出土状況
- PL 11 第32・33・39・40・46号土坑完掘、第32・41・44号土坑遺物出土状況
- PL 12 第45・47・49・50・51-A・B・52・53号土坑完掘、第54号土坑遺物出土状況
- PL 13 第56・57・58・59・60・61・62・111号土坑完掘、第56号土坑遺物出土状況
- PL 14 第64・66・67・68・72号土坑完掘、第65・66・67号土坑遺物出土状況
- PL 15 第73・77・79・81・82・83・84・129号土坑完掘、第72号土坑遺物出土状況
- PL 16 第85・91・94・95・96・100-A・B・C号土坑完掘、第91・97号土坑遺物出土状況
- PL 17 第104・107・108・109・112号土坑完掘、第102・107・111・113号土坑遺物出土状況、第110号土坑土層堆積状況
- PL 18 第120・121・125・126・127号土坑完掘、第121・125号土坑遺物出土状況
- PL 19 第128・131・132・133・134・135・137号土坑完掘、第129・137号土坑遺物出土状況、第127号土坑土層堆積状況
- PL 20 第130・138・139・140・141・143・144号土坑完掘、第137・139号土坑遺物出土状況、第1・2号陥し穴完掘
- PL 21 第3・4・5・6号陥し穴完掘、第1・2号住居跡完掘、第1号住居跡遺物出土状況
- PL 22 第3・7号住居跡完掘、第2・3・7号住居跡遺物出土状況、有舌尖頭器出土状況
- PL 23 第4・6・9・10・52号住居跡出土遺物
- PL 24 第10・12・14-A・16・18・19・20号住居跡出土遺物
- PL 25 第23・25・26・28・29号住居跡出土遺物
- PL 26 第30・32号住居跡出土遺物
- PL 27 第32・33・40号住居跡出土遺物
- PL 28 第41・51号住居跡、第15・17・18・19・22・23・27・28・32・41・44・45・56号土坑出土遺物
- PL 29 第32号土坑出土遺物
- PL 30 第32・41・44号土坑出土遺物
- PL 31 第44・52・54・55・56・58号土坑出土遺物
- PL 32 第58・59・60・61・62・66・72・81・97・98号土坑出土遺物

- P L 33 第65・66・67・81・82号土坑出土遺物
- P L 34 第59・82・83・84・85・90・94・95・99・
102・113・121・129号土坑出土遺物
- P L 35 第94・97・100-A号土坑出土遺物
- P L 36 第99・104・107・108・110・111・113・137・
139号土坑出土遺物
- P L 37 第114・118・121・123・124・125号土坑出
土遺物
- P L 38 第125・126・127・129号土坑出土遺物
- P L 39 第131・132・133・137・139号土坑出土遺物
- P L 40 第139・141号土坑, 第6号陥し穴, 遺構外
出土遺物
- P L 41 遺構外出土遺物
- P L 42 遺構外出土遺物
- P L 43 遺構外出土遺物
- P L 44 第1号住居跡出土遺物
- P L 45 第1・2・3号住居跡出土遺物
- P L 46 第2・3号住居跡出土遺物
- P L 47 第3・7号住居跡, 第1号溝出土遺物
- P L 48 第4・9・10・11・14-A・B号住居跡,
遺構外出土遺物
- P L 49 第15・16・18・19・21・23・25・26・28・
29・30・32・33・37・43号住居跡出土遺物
- P L 50 第44・45・48・50・52号住居跡, 第17・19・
20・22・24・26・27・28・31・32号土坑出
土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

主要地方道土浦龍ヶ崎線は、土浦市と龍ヶ崎市を南北に結ぶという重要な役割を果たしてきた道路である。しかしながら、沿線地域の近年における目覚ましい発展は交通量の増加を招き、さらなる発展を目指していくには道路網の整備を図ることが必要である。そうした中、茨城県は、主要地方道土浦龍ヶ崎線の沿線の土浦市荒川沖地区から右碓地区にわたる部分に、都市計画道荒川沖木田余線の建設を計画した。

工事に先立ち、茨城県は、平成5年4月22日に茨城県教育委員会に対し、この道路改良工事予定地内である土浦市摩利山新田地区における埋蔵文化財の有無等についての照会をした。これを受け、茨城県教育委員会は、平成5年7月9日に現地踏査を実施し、工事予定地内に宮前遺跡が所在することを茨城県あてに回答した。平成6年1月14日から、茨城県と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、平成6年1月28日、宮前遺跡については記録保存の措置を講ずることとし、茨城県教育委員会は、茨城県に埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、平成6年11月1日、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、同年11月から宮前遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

宮前遺跡の発掘調査は、平成6年11月1日から平成7年3月31日までの5か月にわたり実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

- 11月 1日から事前準備を開始し、続いて器材の搬入など発掘調査のための諸準備を行った。9日に調査区内の清掃をし、14日には関係者列席のもとに導入式を挙行した。15日からは調査区の手掘りによる試掘調査を開始し、遺物及び遺構の存在を確認した。
- 12月 5日からは重機による表土除去とともに、遺構確認作業を開始した。表土除去は9日に終え、遺構確認作業も12日には終了し、竪穴住居跡、土坑及び溝等を確認した。14日からは竪穴住居跡及び土坑を中心とした遺構調査に着手した。14・15及び19日には方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。
- 1月 引き続き竪穴住居跡及び土坑を中心とした遺構調査を実施した。
- 2月 引き続き竪穴住居跡及び土坑を中心とした遺構調査を実施した。
- 3月 遺構調査を概ね終えたのに伴い、調査区内を清掃して、5日には現地説明会を開催し、多数の見学者が来跡した。6日には完掘全景の航空写真撮影を実施した。以降、補足調査を行いながら、撤収準備を開始した。22日にはすべての調査を終了し、24日には撤収作業も完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宮前遺跡は茨城県土浦市摩利山新田90番地の1ほかに所在し、土浦市役所の南西約4kmに位置している。

遺跡のある土浦市は、茨城県の南部に位置し、東は霞ヶ浦、出島村、西はつくば市、南は牛久市、阿見町、北は千代田町、新治村と境を接している。市域は、東西約13km、南北約15km、面積約92km²である。市内をJR常磐線、常磐自動車道及び国道6号線がほぼ平行して南北に走り、国道125号線及び国道354号線が東西に走っている。

土浦市の地形は、筑波稲敷台地及び新治台地と呼ばれる標高20～30mの洪積台地と、桜川及び霞ヶ浦水系の沖積低地とからなっており、市の中央には低地が開け、その南側と北側には台地が発達している。筑波稲敷台地は市の南部に位置し、桜川、小貝川及び霞ヶ浦に囲まれており、市域は台地の中央部北側に当たる。台地上は極緩い波浪状の微起伏をもち、縁辺部には多数の谷津が複雑に入り組んでいる。新治台地は市の北部に位置し、桜川、恋瀬川及び霞ヶ浦に囲まれており、市域は台地の西部南側に当たる。新治台地も筑波稲敷台地と同じような地形となっている。鷲尾山に水源をもち、筑波山西麓及び南麓の水を集めた桜川は、市の中央を西から東に流れ、土浦市港町付近で霞ヶ浦に注いでいる。また、筑波稲敷台地の中には花室川及び乙戸川、新治台地の中には境川などの小河川が流れている。筑波稲敷台地及び新治台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から上部にかけて成田層下部、成田層上部、鹿ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層、表土層の順で堆積している。堆積状況は水平且つ単調で、褶曲や断層は見られない。

宮前遺跡は、土浦市の南部、花室川南岸の筑波稲敷台地上に立地している。遺跡は東西両側を北から入り込んだ花室川水系の小支谷によって挟まれた舌状台地上全体となっており、その規模は東西約150m、南北約250mである。遺跡の標高は23～25mで、台地上と東西両側谷津低地面との比高は7～9mである。調査前の現況は、畑である。

参考文献

- ・茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 土浦』 1983年12月
- ・茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 玉造』 1984年11月
- ・土浦市史編さん委員会 『図説 土浦の歴史』 1991年3月

第2節 歴史的環境

宮前遺跡①の所在する地域は、河川、湖沼、低地、台地と変化に富んだ自然環境をもち、台地上には数多くの遺跡が存在している。特に、花室川水系及び桜川水系の台地上には、旧石器時代から平安時代までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』⁽¹⁾、『土浦の遺跡—埋蔵文化財包蔵地—』⁽²⁾の中で報告されている当該地域の主な遺跡を中心に、時代別に概観することにした。

旧石器時代の遺跡としては、花室川南岸の長峰遺跡⁽³⁾〈64〉から搔器、花室川北岸の寺家ノ後A遺跡⁽⁴⁾〈60〉から彫器、桜川南岸の池の台遺跡⁽⁵⁾〈44〉からナイフ形石器が出土している。また、花室川北岸の内出後遺跡⁽⁶⁾〈38〉

から削器が採集されている。

縄文時代早期の遺跡としては、花室川南岸の木の宮南遺跡<19>、花室川北岸のビヤ首遺跡<46>、永国遺跡<47>等があり、永国遺跡からは茅山期の竪穴住居跡が発掘調査されている。前期の遺跡としては、花室川南岸の烏山遺跡<12>、木の宮南遺跡、権現前遺跡<21>、右杖貝塚東遺跡<22>、宮塚遺跡<23>、堂地塚遺跡<29>、小西遺跡<31>、花室川北岸のビヤ首遺跡、神出遺跡<57>等があり、烏山遺跡からは関山期の竪穴住居跡、右杖貝塚東遺跡からは黒浜期の竪穴住居跡が発掘調査されている。中期の遺跡としては、今回報告する宮前遺跡の他に、花室川南岸の木の宮南遺跡<14>、木の宮北遺跡<18>、峰崎遺跡<20>、権現前遺跡、花室川北岸のビヤ首遺跡、永国遺跡、桜川南岸の谷原門遺跡<45>等があり、永国遺跡からは加曾利E期の竪穴住居跡が発掘調査されている。後期の遺跡としては、花室川南岸の峰崎遺跡、桜川南岸の池の台遺跡、霞ヶ浦西岸の内根B遺跡<54>等がある。晩期の遺跡としては、花室川南岸の木の宮南遺跡、峰崎遺跡、桜川南岸の池の台遺跡等がある。

また、貝塚は集落跡と思われる遺跡に付随するように存在している。湮滅してしまっただけのものも含めると、花室川南岸の摩利山貝塚<3>、烏山貝塚⁽⁷⁾、桜川南岸の小松貝塚<2>、霞ヶ浦西岸の大岩田貝塚<13>等が知られている。このような縄文時代の遺跡の分布を見てみると、前期から中期にかけて遺跡数が増加し、後期から晩期にかけて減少するという傾向が認められる。

弥生時代の遺跡としては、花室川南岸の烏山遺跡、馬道遺跡<16>、木の宮南遺跡、永峰遺跡<27>、花室川北岸の永国遺跡等があり、烏山遺跡及び永国遺跡は、発掘調査によって後期の集落が存在していたことが確認されている。

古墳時代前期の遺跡としては、花室川南岸の烏山遺跡、南達中遺跡<15>、平坪遺跡<26>、永峰遺跡、堂地塚遺跡、堂後遺跡<33>、南丘遺跡<63>、花室川北岸の内出後遺跡、永国遺跡、亀井遺跡<49>、桜川南岸の霞ヶ岡北遺跡<35>、東谷遺跡<36>、弁天社遺跡<51>、霞ヶ浦西岸の内根A遺跡<53>等がある。中期の遺跡としては、今回報告する宮前遺跡の他に、花室川南岸の烏山遺跡、谷原門遺跡、永峰遺跡、花室川北岸の永国遺跡、寺家ノ後A遺跡、寺家ノ後B遺跡<61>、霞ヶ浦西岸の内根A遺跡、内根B遺跡等がある。後期の遺跡としては、花室川南岸の烏山遺跡、谷原門遺跡、南達中遺跡、馬道遺跡、念代遺跡<25>、平坪遺跡、永峰遺跡、堂後遺跡、南丘遺跡、長峰遺跡、花室川北岸の内出後遺跡、油斐田遺跡<39>、阿ら地遺跡<40>、桜ヶ丘遺跡<41>、永国遺跡、亀井遺跡、神出遺跡、寺家ノ後A遺跡、寺家ノ後B遺跡、十三塚B遺跡<62>、桜川南岸の霞ヶ岡遺跡<34>、東谷遺跡、小松遺跡<43>、池の台遺跡、西原遺跡<50>、弁天社遺跡、下高津小学校遺跡<52>、霞ヶ浦西岸の内根B遺跡、木曾遺跡<55>、木曾北遺跡<56>等がある。これまで行われてきた発掘調査によって、これらの遺跡の内のいくつかについては、集落の様相が明らかにされている。烏山遺跡及び永国遺跡は、前期から後期という長期にわたって形成された集落跡で、特に、烏山遺跡からは前期の玉造工房跡も発見されている。平坪遺跡及び南丘遺跡は、前期と後期の集落跡で、中期の竪穴住居跡は確認されていない。寺家ノ後A遺跡及び寺家ノ後B遺跡は、中期から後期にわたる集落跡で、その後、終末期の古墳群が形成されている。念代遺跡、長峰遺跡、十三塚B遺跡及び池の台遺跡は、後期になってから新しく営まれた集落跡である。このような古墳時代の遺跡の分布を見てみると、前期から中期にかけて急激な変化は認められないが、後期に至ると爆発的な遺跡数の増加が認められる。

また、古墳は集落跡と思われる遺跡に隣接するように存在している。湮滅してしまっただけのものも含めると、花室川南岸の石倉山古墳群<10>、ともえ塚古墳群<11>、馬道古墳群<17>、花室川北岸の桜ヶ丘古墳<42>、永国古墳群、桜川南岸の中高津古墳<5>、高津天神塚古墳群<6>、小松古墳<7>、三芳古墳<8>、霞ヶ岡古

墳〈37〉、霞ヶ浦西岸のひさご塚古墳〈4〉、中内山古墳群〈9〉、法泉寺古墳群〈59〉等がある。その他にも、花室川南岸の南達中遺跡からは埴輪片が採集されており、かつては古墳が存在していたものと思われる。このような古墳の分布を見ても、集落跡と思われる遺跡の様相と同じように、その多くは後期から終末期のもので、後期に至って一斉に古墳群が形成されていったものと思われる。

奈良・平安時代の遺跡としては、花室川南岸の鳥山遺跡、谷原門遺跡、南達中遺跡、馬道遺跡、木の宮南遺跡、峰崎遺跡、権現前遺跡、内路地台遺跡〈24〉、念代遺跡、平坪遺跡、堂地塚遺跡、小西遺跡、堂後遺跡、南丘遺跡、長峰遺跡、花室川北岸の内出後遺跡、油麦田遺跡、阿ら地遺跡、永国遺跡、亀井遺跡、神出遺跡、桜川南岸の霞ヶ岡遺跡、霞ヶ岡北遺跡、小松遺跡、西原遺跡、弁天社遺跡、下高津小学校遺跡、霞ヶ浦西岸の内根A遺跡、内根B遺跡、木曾遺跡、木曾北遺跡等がある。発掘調査によって、鳥山遺跡、念代遺跡、南丘遺跡及び永国遺跡は、奈良時代から平安時代にかけての集落、また、内路地台遺跡、平坪遺跡及び長峰遺跡は、平安時代の集落が存在していたことが確認されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は表1、第2図中の該当番号と同じである。

註

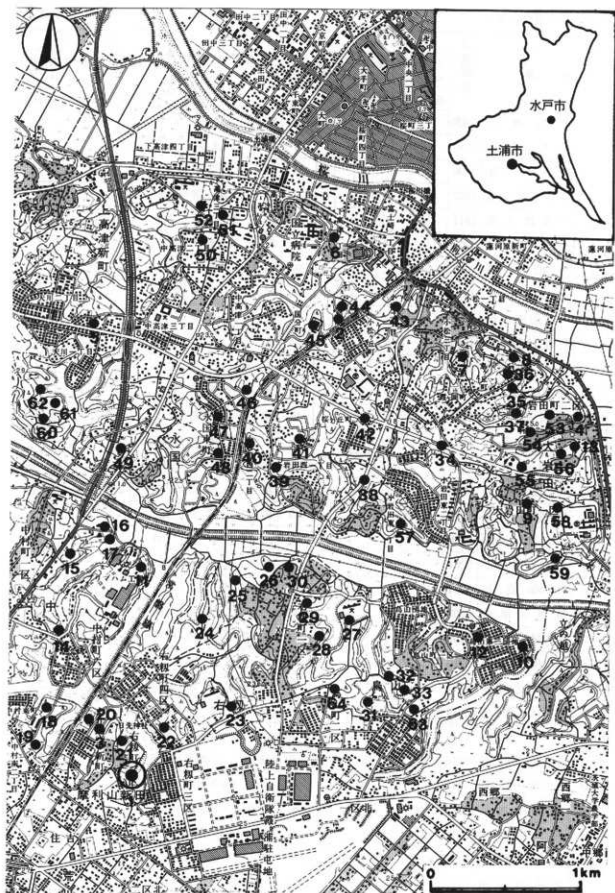
- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月
- (2) 土浦市教育委員会 『土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－』 1984年3月
- (3) 日本窯業史研究所 『茨城県土浦市 永国遺跡』（日本窯業史研究所報告15） 1983年9月
- (4) 茨城県住宅供給公社 『土浦市鳥山遺跡群－土浦市鳥山岡地造成用地内埋蔵文化財2・3次調査報告書－』 1975年3月
- (5) 土浦市教育委員会 『茨城県土浦市 鳥山遺跡』 1988年3月
- (6)・(8)・(12)・(17) 茨城県教育財団 『主要地方道土浦電ヶ崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 右羽貝塚東遺跡・内路地台遺跡・念代遺跡・平坪遺跡』（茨城県教育財団文化財調査報告第111集） 1996年3月
- (7) 鳥山遺跡〈12〉内に存在した縄文時代前期の地点貝塚。
- (9)・(13)・(16) 茨城県教育財団 『一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 西郷遺跡・南丘遺跡・長峰遺跡・敷光遺跡・宮塚遺跡・右羽館跡・内路地台遺跡』（茨城県教育財団文化財調査報告第64集） 1991年3月
- (10)・(11)・(14) 茨城県教育財団 『永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡・十三塚A遺跡・十三塚B遺跡・永国十三塚遺跡・旧鎌倉街道』（茨城県教育財団文化財調査報告第60集） 1990年3月
- (15) 土浦市教育委員会 『池の台遺跡調査報告』 1981年1月
- (16) 前掲註(10)に所収されている寺家ノ後B遺跡及び十三塚B遺跡では、古墳時代終末期の方墳が計4基発掘調査されており、合わせて「永国古墳群」とした。

参考文献

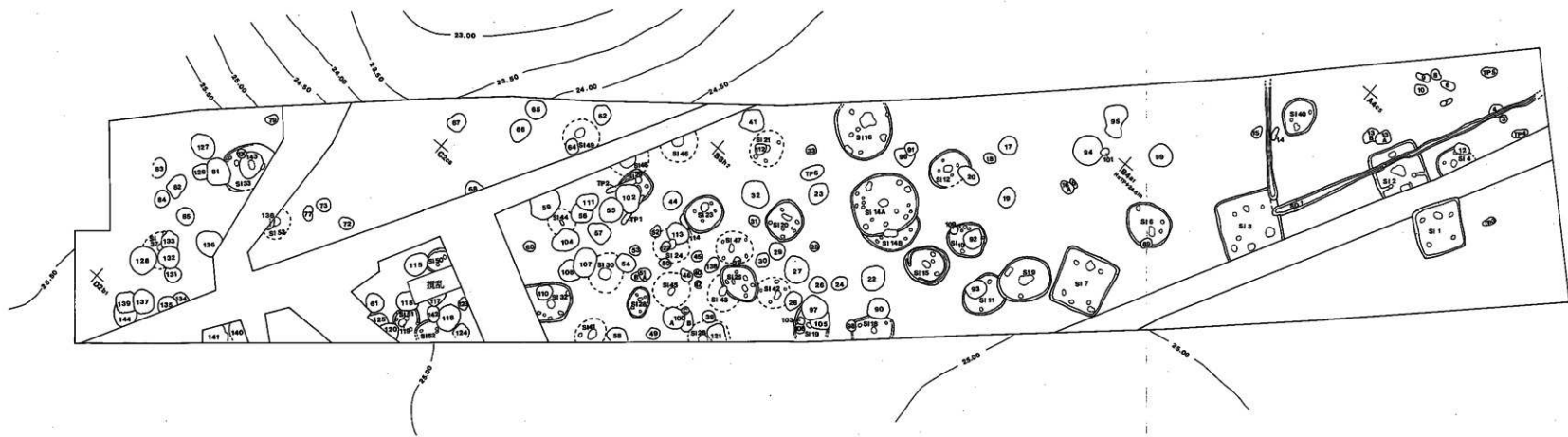
- ・土浦市史編さん委員会 『図説 土浦の歴史』 1991年3月

表1 周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺 跡 名	県 遺跡 番号	時 代					図中 番号	遺 跡 名	県 遺跡 番号	時 代				
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	中 世				近 世 以降	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳
①	宮前遺跡	当遺跡	○	○	○			33	堂後遺跡	5225	○	○	○		
2	小松貝塚	1789	○					34	霞ヶ岡遺跡	5246	○	○	○		
3	摩利山貝塚	1790	○					35	霞ヶ岡北遺跡	5247	○	○	○		
4	ひさご塚古墳	1807			○			36	東谷遺跡	5248			○		
5	中高津古墳	1811			○			37	霞ヶ岡古墳	5249			○		
6	高津天神古墳群	1812			○			38	内出後遺跡	5250	○	○	○	○	
7	小松古墳	1813			○			39	油麦田遺跡	5251			○	○	
8	三芳古墳	1814			○			40	阿ら地遺跡	5252			○	○	
9	中内山古墳群	1816			○			41	桜ヶ丘遺跡	5254			○		
10	石倉山古墳群	1819			○			42	桜ヶ丘古墳	5255			○		
11	ともえ塚古墳群	1820			○			43	小松遺跡	5256			○	○	
12	烏山遺跡	3451	○	○	○	○		44	池の台遺跡	5257	○	○	○		
13	大岩田貝塚	3999	○					45	国分遺跡	5258	○				
14	谷原門遺跡	5193	○		○	○		46	ビヤ首遺跡	5259	○				
15	南達中遺跡	5196			○	○		47	永国遺跡	5260	○	○	○	○	
16	馬道遺跡	5198			○	○	○	48	宮久保遺跡	5261	○			○	
17	馬道古墳群	5199			○			49	亀井遺跡	5262			○	○	
18	木の宮北遺跡	5200	○					50	西原遺跡	5263			○	○	
19	木の宮南遺跡	5201	○	○		○		51	弁天社遺跡	5264			○	○	
20	峰崎遺跡	5204	○			○		52	下高津小学校遺跡	5265			○	○	
21	権現前遺跡	5207	○			○		53	内根A遺跡	5269			○	○	
22	右柳貝塚東遺跡	5209	○					54	内根B遺跡	5270	○		○	○	
23	宮塚遺跡	5210	○					55	木曾遺跡	5272			○	○	
24	内路地台遺跡	5212				○		56	木曾北遺跡	5273	○		○	○	
25	念代遺跡	5214			○	○		57	神出遺跡	5274	○		○	○	
26	平坪遺跡	5215			○	○		58	五蔵遺跡	5275	○			○	
27	永峰遺跡	5216			○	○		59	法泉寺古墳群	5276			○		
28	松原遺跡	5217	○			○		60	寺家ノ後A遺跡		○		○		
29	堂地塚遺跡	5218	○		○	○		61	寺家ノ後B遺跡						
30	沖ノ台遺跡	5219			○	○		62	十三塚B遺跡				○		
31	小西遺跡	5222	○			○		63	南丘遺跡				○	○	
32	北平南遺跡	5223	○			○		64	長峰遺跡		○		○	○	



第3図 周辺遺跡分布図



第 4 图 宫前遗址遗构配置图

第3章 宮前遺跡

第1節 遺跡の概要

宮前遺跡は、土浦市の南部、花室川南岸の筑波稲敷台地上に立地している。遺跡は東西両側を北から入り込んだ花室川水系の小支谷によって挟まれた舌状台地上全体となっており、その規模は東西約150m、南北約250mである。台地の標高は23~25mで、台地上と東西両側谷津低地面との比高は7~9mである。今回の調査は、遺跡内を北東方向から南西方向にかけて通り抜ける道路建設工事地内のみで、遺跡の一部である。調査区域は東西約140m、南北約132m、面積4,064m²で、調査前の現況は畑である。当遺跡は、旧石器時代、縄文時代及び古墳時代にかけての複合遺跡で、遺跡の中心となる時期は縄文時代である。

今回の調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡38軒、土坑117基及び陥し穴6基、古墳時代中期の竪穴住居跡4軒及び土坑4基、中世の土坑1基、時期不明の土坑3基及び溝1条を検出した。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に180箱出土した。縄文時代の遺物としては、竪穴住居跡及び土坑から深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、器台形土器、有孔罇付土器及びミニチュア土器等の縄文土器、土器片鏃及び土製円板等の土製品、石鏃、石鏃、搔器、ナイフ形石器、磨製石斧、小形磨製石斧、打製石斧、磨石、石皿及び凹石等の石器が出土している。古墳時代の遺物としては、竪穴住居跡から環、小形環、椀、壺、甕、甗及び手捏土器等の土師器、坏身及び甕等の須恵器、土玉等の土製品、白玉、紡錘車等の石製品、刀子及び鏃等の鉄製品が出土している。その他に、旧石器時代の削器及び尖頭器、縄文時代の耳栓、土製有孔円板、有舌尖頭器、礫器、敲石、軽石、古墳時代の双孔方板及びガラス製小玉、近世の灯明受皿、小碗、襦袢、泥面子及び砥石等が、表土層、遺構確認面及び覆土中から出土している。

第2節 基本層序の検討

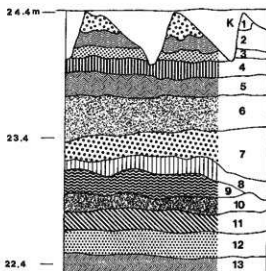
宮前遺跡においては、調査区西部のC2c₀区にテストピットを設定し、第5図に示すような土層の堆積状況を確認した。以下、土壌分析の結果を踏まえながら、各土層について記載する。

第1層は、褐色のローム層で、武蔵野台地の立川ローム層の第1暗色帯(BBI)と考えられ、厚さは10~20cmである。

第2層は、明黄褐色のローム層で、厚さは10~15cmである。

第3層は、黄褐色のローム層で、厚さは5~10cmである。

第4層は、黄褐色のローム層で、武蔵野台地の立川ローム層の第2暗色帯(BBII)と考えられ、厚さは



第5図 宮前遺跡基本土層図

10～15cmである。本層はバブル型火山ガラスを多量に含んでおり、約2.1～2.5万年前に降灰したとされる始良Tn火山灰（A T）の降灰層準と考えられる。

第5層は、第4層より暗い褐色のローム層で、第4層と同じく立川ローム層の第2暗色帯（B B II）と考えられ、厚さは15～20cmである。

第6層は、黄褐色のローム層で、厚さは25～35cmである。

第7層は、第6層よりやや明るい黄褐色のローム層で、厚さは15～25cmである。

第8層は、にぶい黄褐色のローム層で、厚さは5～15cmである。

第9層は、黄褐色のローム層で、厚さは10～20cmである。

第10層は、褐色のローム層で、厚さは5～15cmである。

第11層は、第10層よりやや暗い褐色のローム層で、厚さは15～20cmである。

第12層は、にぶい黄褐色のローム層で、厚さは15～20cmである。

第13層は、鉄分を含んだ灰黄褐色の粘土層で、鉄分の酸化がない純粋な粘土は灰白色である。

なお、耕作等による攪乱あるいは削平のためか、ローム層の最上部に認められることが多いソフトローム層は、本地点では認められなかった。

宮前遺跡の遺構は、表土下30～50cmの第1層上面で確認した。

註

- (1) 土壌分析の結果については、パリオ・サーヴェイ株式会社による「宮前遺跡自然科学分析報告」の付章を参照。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査では、調査区のほぼ全域から竪穴住居跡38軒、土坑117基及び陥し穴6基を検出した。時期はすべて縄文時代中期のものと考えられる。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

今回の調査では、調査区のほぼ全域から竪穴住居跡38軒を検出した。大半の竪穴住居跡は、トレンチャーによる攪乱を受けており、さらに遺構の重複も激しく、遺存状況は良好とは言えない。壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができず、埴やピットだけしか検出できなかった竪穴住居跡もある。

なお、竪穴住居跡と思われる遺構に第1～53号まで番号をつけたが、第5、8、13、17、22、27、31、34～36、38及び39号住居跡については、調査の過程で土坑であることが判明したため欠番とした。また、第14号住居跡については、同じく調査の過程で重複関係のある2軒の住居跡であることが判明したため、それぞれ第14-A、14-B号住居跡とした。

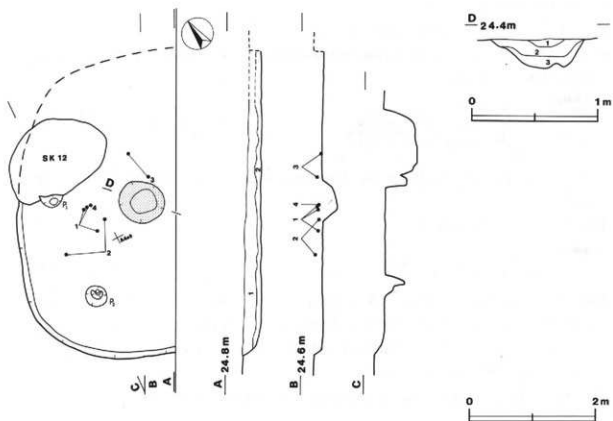
第4号住居跡（第6・7図）

位置 調査区の北東部、A4d区。

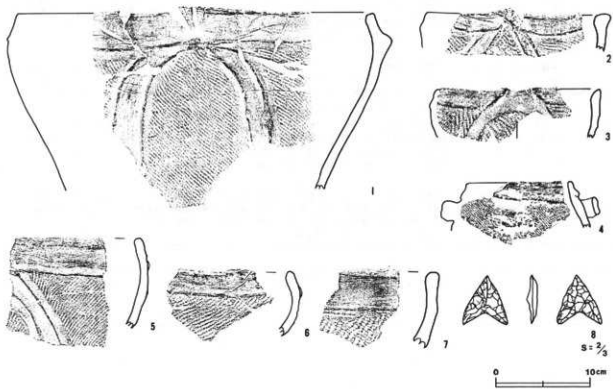
重複関係 本跡は第12号土坑に掘り込まれており、第12号土坑より古い。

規模と平面形 長径(5.0)m、短径(2.6)mの円形と思われる。南東側半分は調査区外となっている。

長径方向 不明。



第6图 第4号住居跡実測図



第7图 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

壁 壁高は14~16cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径74cm、短径66cmの楕円形で、床面を24cm掘り窪めた床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
 2 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック中量、ローム中ブロック・焼土大ブロック少量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は直径36~38cmの円形、深さ32~36cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子中量、ローム大ブロック少量
 2 明褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて350点ほど出土している。第7図1, 2の深鉢形土器及び4の甕形土器は炉の西側付近の床面直上から、3の深鉢形土器は炉の北側付近の床面直上からそれぞれ出土している。5~7は深鉢形土器の口縁部片である。1~7まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から8の石鏃が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加賀利E IV式期と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第7図 1	深鉢形七節 縄文土器	A (38.4) B (18.8)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は両側をなぞる微隆起線で区画された無文帯で、口縁部直下にコブ状突起をもつ。胴部は地文に単筋LRの縄文が施され、両側をなぞる2条の微隆起線で区画された磨消帯を口縁部直下から逆「U」字形に垂下している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P49 20% 伊勢谷住居跡遺土 PL23
2	深鉢形土器 縄文土器	A (19.6) B (4.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は両側をなぞる微隆起線で区画された無文帯で、無文帯中にコブ状突起をもつ。胴部は地文に単筋LRの縄文が施され、両側をなぞる2条の微隆起線で区画された磨消帯を口縁部直下から逆「U」字形に垂下している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P51 10% 伊勢谷住居跡遺土 PL23
3	深鉢形土器 縄文土器	A (17.4) B (5.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は片側をなぞる微隆起線で区画された無文帯で、口縁部に2つのコブ状突起をもつ。胴部は地文に単筋LRの縄文が施され、片側をなぞる2条の微隆起線で区画された磨消帯を口縁部直下から逆「U」字形に垂下している。	砂粒・長石・雲母 黄褐色 普通	P52 10% 伊勢谷住居跡遺土 PL23
4	甕形土器 縄文土器	A (11.0) B (5.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は片側をなぞる微隆起線で区画された無文帯である。胴部は地文に無筋LRの縄文が施され、胴部上部に横状把手が付く。把手の両接合部付近には無筋LRの縄文、中央には1条の沈線が施されている。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P50 10% 伊勢谷住居跡遺土 PL23

図版番号	種 別	計 測 値				現存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第7図8	石 鏃	1.9	1.8	0.4	0.4	100	安山岩	覆土	QR PL23

第6号住居跡 (第8・9図)

位置 調査区の中央部, B4a₂区。

重複関係 本跡は第89号土坑に掘り込まれており, 第89号土坑より古い。

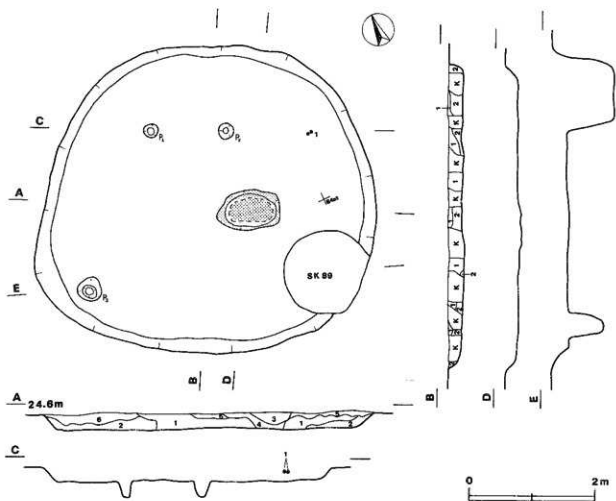
規模と平面形 長径5.60m, 短径5.16mの円形である。

長径方向 N-86°-W

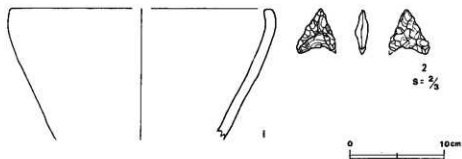
壁 壁高は20~30cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

炉 中央からやや南東寄りに付設され, 平面形は長径102cm, 短径64cmの楕円形で, 床面を8cm掘り窪めた地床



第8図 第6号住居跡実測図



第9図 第6号住居跡出土遺物実測図

がである。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は直径24~40cmの円形、深さ28~58cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

覆土 6層からなる。自然堆積である。

土層解説				
1	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック、焼土小ブロック、焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量	4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子中量、焼土中・小ブロック少量、焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子微量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子中量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物・炭化粒子少量	6 褐色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて300点ほど出土している。第9図1の鉢形土器は東壁寄りの覆土下層から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から2の石鍬及び剃片2点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第9図1	鉢形土器 縄文土器	A (28.0) B (14.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は横位の磨き、胴部は斜位のナデが施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P53 20% 東壁寄り覆土下層 PL23

図版番号	類別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第9図2	石 鍬	1.8	(1.6)	0.5	(0.8)	95	チャート	覆土	Q9 PL23

第9号住居跡 (第10・11図)

位置 調査区の中央部、B3e区。

重複関係 本跡は第11号住居跡を掘り込んで構築されており、第11号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径6.22m、短径5.38mの楕円形である。

長径方向 N-2°-E

壁 壁高は12~28cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央からやや北寄りに付設され、平面形は長径188cm、短径114cmの不整楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。本炉は、規模及び平面形から造り替えが行われた可能性がある。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は直径50cmの円形、深さ10cmである。また、P₂及びP₃の上面は一つで、長径116cm、短径82cmの不整楕円形の土坑状を呈しているが、底面はそれぞれ別で、P₂の深さは38cm、P₃の深さは44cmとなっており、柱の立て替えが行われたか、もしくはP₂はP₃の補助柱穴であった可能性がある。P₁、P₃は、規模や配列から主柱穴と考えられる。

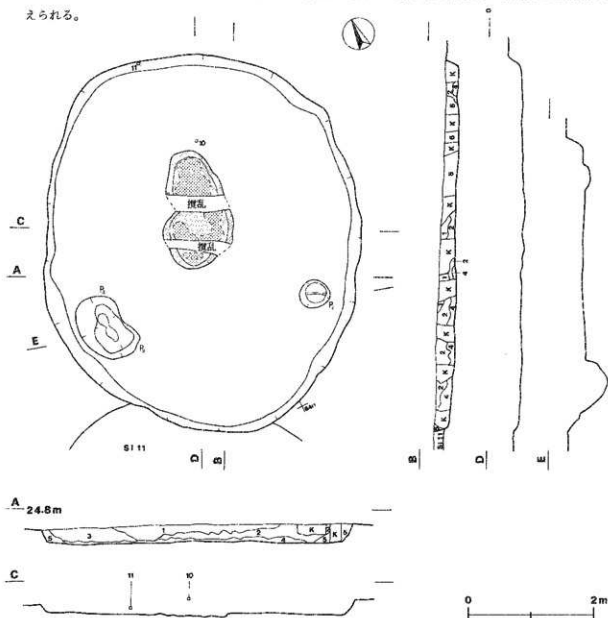
覆土 6層からなる。自然堆積である。

土層解説

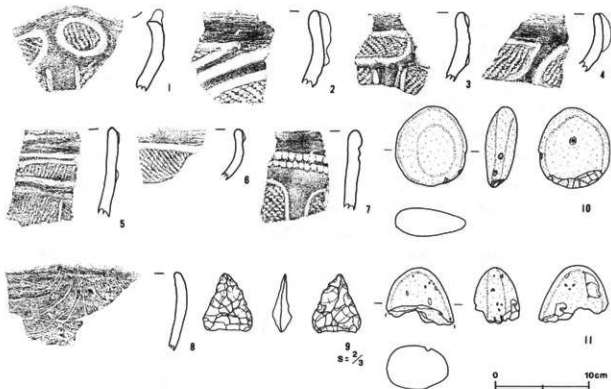
- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、ローム中ブロック少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 5 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 6 風褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて800点ほど出土している。土器は炉付近の覆土下層から床面直上及び炉の上面にかけて集中して出土している。第11図1～8は深鉢形土器の口縁部片である。8の口縁部片は重弧文が施された管形系の土器であるが、1～8まですべて本跡に伴うものと思われる。また、9の石鉢は南東部の覆土中から、10の磨石は炉の北側付近の覆土中層から、11の磨石は北壁寄りの覆土下層から出土している。その他に、覆土中から剥片1点が出土している。

所見 本跡の炉は、規模及び平面形から造り替えが行われた可能性がある。また、P₂、P₃も平面形及び断面形から柱の立て替えが行われた可能性がある。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。



第10図 第9号住居跡実測図



第11図 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計 画 値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第11図9	石 鏃	2.3	2.0	0.7	2.0	100	安山岩	南東部覆土	Q10 PL23
10	磨 石	(8.5)	7.5	3.3	(267.5)	90	安山岩	伊北副付近覆土中層	Q11 PL23
11	磨 石	(6.1)	(7.2)	(4.7)	(186.0)	40	安山岩	北壁寄り覆土下層	Q12 PL23

第10号住居跡 (第12・13図)

位置 調査区の中央部, B3e区。

重複関係 本跡は第92号土坑を掘り込んで構築されており, 第92号土坑より新しい。また, 第109号土坑に掘り込まれており, 第109号土坑より古い。

規模と平面形 長径4.88m, 短径4.34mの楕円形である。

長径方向 N-84°-W

壁 壁高は10~18cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

炉 中央からやや東寄りに付設され, 平面形は長径54cm, 短径52cmの円形で, 床面を42cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。本炉は, 規模及び平面形から当初は土器埋設炉であった可能性がある。

伊土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物少量 | 3 赤褐色 | 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量, ローム粒子中量, ローム大・中・小ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量, ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子中量, ローム大ブロック・焼土大ブロック少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大・中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量 |

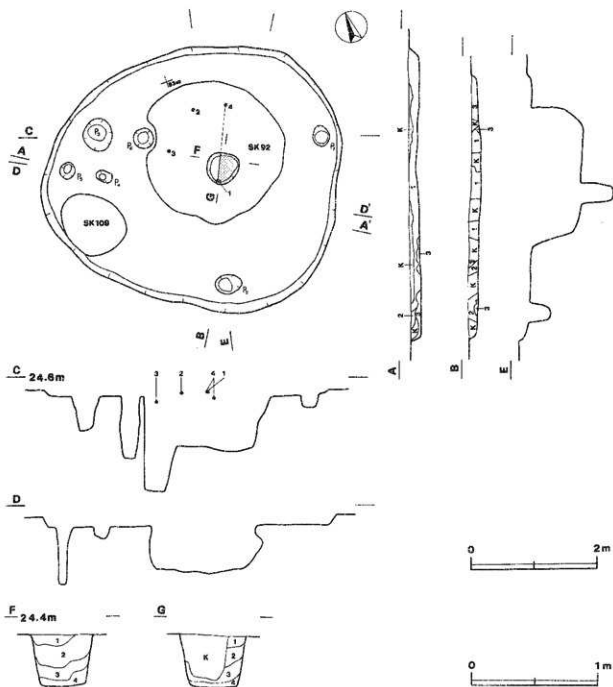
ピット 6 か所 (P₁~P₆)。壁寄りのP₁~P₃は直径34~52cmの円形、深さ22~58cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。また、壁寄りのP₄、やや内側に入るP₅、P₆は直径28~32cmの円形、深さ20~102cmと小規模であり、性格は不明である。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

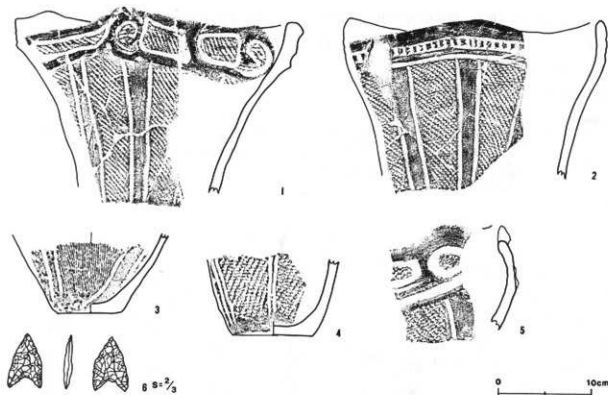
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、ローム大・中ブロック・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・炭化粒子中量、ローム大ブロック少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子微量

- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量



第12図 第10号住居跡実測図



第13図 第10号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて450点ほど出土している。第13図1の深鉢形土器は炉の上面から、2及び3の深鉢形土器は炉の北側付近の床面直上から、4の深鉢形土器は炉の上面及び炉の北側付近の床面直上から出土している。5は深鉢形土器の口縁部片である。1～3、5まではすべて本跡に伴うものと思われるが、4は他の土器よりも古い加曾利EⅡ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から6の石鏝及び剥片2点が出土している。

所見 本跡の炉は、第92号土坑の覆土を掘り込んで付設されており、規模及び平面形から当初は土器埋設炉であった可能性がある。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第13図 1	深鉢形土器	A (30.8)	口縁部から胴部上半にかけての破片。緩やかな波状口縁。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による渦巻文と長方形区画文で、区内に単筋L Rの縄文が施されている。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母・石英 褐色 普通	P54 20% 炉上面 PL23
	縄文土器	B (18.6)			
2	深鉢形土器	A (27.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。緩やかな波状口縁。口縁部は2条の沈線で区画され、区内に連続的突文が施されている。胴部は地文に複筋L R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P55 20% 炉北側付近床直上 PL24
	縄文土器	B (16.9)			
3	深鉢形土器	B (6.2)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に懸垂文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P56 20% 炉北側付近床直上 PL23
	縄文土器	C 6.8			
4	深鉢形土器	B (8.0)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に複筋L R Lの縄文が施され、3条あるいは2条単位の沈線を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 褐色 普通	P57 20% 炉北側付近床直上 PL24
	縄文土器	C 8.6			

図版番号	種 別	計 測 値				現存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第13図6	石 鏝	2.2	1.4	0.3	0.8	100	メノウ	覆土	Q13 PL23

第11号住居跡 (第14・15図)

位置 調査区の中央部, B3f_a区。

重複関係 本跡は第9号住居跡, 第93号土坑に掘り込まれており, これらの遺構より古い。

規模と平面形 長径5.30m, 短径4.50mの楕円形である。

長径方向 N-6°-E

壁 壁高は12~18cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

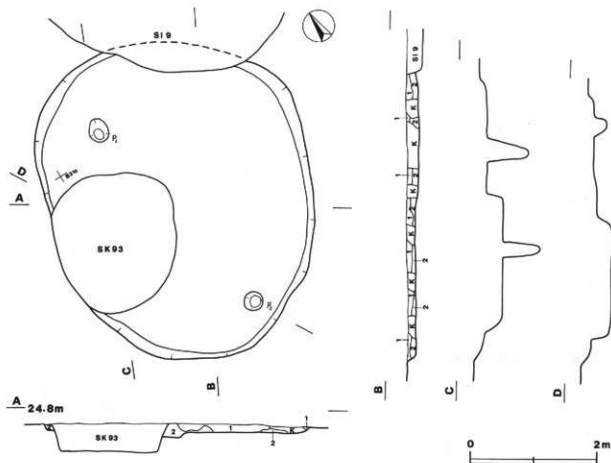
床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は直径30~40cmの円形, 深さ24~68cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

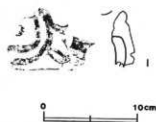
- | | | | |
|------|---------------------------------------|------|--|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 2 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 炭化物・炭化粒子少量 |
|------|---------------------------------------|------|--|



第14図 第11号住居跡実測図

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて200点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。第15図1は深鉢形土器の口縁部片で, 本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。



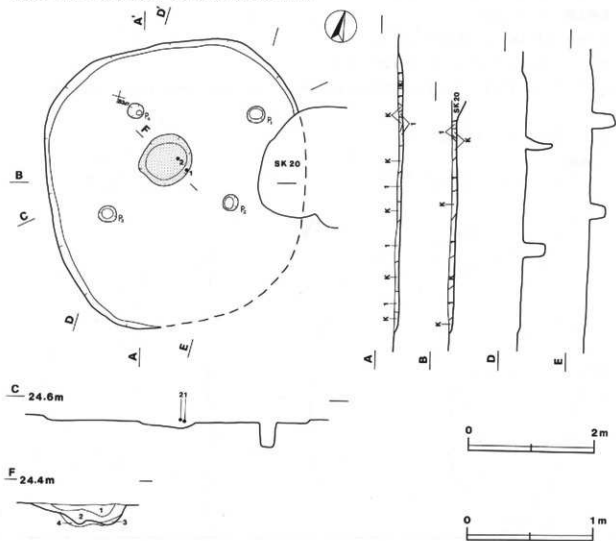
第15図 第11号住居跡出土遺物実測・拓影図

第12号住居跡 (第16・17図)

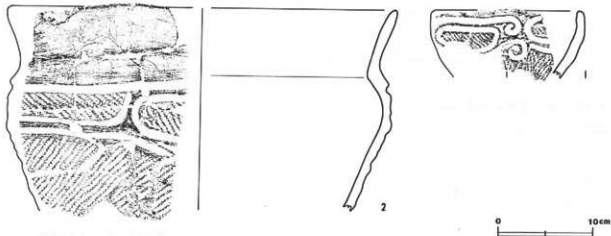
位置 調査区の中央部, B3d.区。

重複関係 本跡は第20号土坑に掘り込まれており, 第20号土坑より古い。

規模と平面形 長径4.48m, 短径4.12mの円形である。



第16図 第12号住居跡実測図



第17図 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図

長径方向 N-24°-W

壁 壁高は6～10cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央からやや北寄りに付設され、平面形は長径88cm、短径80cmの円形で、床面を18cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 3 赤褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量、焼土中・小ブロック中量、焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 4 赤褐色 | 炉床面下の火熱を受けた層 |

ピット 4か所 (P₁～P₄)。P₁～P₄は直径26～30cmの円形、深さ26～44cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

覆土 1層からなる。自然堆積である。

土層解説

- | | |
|------|--|
| 1 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土中・小ブロック・焼土粒子中量、焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
|------|--|

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて150点ほど出土している。第17図1の深鉢形土器及び2の鉢形土器は炉の上面から出土している。1、2とも本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	深鉢形土器	A (16.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は沈線による渦巻文と楕円区画文で、区画内に単筋R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 棕色 普通	P59 10% 炉上面 PL24
	縄文土器	B (7.1)			
2	鉢形土器	A (41.4)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は沈線で区画された無文帯で、「く」の字状に外傾する。胴部上端は沈線とそれに沿う沈線による楕円区画文と長方形区画文で、区画内に単筋R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P58 30% 炉上面 PL24
	縄文土器	B (21.5)			

第14-A号住居跡 (第18・19・20図)

位置 調査区の中央部、B3f₆区。

重複関係 本跡は第14-B号住居跡を掘り込んで構築されており、第14-B号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径7.80m、短径6.88mの楕円形である。

長径方向 N-52°-E

壁 壁高は12～22cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

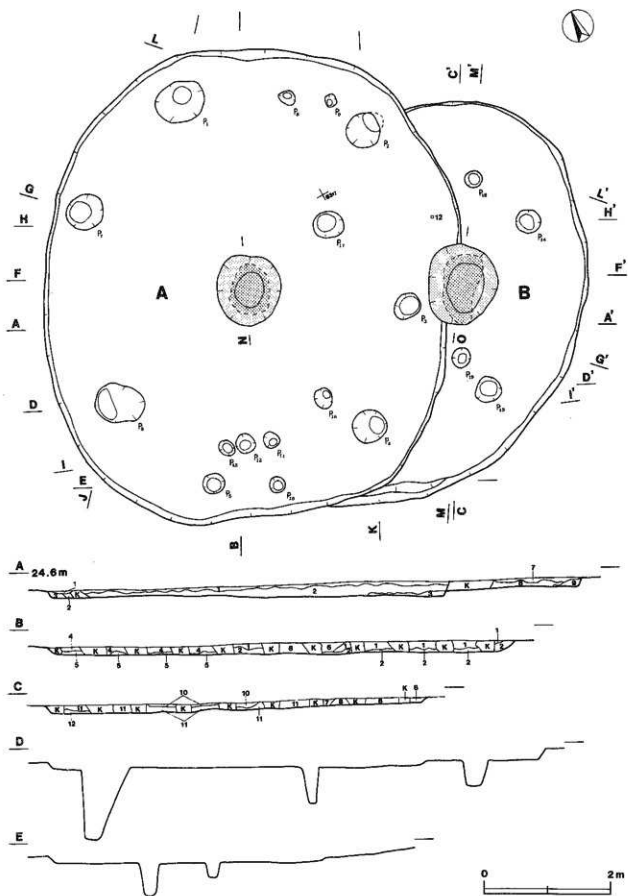
床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径116cm、短径104cmの楕円形で、床面を20cm掘り窪めた地床炉である。

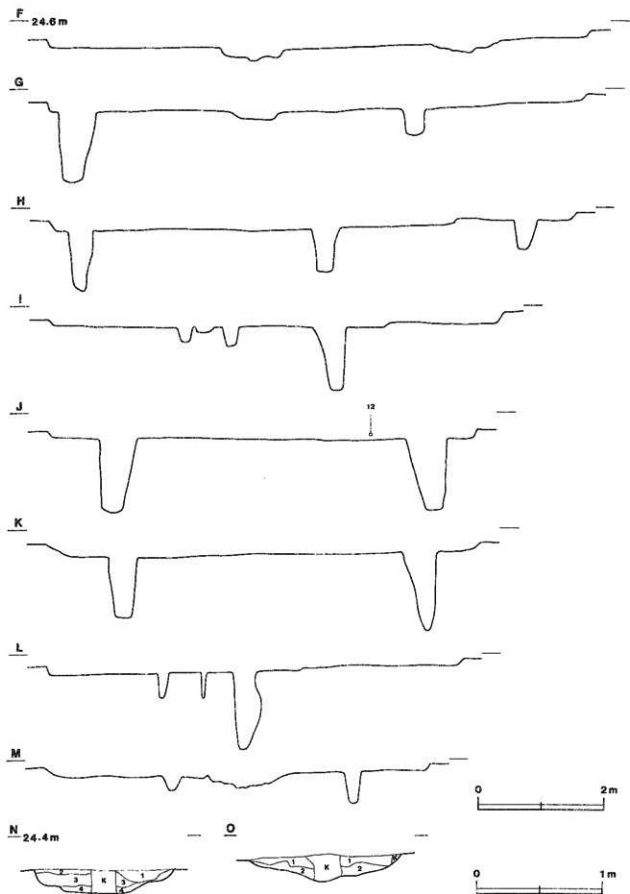
炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---|--------|--|
| 1 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 3 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子中量、ローム大ブロック・焼土大ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム中・小ブロック・焼土大ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量 |



第18图 第14—A·B号住居跡実測图(1)



第19图 第14—A·B号住居跡実測图(2)

ビット 13か所 (P₁~P₁₃)。壁寄りのP₁, P₂, P₃, P₄及びP₇は直径56~80cmの円形, 深さ102~128cmでやや大きく, 同じく壁寄りのP₅, P₆は直径36~46cmの円形, 深さ44~54cmでやや小さいが, いずれも規模や配列から主柱穴と考えられる。また, 壁寄りのP₈~P₁₀, やや内側に入るP₁₁~P₁₃は直径22~32cmの円形, 深さ10~42cmと小規模であり, 性格は不明である。

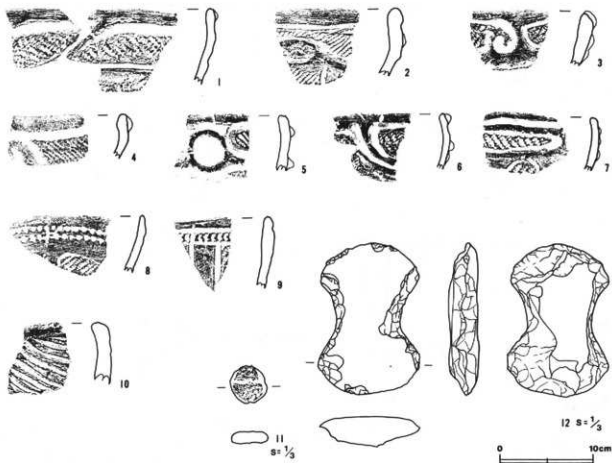
覆土 6層からなる。自然堆積である。

土層解説

1 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量	4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
2 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量	5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
3 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量	6 極暗褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土中ブロック・炭化物少量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて多量に出土している。点数は本跡及び14-B号住居跡の両方合わせて1450点ほどになる。炉付近の覆土下層から床面直上及び炉の上面にかけて集中して出土している。第20図1~10は深鉢形土器の口縁部片である。10の口縁部片は集合沈線文が施された曾利系の土器であるが, 1~10まですべて本跡に伴うものと思われる。また, 11の土製円板は北部の覆土中から, 12の打製石斧は東壁寄りの覆土下層から出土している。その他に, 覆土中から剝片7点が出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。



第20図 第14-A号住居跡出土遺物実測・拓影図

第14-A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第20図11	土製円板	3.0	3.0	1.0	8.5	100	北部覆土	DP16 PL24

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第20図12	打製石斧	12.2	8.0	2.3	291.0	100	安山岩	東壁寄り覆土下層	Q14 PL24

第14-B号住居跡(第18・19・21図)

位置 調査区の中央部, B3f.区。

重複関係 本跡は第14-A号住居跡に掘り込まれており, 第14-A号住居跡より古い。

規模と平面形 長径6.90m, 短径(4.1)mの円形と思われる。

長径方向 N-52°-E

壁 壁高は12~20cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

炉 中央付近に付設され, 平面形は長径130cm, 短径112cmの円形で, 床面を20cm掘り窪めた床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1 赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量, ローム中ブロック・焼土小ブロック中量, ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 2 赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
|-------|--|-------|--|

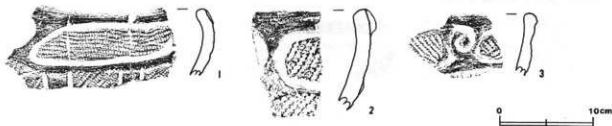
ピット 6か所(P₁₄~P₁₉)。壁寄りのP₁₄, P₁₅, 第14-A号住居跡内のP₁₆, P₁₇は直径32~50cmの円形, 深さ42~70cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。また, やや内側に入るP₁₈, P₁₉は直径30~32cmの円形, 深さ22~52cmと小規模であり, 性格は不明である。

覆土 6層からなる。自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|--|--------|---|
| 7 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量, 焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
| 8 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子中量, ローム大ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子少量 | 11 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 9 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子中量, ローム中ブロック・炭化粒子少量 | 12 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 炭化物・炭化粒子微量 |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて多量に出土している。土器は炉付近の覆土下層から床面直上及び炉の上面にかけて集中して出土している。第21図1~3は深鉢形土器の口縁部片で, すべて本跡に伴うものと思われる。



第21図 第14-B号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられ、先の第14-A号住居跡とあまり時期差はないものと思われる。

第15号住居跡 (第22・23図)

位置 調査区の中央部, B3f区。

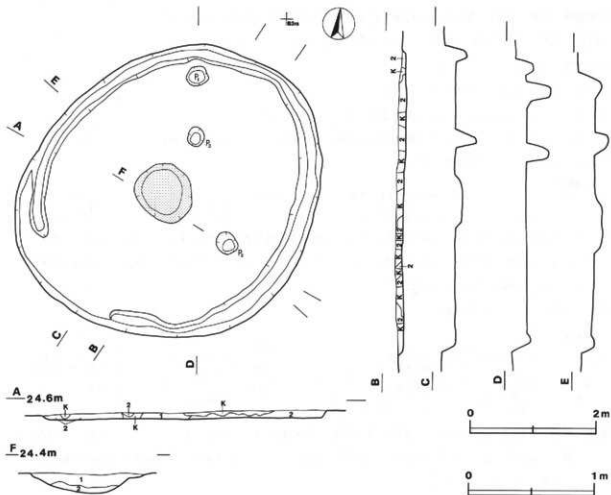
規模と平面形 長径5.14m, 短径4.28mの楕円形である。

長径方向 N-52°-E

壁 壁高は16~28cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

壁溝 南西壁を除いて、壁下を周回している。上幅約22cm, 下幅約10cm, 深さ約12cmで、断面形は「U」字形である。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。



第22図 第15号住居跡実測図



第23図 第15号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉 中央付近に付設され、平面形は長径98cm、短径90cmの円形で、床面を16cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム中ブロック・焼土中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 2 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒少量、ローム中ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量

ピット 3か所 (P₁~P₃)。壁寄りのP₁、P₂は直径30~38cmの円形、深さ24~40cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。また、やや内側に入るP₃は直径32cmの円形、深さ36cmと小規模であり、性格は不明である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム大ブロック・焼土大・中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて450点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。第23図1の深鉢形土器は北東部覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剥片1点が出土している。

所見 本跡の壁溝は、南西壁下だけ切れていることから、南西方向に開いた出入口部があった可能性がある。

時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第23図 1	深鉢形土器	A (19.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は沈線による楕円形	砂粒・長石・雲母	P201 10% 北東部覆土 PL49
	縄文土器	B (6.6)	面文で、区内内に単筋R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨研帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	棕色 普通	

第16号住居跡 (第24・25図)

位置 調査区の中央部、B3d区。

規模と平面形 長径7.52m、短径6.70mの楕円形と思われる。北西側1/4は調査区外となっている。

長径方向 N-84°-E

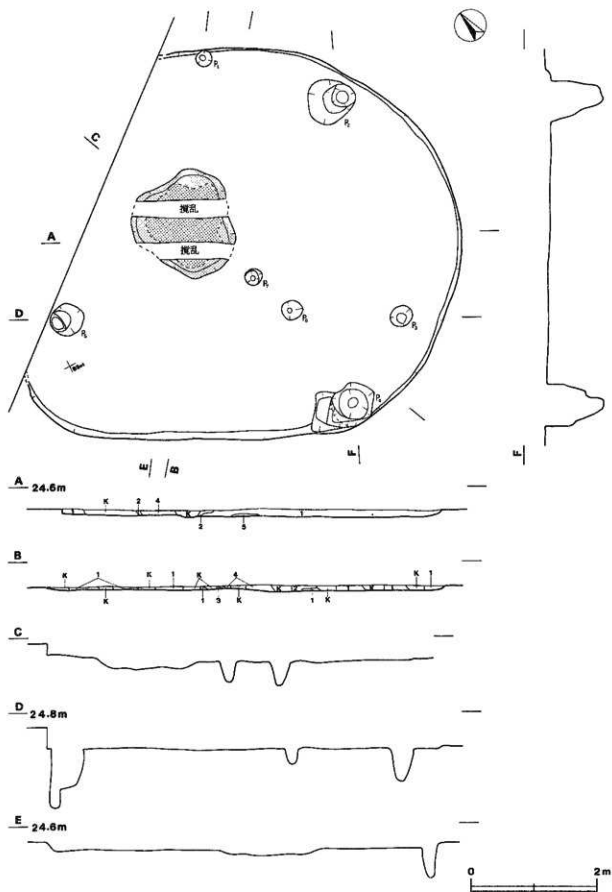
壁 壁高は4~16cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径176cm、短径164cmの不整形円形で、床面を18cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 7か所 (P₁~P₇)。壁寄りのP₂、P₄及びP₅は直径56~80cmの円形、深さ86~96cmでやや大きく、同じく壁寄りのP₁、P₃は直径26~38cmの円形、深さ50~54cmでやや小さいが、いずれも規模や配列から主柱穴と考えられる。また、やや内側に入るP₆、P₇は直径28~36cmの円形、深さ36~40cmと小規模であり、性格は不明である。

覆土 5層からなる。自然堆積である。



第24图 第16号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | 5 におい黄褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子中量 | | |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて450点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。第25図1のミニチュア土器は覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剥片4点が出土している。



第25図 第16号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第25図 1	ミニチュア土器 縄文土器	B (1.9) C (1.4)	口縁部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり、球形を呈する。胴部及び底部外・外面指ナデ。内面に輪轆み痕あり。	砂粒・長石・霞母 にふい黄褐色 普通	P60 40% 覆土 PL24

第18号住居跡 (第26・27図)

位置 調査区の中央部、B3h₈区。

重複関係 本跡は第90、98号土坑に掘り込まれており、これらの土坑より古い。

規模と平面形 長径(4.5)m、短径(2.5)mの円形と思われる。南東側半分は調査区外となっている。

長径方向 不明。

壁 壁高は14~20cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径72cm、短径58cmの楕円形で、床面を36cm掘り込んで土器を埋設した土器埋設炉である。炉床面及び炉体土器は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 明赤褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック微量 | 6 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |

ピット 2か所 (P₁~P₂)。P₁、P₂は直径36~38cmの円形、深さ26~28cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

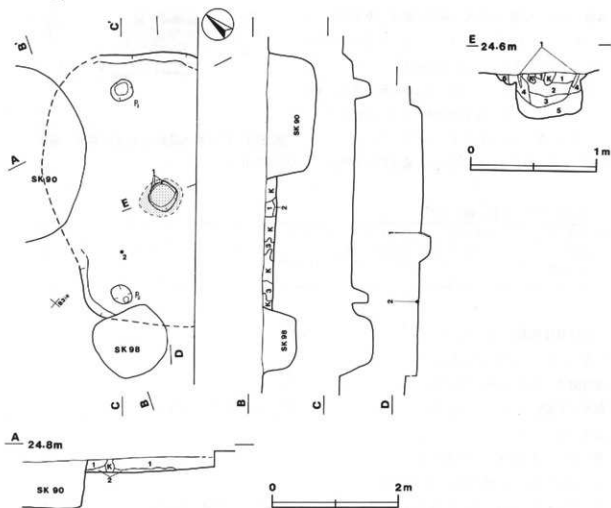
覆土 3層からなる。自然堆積である。

土層解説

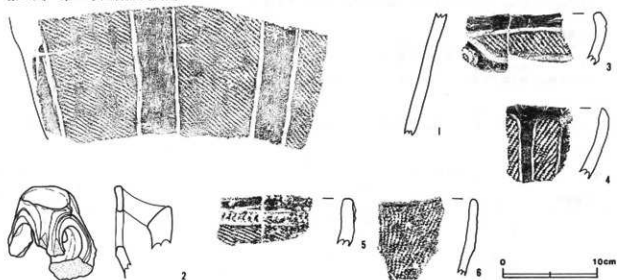
- | | | | |
|------|---|------|--|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | | |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて700点ほど出土している。第27図1の深鉢

形土器は炉体土器である。また、2の深鉢形土器の把手は炉の西側付近の床面直上から出土している。3～6は深鉢形土器の口縁部片である。1、3～6まではすべて本跡に伴うものと思われるが、2は他の土器よりも古い加曾利E I式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剥片1点が出土している。



第26図 第18号住居跡実測図



第27図 第18号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (13.1)	割断片。割断は地文に単筋LRの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を直線状に巻垂している。	砂質・灰石・雲母 橙色 普通	P61 20% 6 ^号 体土器 PL24
2	深鉢形土器 縄文土器	B (9.8)	把手部片。把手は4つ孔の空く中空把手で、孔の周囲に隆帯や沈線を巡らしている。	砂粒・灰石・雲母 に白い橙色 普通	P62 5% 伊西側式東廻土 PL24

第19号住居跡 (第28・29図)

位置 調査区の中央部、B3j,区。

重複関係 本跡は第97, 103, 105, 106号土坑に掘り込まれており、これらの土坑より古い。

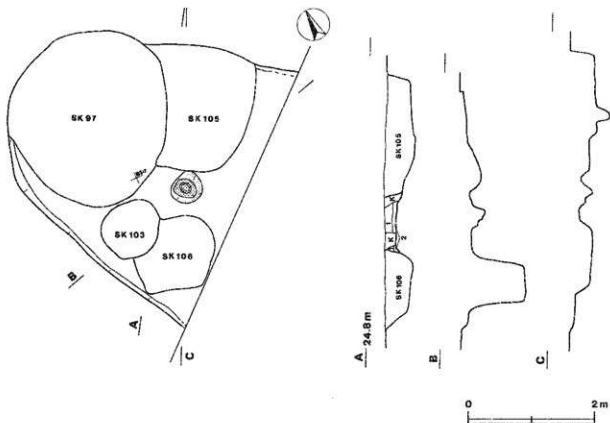
規模と平面形 長径(4.1)m, 短径(4.5)mの楕円形と思われる。南東側半分は調査区外となっている。

長径方向 N-42°-W

壁 壁高は10~12cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径52cm, 短径50cmの円形で、床面を24cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。



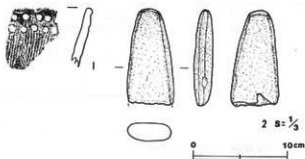
第28図 第19号住居跡実測図

覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黄褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて100点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。第29図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から2の磨製石斧及び剥片4点が出土している。



第29図 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計 測 値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第29図2	磨製石斧	(7.8)	(3.8)	1.4	(69.2)	90	安山岩	覆土	Q16 PL24

第20号住居跡 (第30・31図)

位置 調査区の中央部, B3h区。

規模と平面形 長径4.58m, 短径3.84mの楕円形である。

長径方向 N-18°-W

壁 壁高は8~12cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

炉 中央からやや北西寄りに付設され、平面形は長径96cm, 短径50cmの楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 7か所(P₁~P₇)。壁寄りのP₁~P₃は直径22~42cmの円形、深さ38~62cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。また、やや内側に入るP₄, P₅は直径20~26cmの円形、深さ38~48cmと小規模であり、性格は不明である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

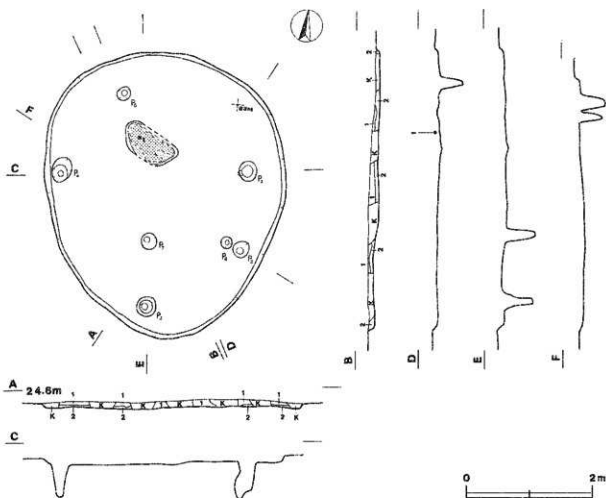
- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大・中ブロック微量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて200点ほど出土している。第30図1の深鉢形土器は炉の上面から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剥片1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 1式期と考えられる。



第30図 第20号住居跡出土遺物実測・拓影図



第31図 第20号住居跡実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (15.7)	口縁部下平から胴部にかけての破片。口縁部下平は地文に単筋R Lの縄文が施され、その上に沈線に沿わせた縞帯を波状及び帯状に貼付している。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・炭粉 により褐色 普通	P66 40% 炉上面 PL24

第21号住居跡 (第32・33図)

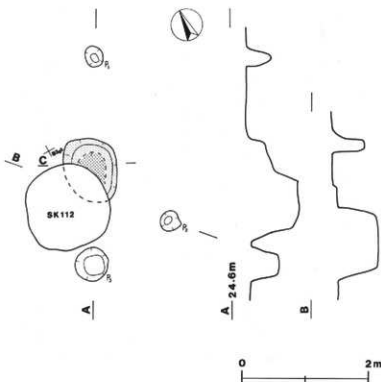
位置 調査区の中央部, B3g区。

重複関係 本跡は第112号土坑に掘り込まれており, 第112号土坑より古い。

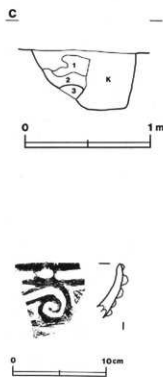
規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

炉 P₁とP₃を結ぶライン上のほぼ中央に付設され, 平面形は長径114cm, 短径(90)cmの楕円形で, 確認面から30cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。



第32図 第21号住居跡実測図



第33図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉土層解説

1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子中量、焼土中ブロック・炭化物少量、焼土大ブロック微量

2 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム中ブロック・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子中量、ローム大ブロック少量

3 赤褐色 伊床面下の火熱を受けた層

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は直径34~56cmの円形、深さ40~52cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から150点ほど出土している。第33図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基とピット3か所を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E II式期と考えられる。

第23号住居跡 (第34・35図)

位置 調査区の中央部、B3₂区。

重複関係 本跡は第114号土坑を掘り込んで構築されており、第114号土坑より新しい。

規模と平面形 長径4.44m、短径3.82mの楕円形である。

長径方向 N-10°-E

壁 壁高は10~14cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 中央からやや北西寄りに付設され、平面形は長径82cm、短径70cmの楕円形で、床面を14cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

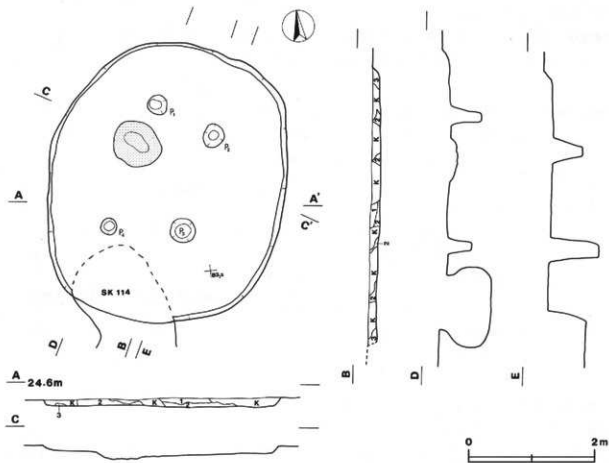
ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は直径28~42cmの円形、深さ40~80cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

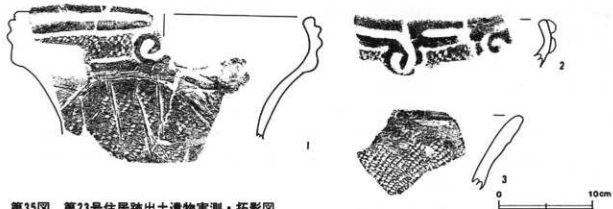
土層解説

- | | | | | | |
|---|----|--|---|----|----------------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子微量 | 3 | 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量,焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量,焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 | | | |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて450点ほど出土している。第35図1の深鉢形土器は南西部の覆土中から出土している。2, 3は深鉢形土器の口縁部片である。1~3まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から刺片6点が出土している。



第34図 第23号住居跡実測図



第35図 第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図録番号	品 種	計測値(cm)	題 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第35図 1	海貝形土器	A (32.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は地文に単筋R.L.の縄文が施され、その上に沈線に沿った漆者を渦巻状及び帯状に貼付しており、口縁部直下にコブ状突起をもつ。胴部上端の一部に単筋R.L.の縄文が認められる。胴部は地文に単筋R.L.の縄文が施されている。	砂粒・灰粒・雲母・石英 にふいば色 普通	I'67 20% 南西部覆土 PL25
	縄文土器	B (13.0)			

第24号住居跡 (第36図)

位置 調査区の中央部、B3₂区。

重複関係 本跡は第113号土坑を掘り込んで構築されており、第113号土坑より新しい。また、第122号土坑に掘り込まれており、第122号土坑より古い。

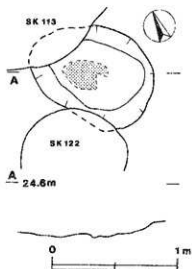
規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げていたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

炉 平面形は長径(100)cm、短径(80)cmの楕円形で、確認面から10cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

遺物 縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。



第36図 第24号住居跡炉実測図

第25号住居跡 (第37・38図)

位置 調査区の中央部、B3₃区。

重複関係 本跡は第43号住居跡を掘り込んで構築されており、第43号住居跡より新しい。また、第37号土坑に掘り込まれており、第37号土坑より古い。

規模と平面形 長径5.06m、短径3.68mの楕円形と思われる。

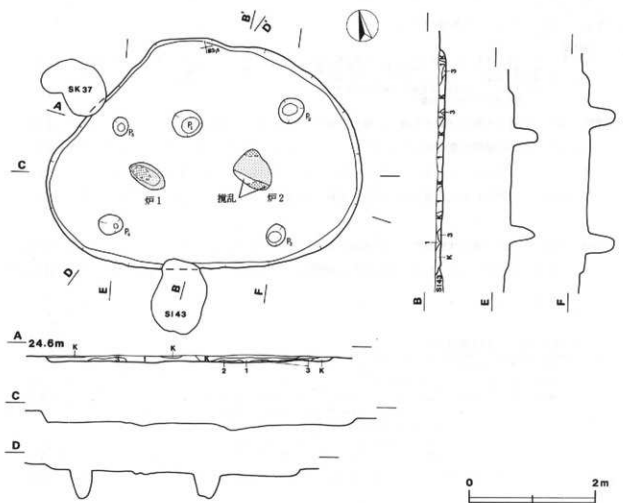
長径方向 N-80°-W

壁 壁高は8~12cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

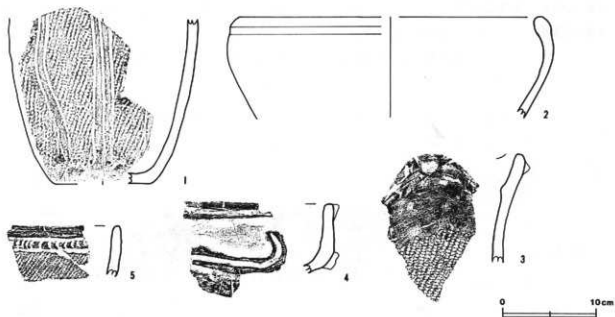
床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 2か所。炉1は中央からやや西寄りに付設され、平面形は長径64cm、短径34cmの楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。炉2は中央からやや東寄りに付設され、平面形は長径66cm、短径56cmの楕円形で、床面を12cm掘り窪めた地床炉である。遺存状態が悪く、炉床面の赤変硬化もあまり認められない。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。壁寄りのP₁~P₅は直径32~48cmの円形、深さ40~46cmで、規模や配列から主柱穴と



第37图 第25号住居跡実測图



第38图 第25号住居跡出土遺物実測・拓影图

考えられる。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・焼土粒子中量、焼土大・中・小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子中量、焼土中ブロック少量、焼土大ブロック微量

3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて400ほど出土している。第38図1及び2の深鉢形土器は南東部の覆土中から出土している。3～5は深鉢形土器の口縁部片である。1、2までは本跡に伴うものと思われるが、3、4は他の土器よりも古い加曽利EⅠ式に属するもの、また、5は他の土器よりも新しい加曽利EⅢ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剥片2点が出土している。

所見 本跡の炉2は、遺存状態が悪く、炉床面の赤変硬化もあまり認められないことから、使用期間は短く、すぐに炉1に作り替えられたものと思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曽利EⅡ式期と考えられる。

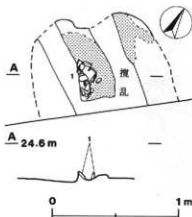
第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第38図 1	深鉢形土器	B (17.5)	胴部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単筋RLの縄文が施され、3条の沈線で区画された幅の狭い磨消帯を直線状に、また、2条の沈線で区画された幅の狭い磨消帯を波状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P69 20% 南東部覆土 PL25
	縄文土器	C (10.2)			
2	鉢形土器	A (32.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部と胴部の境に1条の沈線を巡らし、口縁部及び胴部とも横位の磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 にふい橙色 普通	P68 20% 南東部覆土 PL25
	縄文土器	B (10.8)			

第26号住居跡 (第39・40図)

位置 調査区の南西部、C3b₂区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。



第39図 第26号住居跡炉実測図



第40図 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図

長径方向 不明。

炉 平面形は長径114cm, 短径(80)cmの楕円形で, 土器を埋設した土器埋設炉である。炉床面及び炉体土器は火熱を受け, 赤変硬化している。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から250点ほど出土している。第40図1の深鉢形土器は炉体土器である。2は深鉢形土器の口縁部片である。1, 2とも本跡に伴うものと思われる。その他に, 割片1点が出土している。

所見 本跡は, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが, 炉1基を検出したことよって, 竪穴住居跡であると思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E II式期と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第40図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (7.1)	胴部片。胴部は地文に複軸LRLの縄文が施され, 3条の沈線で区画された幅の狭い磨消帯を直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P70 20% 炉体土器 PL25

第28号住居跡 (第41・42図)

位置 調査区の南西部, C3b₂区。

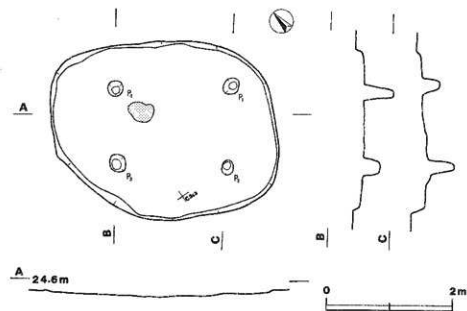
規模と平面形 長径3.90m, 短径3.06mの楕円形である。

長径方向 N-28°-W

壁 壁高は6~24cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

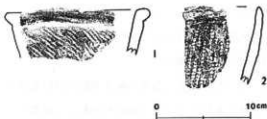
炉 中央からやや北西寄りに付設され, 平面形は長径42cm, 短径32cmの不整楕円形で, 床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。



第41図 第28号住居跡実測図

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は直径26~32cmの円形、深さ28~50cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて250点ほど出土している。第42図1の深鉢形土器は北東部の覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。



第42図 第28号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I式期と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	深鉢形土器 縄文土器	A [15.0] B (4.8)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部上端に縁帯を帯状に貼付している。胴部は地文に無節Lの縄文が施されている。	砂粘・長石・骨母・石英 にふい・褐色 普通	P71 10% 北東部覆土 PL25

第29号住居跡 (第43・44図)

位置 調査区の中央部、B2j₆区。

重複関係 本跡は第1、2号陥し穴を掘り込んで構築されており、これらの陥し穴より新しい。また、第102号土坑に掘り込まれており、第102号土坑より古い。

規模と平面形 長径(3.8)m、短径3.40mの楕円形と思われる。

長径方向 N-18°-E

壁 壁高は10~16cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

炉 中央付近に付設され、平面形は長径(100)cm、短径(50)cmの楕円形で、床面を18cm掘り窪めて周りに縁を配置した石囲炉である。周縁は4個体遺存しており、すべて原位置を保っている。炉床面及び周縁は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は直径40~86cmの円形、深さ60~82cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

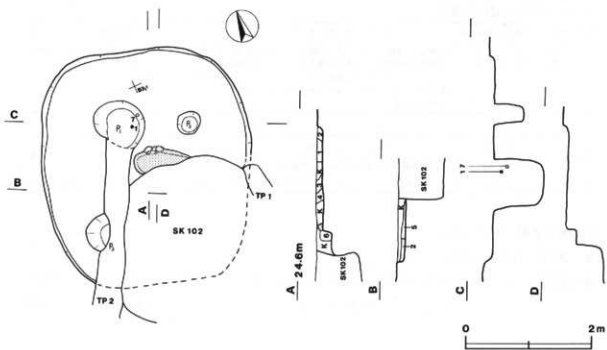
覆土 6層からなる。自然堆積である。

土層解説

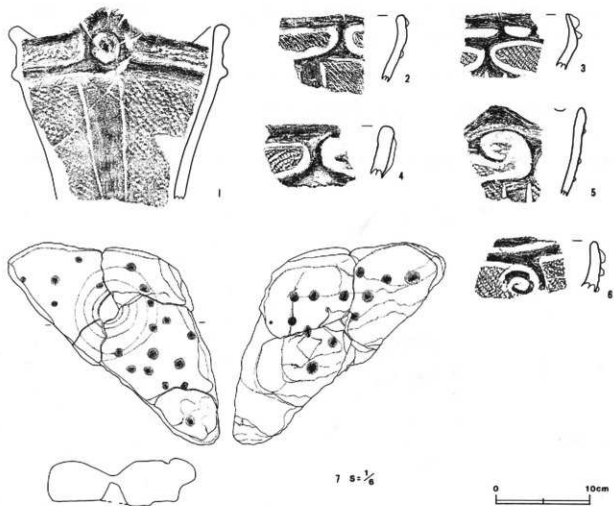
1 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量、焼土大・中・小ブロック微量	4 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量、炭化物微量
2 褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子多量	5 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
3 褐色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量	6 暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて400点ほど出土している。第44図1の深鉢形土器及び7の凹石はP₁の覆土から出土している。2~6は深鉢形土器の口縁部片である。1~5まではすべて本跡に伴うものと思われるが、6は他の土器よりも古い加曾利E II式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剥片2点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。



第43图 第29号住居跡実測图



第44图 第29号住居跡出土遺物実測・拓影图

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第44図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (23.0) B (18.4)	口縁部から胴部上平にかけての破片。口縁部は縁線が区画され、区画内に縦線L R Lの縄文が施されており、隆線を円形に貼付したところの口縁部に舌状突起をもつ。胴部は地文に縦線L R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	胎土・長石・雲母 により黄褐色 普通	P72 20% P ₁ 覆土 PL25

図版番号	種 別	計 測 値				埋存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第44図7	凹 石	32.5	34.5	7.5	(7100.0)	90	雲母片岩	P ₁ 覆土	Q19 PL25

第30号住居跡 (第45・46図)

位置 調査区の南西部、C3b₁区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

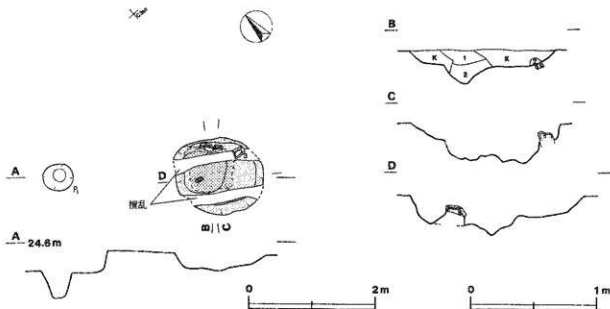
炉 平面形は長径150cm、短径122cmの楕円形で、確認面から32cm掘り込まれており、周りに礫を配置した石囲炉である。周壁は4個体遺存しているが、攪乱を受けて原位置を保っているのは2個体だけである。炉床面及び周壁は火熱を受け、赤変硬化している。

伊土層解説

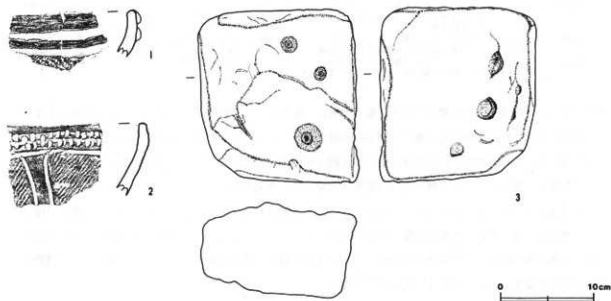
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子少量 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック微量

ピット P₁は直径34cmの円形、深さ40cmで、1か所だけしか確認できなかったが、規模から主柱穴と考えられる。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から200点ほど出土している。第46図1、2は深鉢形



第45図 第30号住居跡実測図



第46図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。3の凹石は攪乱を受けて原位置を保ってはいなかったが、石囲炉に使用されていたものと考えられる。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基とピット1か所を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第46図3	凹石	18.5	16.9	11.3	5700.0	100	雲母片岩	伊藤石	Q20 PL26

第32号住居跡 (第47・48図)

位置 調査区の南西部、C3d区。

重複関係 本跡は第110号土坑に掘り込まれており、第110号土坑より古い。

規模と平面形 長径(5.3)m, 短径4.48mの楕円形と思われる。南西側1/3は調査区外となっている。

長径方向 N-52°-E

壁 壁高は12~22cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

炉 中央からやや北東寄りに付設され、平面形は長径96cm, 短径82cmの楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は直径38~64cmの円形、深さ44~72cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。また、P₃とP₄の間に位置するP₅は直径34cmの円形、深さ48cmと小規模であり、性格は不明である。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

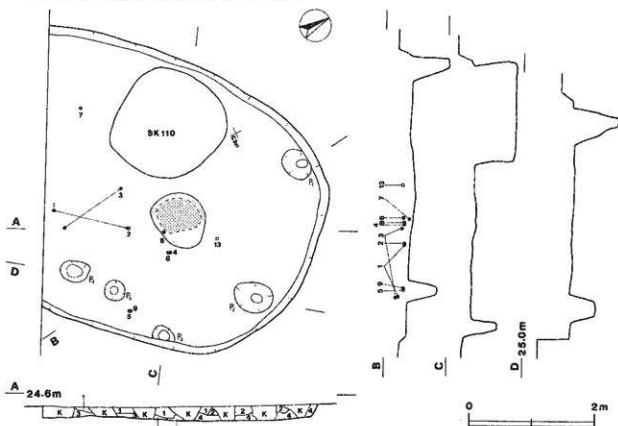
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、ローム大ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック・炭化物少量

- 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量、ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子多量、ローム中・小ブロック・焼土中・小ブロック中量、焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて800点ほど出土している。第48図1及び3の深鉢形土器は炉の南側付近の覆土下層から中層にかけて、2、4及び8の深鉢形土器は炉の南側付近の覆土下層から、5の深鉢形土器及び9の器台形土器は東壁寄りの床面直上から、6の深鉢形土器の把手は炉の上部の覆土下層から、7の深鉢形土器の把手は西壁寄りの床面直上から出土している。10~12は深鉢形土器の口縁部片である。1~12まですべて本跡に伴うものと思われる。また、13の磨製石斧は炉の東側付近の覆土下層から、14の磨石は北東区の覆土中から出土している。その他に、覆土中から剥片13点が出土している。

所見 本跡の南西部分だけは調査できなかったが、比較的良好な遺物が遺存していた。時期は、出土物から縄文時代中期後半の加曾利E1式期と考えられる。



第47図 第32号住居跡実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 22.4 B (18.4)	胴部下半から底部にかけて欠損。口縁部上端に幅の広い隆帯を帯状に貼付している。胴部は地文に単即R Lの縄文が施されている。	砂粒・灰石・雲母・石英 褐色 普通	P73 40% 伊勢原付近遺跡下層 PL26
2	深鉢形土器 縄文土器	A (22.0) B (13.5)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は2条の沈線で区画された無文帯である。胴部は地文に単即R Lの縄文が施され、その中に1条あるいは2条単位の沈線文様が描かれている。	砂粒・灰石・雲母 にぶい褐色 普通	P74 20% 伊勢原付近遺跡下層 PL26



第48图 第32号住居跡出土遺物実測・拓影图

図版番号	券種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第48図 3	深鉢形土器 縄文土器	A (21.0) B (11.6)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部に地に単筋R Lの縄文が施され、その上に沈線をはわせた隆帯を渦巻状及び帯状に貼付している。上方が隆帯、下方が2条の沈線で区画された胴部は無文帯である。胴部は地に単筋R Lの縄文が施され、その中に1〜3条単位の沈線文様が描かれている。	砂粒・長石・雲母 によい褐色 普通	P202 20% 伊東側付置土下層 PL26
	深鉢形土器 縄文土器	A (17.6) B (7.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。緩やかな波状口縁。口縁部上端に隆帯を帯状に貼付し、口縁部直下は無文帯である。胴部は地に単筋R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 によい褐色 普通	P75 10% 伊東側付置土下層 PL26
5	深鉢形土器 縄文土器	A (28.6) B (6.5)	口縁部片。口縁部は地に単筋R Lの縄文が施され、口縁部上端に片巻をなぞる隆起線、下端に内面をなぞる隆起線をそれぞれ帯状に貼付して区画し、その中に隆帯を波状に貼付している。口唇部に2条の明瞭な貼り付け痕をもつ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P203 10% 東寄り床面直上 PL26
	深鉢形土器 縄文土器	B (15.8)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は5つ孔の空く中空把手で、孔の周囲に隆帯や沈線を巡らしている。口縁部は地に単筋R Lの縄文が施され、把手から絞隆帯を貼付している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P76 5% 伊上部覆土下層 PL26
7	深鉢形土器 縄文土器	B (7.8)	把手部片。把手は上下に付く機状把手で、中央上位には沈線による渦巻文が施され、左右両側には1条の沈線が施されている。	砂粒・長石・雲母 によい褐色 普通	P77 5% 西寄り床面直上 PL27
8	深鉢形土器 縄文土器	B (8.2) C 9.6	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地に単筋R Lの縄文が施されている。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P78 20% 伊東側付置土下層 PL27
	磨舌形土器 縄文土器	A 17.4 B 5.4 C 16.8	脚部は直線的に開き、中位に透かし孔が5孔空く。器受部上面は中央が皿状に凹み、摩滅が著しい。器受及び脚部とも横位のナデが施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 によい褐色 普通	P79 80% 東寄り床面直上 PL27

図版番号	種別	計 測 値				焼成率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第48図13	磨製石斧	(5.5)	(4.9)	(3.0)	(102.6)	40	砂岩	伊東側付置土下層	Q22 PL26
14	磨石	5.3	5.3	4.9	201.6	100	安山岩	北東区覆土	Q23 PL26

第33号住居跡 (第49・50図)

位置 調査区の南西部、C2f区。

重複関係 本跡は第143号土坑を掘り込んで構築されており、第143号土坑より新しい。また、第81、130号土坑に掘り込まれており、これらの土坑より古い。

規模と平面形 長径(6.4)m、短径(4.7)mの楕円形と思われる。東側1/4は調査区外となっている。

長径方向 N-12°-E

壁 壁高は12~14cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 炉の周囲が長径2.98m、短径2.46m、深さ約20cmにわたって楕円形に掘り込まれており、2つの段をもつ有段式竈穴住居跡の様相を呈している。中央の低い床面も、外側の高い床面も両方とも平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 2か所。炉1は低い床面の中央からやや東寄りに付設され、平面形は長径80cm、短径70cmの楕円形で、床面を14cm掘り窪めて周りに礫や土器片を配置した石・土器囲炉である。周縁は9個体遺存しており、一番北に位置する1個体を除いて8個体は原位置を保っている。また、土器片は3片遺存しており、すべて原位置を保っている。炉床面、周縁及び土器片は火熱を受け、赤変硬化している。炉2は炉1の南東に隣接して付設され、平面形は長径64cm、短径42cmの楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁, P₂は直径70~74cmの円形、深さ56~66cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。また、壁際のP₃, P₄は直径26~30cmの円形、深さ48~58cmと小規模であり、性格は不明である。

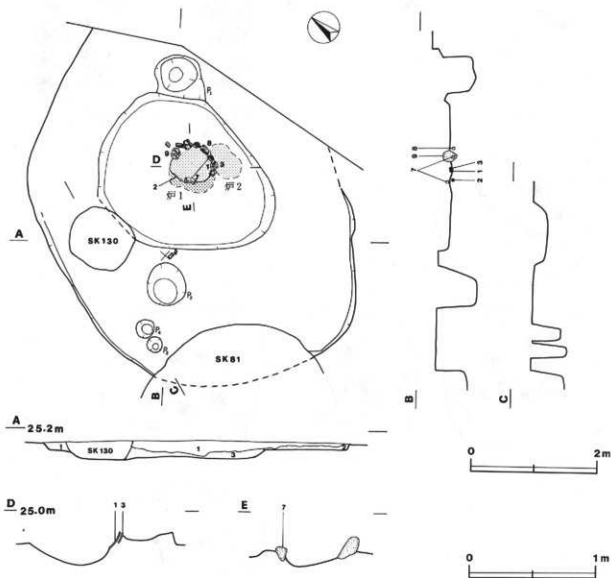
覆土 3層からなる。自然堆積である。

土層解説

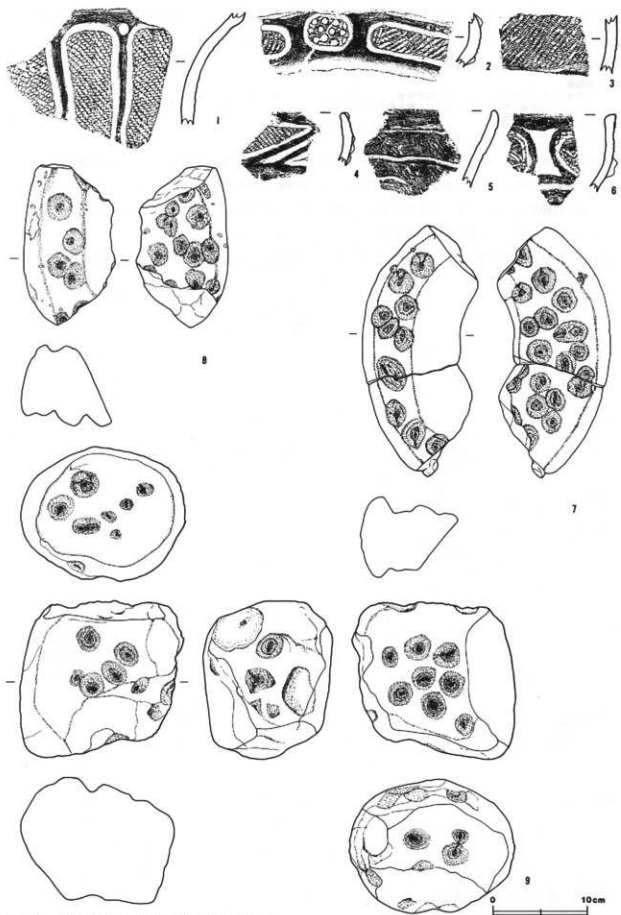
- | | | | |
|-------|---|------|---|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、堆土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて550点ほど出土している。第50図1, 2, 3の深鉢形土器, 7, 8の石皿及び9の凹石は石・土器囲炉に使用されていたものである。4~6は深鉢形土器の口縁部片である。1~5まではすべて本跡に伴うものと思われるが、6は他の土器よりも古い阿玉台Ⅱ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、刺片1点が出土している。

所見 本跡は、当遺跡唯一の有段式竪穴住居跡である。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。



第49図 第33号住居跡実測図



第50图 第33号住居跡出土遺物実測・拓影図

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第50図7	石皿	(26.1)	(11.3)	8.6	(2550.0)	20	安山岩	炉閉石	Q24 PL27
8	石皿	(17.1)	(9.8)	8.6	(1360.0)	10	安山岩	炉閉石	Q25 PL27
9	凹石	16.7	17.5	13.8	5200.0	100	花崗岩	炉閉石	Q26 PL27

第37号住居跡 (第51・52図)

位置 調査区の南西部, C2₁区。

重複関係 本跡は第132, 133号土坑を掘り込んで構築されており, これらの土坑より新しい。

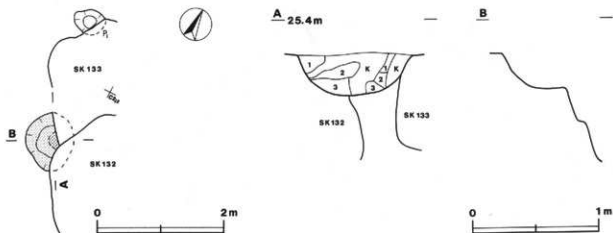
規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

炉 平面形は長径94cm, 短径[80]cmの楕円形で, 確認面から30cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

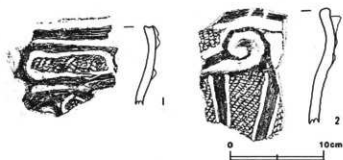
- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量, 焼土中ブロック・炭化物中量, ローム大ブロック・焼土大ブロック微量
- 2 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム中ブロック・焼土大・中ブロック中量, ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量, 炭化粒子中量, 炭化物少量



第51図 第37号住居跡実測図

ビット P₁は直径50cmの円形, 深さ50cmで, 1か所だけしか確認できなかったが, 規模から主柱穴と考えられる。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から250点ほど出土している。第52図1, 2は深鉢形土器の口縁部片で, 本跡に伴うものと思われる。その他に, 剥片2点が出土している。



第52図 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基とピット1か所を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EIII式期と考えられる。

第40号住居跡 (第53・54図)

位置 調査区の北東部、A4f₃区。

規模と平面形 長径5.00m、短径3.92mの楕円形である。

長径方向 N-14°-W

壁 壁高は24~32cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

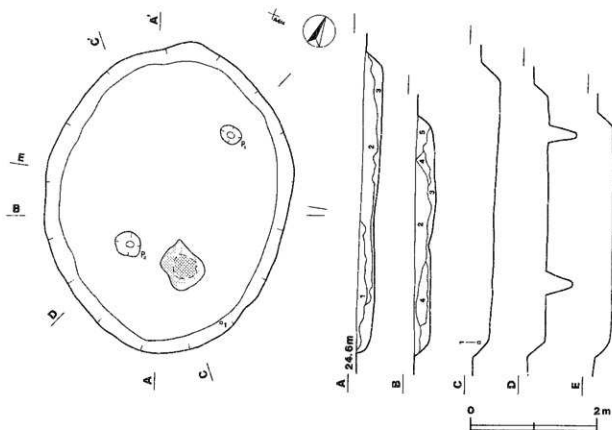
炉 中央からやや南東寄りに付設され、平面形は長径82cm、短径70cmの楕円形で、床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は直径36~46cmの円形、深さ44~46cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

土層解説

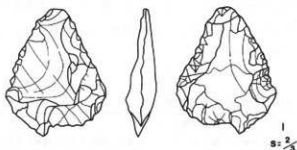
- | | | | |
|-------|--|------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量 | 3 褐色 | ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量 |
| | | 5 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子微量 |



第53図 第40号住居跡実測図

遺物 縄文土器片が覆土中層から床面にかけて10点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。また、第54図1の播器は南東壁寄りの覆土中層から出土している。その他、覆土中から剝片4点が出土している。

所見 本跡は、重複もなく遺構全体を調査できたにもかかわらず、遺物の遺存状況はあまり良好とは言えなかった。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。



第54図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第54図1	播器	5.0	4.0	1.2	16.0	100	チャート	南東壁寄り覆土中層	Q27 PL27

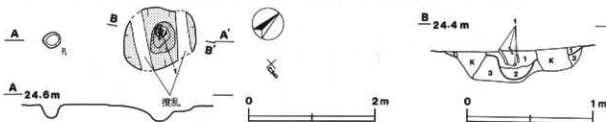
第41号住居跡 (第55・56図)

位置 調査区の南西部, C3d₂区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

炉 平面形は長径126cm、短径100cmの楕円形で、確認面から24cm掘り込まれており、土器を埋設した土器埋設炉である。炉床面及び炉体土器は火熱を受け、赤変硬化している。



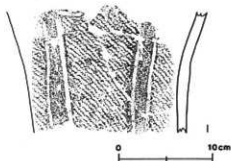
第55図 第41号住居跡実測図

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量
- 2 明褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 3 赤褐色 炉床面下の火熱を受けた層

ピット P₁は直径30cmの円形、深さ22cmで、1か所だけしか確認できなかったが、規模から主柱穴と考えられる。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。第56図1の深鉢形土器は炉体土器である。



第56図 第41号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基とピット1か所を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EIII式期と考えられる。

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	群 種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (12.5)	割部片。胴部は地文に横筋LR Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された煎酒帯を直線状に懸装している。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P80 30% 炉体土器 PL28

第42号住居跡 (第57図)

位置 調査区の中央部、B3j区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げていたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

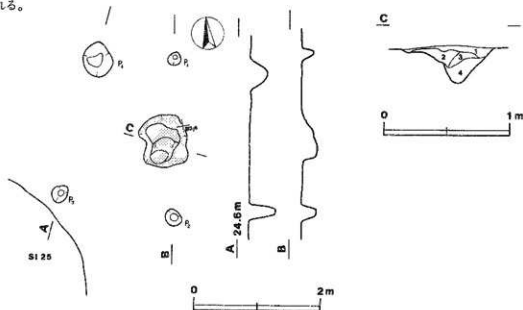
長径方向 不明。

炉 P₁とP₂を結ぶライン上のほぼ中央に付設され、平面形は直径90cmの不整形円で、確認面から北側では4cm、南側では28cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。本炉は、規模及び平面形から当初は土器埋設炉であった可能性がある。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--|------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量、ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子中量、ローム大ブロック・焼土大ブロック少量 | 3 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量 |
| 2 赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム中ブロック・焼土中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 4 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子少量 |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は直径24~58cmの円形、深さ20~44cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。



第57図 第42号住居跡実測図

遺物 縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、土器埋設炉であった可能性があるが炉1基を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。

第43号住居跡 (第58・59図)

位置 調査区の中央部, B3j区。

重複関係 本跡は第25号住居跡に掘り込まれており、第25号住居跡より古い。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

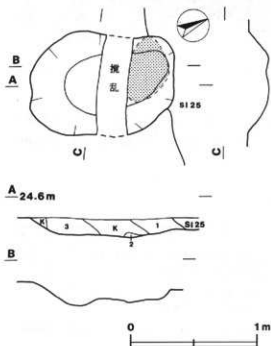
炉 平面形は長径122cm, 短径94cmの楕円形で、確認面から18cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

1 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子中量, 焼土大ブロック少量

2 赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック中量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子少量

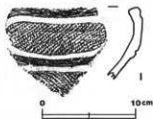
3 赤褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量, 炭化物・炭化粒子少量



第58図 第43号住居跡炉実測図

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。第59図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。



第59図 第43号住居跡出土遺物実測・拓影図

第44号住居跡 (第60・61図)

位置 調査区の南西部, C2b区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

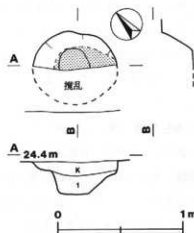
長径方向 不明。

炉 平面形は長径68cm, 短径(60)cmの楕円形で, 確認面から26cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。本炉は攪乱を受けているが, まとまった土器片が出土していることから, 当初は土器囲炉であった可能性がある。

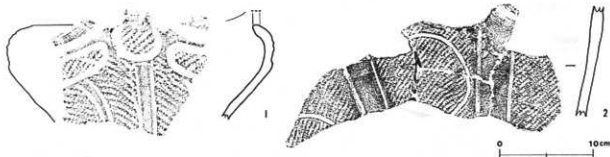
炉土層解説

1 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム大・中ブロック・焼土大・中ブロック中量, 炭化物・炭化粒子少量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から100点ほど出土している。第61図1及び2の深鉢形土器は攪乱を受けて原位置を保ってはいなかったが, 土器囲炉に使用されていたものと考えられる。



第60図 第44号住居跡炉実測図



第61図 第44号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが, 土器囲炉であった可能性がある。ある炉1基を検出したことによって, 竪穴住居跡であると思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第44号住居跡出土遺物観察表

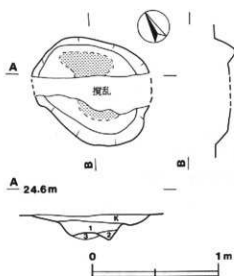
図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・産成	備 考
第61図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (24.4) B (10.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。波状口縁。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による楕円区画文と長方形区画文で, 区画内に複筋L R Lの縄文が施されており, 楕円区画されたところの口唇部に把手が付く。胴部は地文に複筋L R Lの縄文が施され, 2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状及び波状に 형성している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P204 10% 伊体土器 PL50

第45号住居跡 (第62・63図)

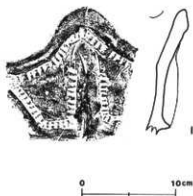
位置 調査区の南西部, C3a区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。



第62図 第45号住居跡炉実測図



第63図 第45号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉 平面形は長径98cm, 短径82cmの楕円形で, 確認面から18cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|--|---------|--|
| 1 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量, ローム中ブロック・焼土大ブロック中量, ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 2 濃い赤褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子中量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量, 焼土中ブロック微量 |
| 3 赤褐色 | 炉床面下の火を受けた層 | | |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から50cmほど出土している。ほとんどの土器片は加曾利E式に属するものであるが, 第63図1の深鉢形土器の口縁部片は阿玉台Ⅲ式に属するもので, 流れ込みと考えられる。

所見 本跡は, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが, 炉1基を検出したことによって, 竪穴住居跡であると思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。

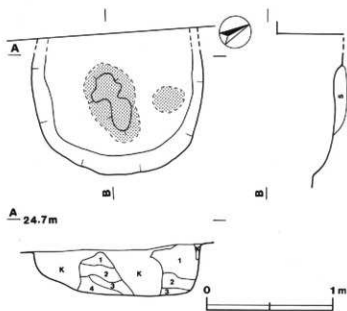
第46号住居跡 (第64図)

位置 調査区の中央部, B3h区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げていたので, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

炉 平面形は直径138cmの円形と思われ, 確認面から24cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。



第64図 第46号住居跡炉実測図

炉土層解説

- | | |
|--|---|
| <p>1 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、焼土中・小ブロック・炭化物少量</p> <p>2 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物中量、ローム大ブロック・焼土大ブロック少量</p> | <p>3 赤褐色 ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム大・中ブロック・炭化物少量</p> <p>4 赤褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子中量、焼土大ブロック少量</p> <p>5 赤褐色 炉床面下の火を受けた層</p> |
|--|---|

遺物 縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。

第47号住居跡 (第65図)

位置 調査区の中央部, B3i区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

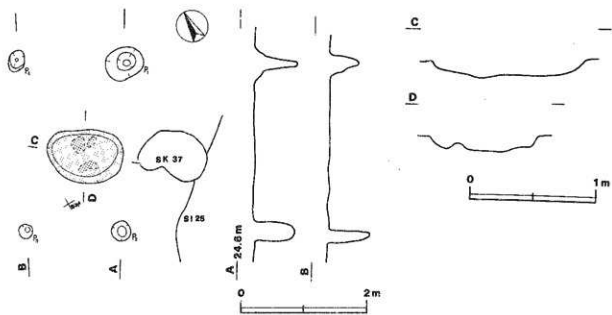
長径方向 不明。

炉 P₁からP₄に囲まれた範囲のほぼ中央に付設され、平面形は長径124cm、短径86cmの楕円形で、確認面から14cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は直径24~62cmの円形、深さ46~70cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。

遺物 縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基とピット4か所を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。



第65図 第47号住居跡実測図

第48号住居跡 (第66・67図)

位置 調査区の中央部, B2_a区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げていたので, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

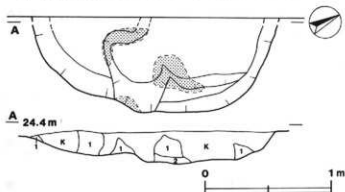
炉 平面形は長径198cm, 短径(80)cmの楕円形で, 確認面から26cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土 2 赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
小ブロック・炭化粒子微量

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が炉及びその周辺から100点ほど出土している。第67図1は深鉢形土器の口縁部片で, 本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが, 炉1基を検出したことにより, 堅穴住居跡であると思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。



第66図 第48号住居跡炉実測図

第49号住居跡 (第68図)

位置 調査区の中央部, B2_a区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げていたので, 壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

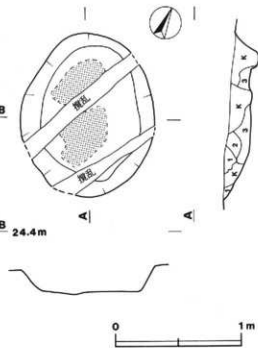
炉 平面形は長径132cm, 短径108cmの楕円形で, 確認面から22cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
2 赤褐色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土中・小ブロック微量
3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土中・小ブロック微量



第67図 第48号住居跡出土遺物
実測・拓影図



第68図 第49号住居跡炉実測図

遺物 縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基を検出したことよって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。

第50号住居跡 (第69・70図)

位置 調査区の南西部, C2e区。

重複関係 本跡は第115号土坑に掘り込まれており, 第115号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.6m), 短径(2.5m)の円形と思われる。南西側1/4はショベルカーによる攪乱を受けており, 北東側半分は調査区外となっている。

長径方向 不明。

壁 壁高は26~34cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

壁溝 壁下から内側へ0~50cmのところを周回している。上幅約20cm, 下幅約8cm, 深さ約14cmで, 断面形は「U」字形である。

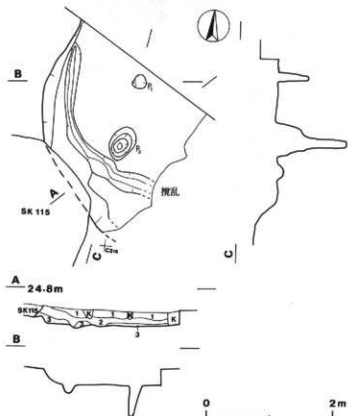
床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

ピット 2か所(P₁~P₂)。P₁, P₂は直径24~56cmの円形, 深さ50~116cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

土層解説

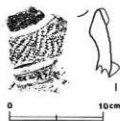
- | | |
|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量, ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・炭化物少量 |
| 3 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量 |



第69図 第50号住居跡実測図

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて250点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。第70図1は深鉢形土器の口縁部片で, 本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E II式期と考えられる。



第70図 第50号住居跡出土遺物実測・拓影図

第51号住居跡 (第71・72図)

位置 調査区の南西部, C2g₈区。

重複関係 本跡は第52号住居跡, 第116, 119, 120号土坑に掘り込まれており, これらの遺構より古い。

規模と平面形 長径(4.1)m, 短径(3.1)mの楕円形と思われる。南東側1/4は調査区外となっている。

長径方向 不明。

壁 壁高は22~24cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

炉 平面形は長径56cm, 短径48cmの楕円形で, 床面を18cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

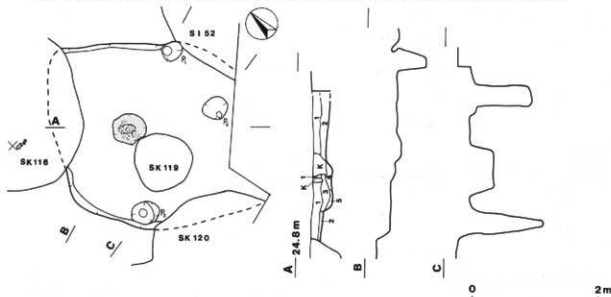
ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は直径36~46cmの円形, 深さ48~120cmで, 規模や配列から支柱穴と考えられる。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| 1 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量, ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子中量, 焼土大ブロック少量 | 4 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量, 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子少量, 焼土中・小ブロック・焼土粒子少量 | 5 明赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子少量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子中量, ローム大ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, ローム中ブロック・炭化物中量, ローム大ブロック少量 | | |

遺物 縄文土器片が覆土中層から床面にかけて150点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。その他に, 覆土中から第72図1の磨製石斧, 2の小形磨製石斧及び剥片9点が出土している。



第71図 第51号住居跡実測図

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。



第72図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考	
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)					
第72図1	磨製石斧	(5.6)	3.9	(1.6)	(49.3)	60	緑泥片岩	覆土	Q28	PL28
2	小形磨製石斧	3.4	1.1	0.7	(3.6)	95	凝灰岩	覆土	Q29	PL28

第52号住居跡 (第73・74図)

位置 調査区の南西部, C2g₀区。

重複関係 本跡は第51号住居跡を掘り込んで構築されており, 第51号住居跡より新しい。また, 第118, 124, 142号土坑に掘り込まれており, これらの土坑より古い。

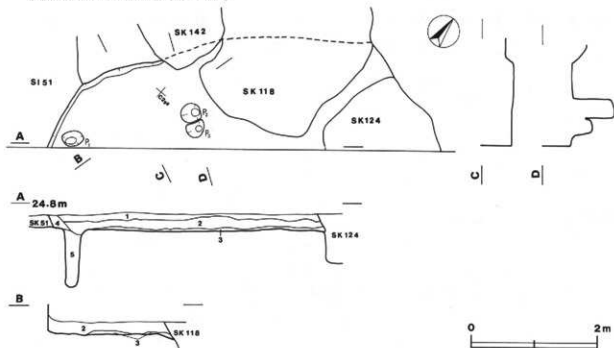
規模と平面形 長径(6.3)m, 短径(1.8)mの楕円形と思われる。南東側3/4は調査区外となっている。

長径方向 不明。

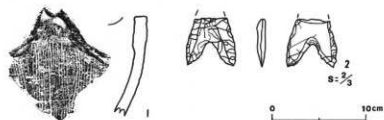
壁 壁高は14~16cmで, 外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められた面は認められない。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は直径36cmの円形, 深さ94cmである。また, P₂及びP₃は隣接しており, P₂は直径34cmの円形, 深さ70cm, P₃は直径32cmの円形, 深さ34cmで, P₃はP₂の補助柱穴の可能性がある。P₁, P₂は, 規模や配列から主柱穴と考えられる。



第73図 第52号住居跡実測図



第74図 第52号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土 5層からなる。自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---|-------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック少量、焼土粒子微量 | | |

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中層から床面にかけて200点ほど出土している。土器は全体的に散らばって出土している。ほとんどの土器片は加曾利E式に属するものであるが、第74図1の深鉢形土器の口縁部片は阿玉台Ⅲ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から2の石鏃が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。

第52号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	測 値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		計	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)				
第74図2	石 鏃	(1.9)	2.0	0.3	(1.1)	70	チャート	覆土	Q30 PL23

第53号住居跡 (第75図)

位置 調査区の南西部、C2g₂区。

重複関係 本跡は第136号土坑に掘り込まれており、第136号土坑より古い。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく、しかも表土除去の際にローム層上面まで掘り下げたので、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

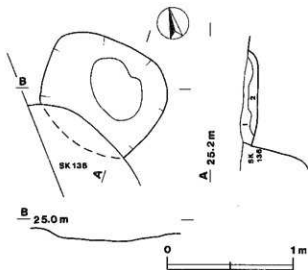
炉 平面形は長径132cm、短径108cmの楕円形で、確認面から22cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム小ブロック・焼土大ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 赤褐色 | ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量 |

遺物 縄文土器片が炉及びその周辺から50点ほど出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基を検出したことによって、竪穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。



第75図 第53号住居跡炉実測図

(2) 土 坑

今回の調査では、調査区のほぼ全域から土坑117基を検出した。この117基の中には、袋状で底面に子供ピットをもつものが8基、袋状で底面が平坦なものが4基、円筒状で底面に子供ピットをもつものが51基含まれる。ここでは土坑の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等に特徴があるものについて記載し、それ以外の土坑については実測図及び土坑一覧表だけの掲載とした。

第17号土坑 (第76・92図)

位置 調査区の中央部、B3b₉区。

規模と平面形 長径2.26m、短径2.06mの円形で、深さは62cmである。

長径方向 N-50°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが5か所存在している。子供ピットは直径44~84cmの円形、深さ38~78cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から160点ほど出土している。第92図1の深鉢形土器の把手は覆土中から出土している。2、3は深鉢形土器の口縁部片である。1~3まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から4の磨製石斧が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第18号土坑 (第76・92図)

位置 調査区の中央部、B3c₉区。

規模と平面形 長径1.28m、短径1.18mの円形で、深さは68cmである。

長径方向 N-50°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から30点ほど出土している。第92図1の深鉢形土器の把手は覆土中から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I式期と考えられる。

第19号土坑 (第76・92図)

位置 調査区の中央部、B3c₉区。

規模と平面形 長径2.28m、短径2.20mの円形で、深さは50cmである。

長径方向 N-10°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは長径180cm、短径74cmの長楕円形、深さ66cmのものと、直径32cmの円形、深さ56cmのものである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から360点ほど出土している。第92図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から3の石鏃が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第22号土坑（第76・92図）

位置 調査区の中央部、B3g区。

規模と平面形 長径3.26m、短径2.82mの楕円形で、深さは70cmである。

長径方向 N-18°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径28～42cmの円形、深さ38～92cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から470点ほど出土している。第92図1～4は深鉢形土器の口縁部片で、すべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から5、6の土器片鏃、7の石鏃及び剥片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第24号土坑（第76・93図）

位置 調査区の中央部、B3h区。

規模と平面形 長径1.66m、短径1.58mの円形で、深さは78cmである。

長径方向 N-20°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 8層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から210点ほど出土している。第93図1、2は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第26号土坑（第76・92図）

位置 調査区の中央部、B3i区。

規模と平面形 長径2.26m、短径2.10mの円形で、深さは52cmである。

長径方向 N-86°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径22～58cmの円形、深さ52～66cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から60点ほど出土している。第92図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅡ式期と考えられる。

第27号土坑 (第77・93図)

位置 調査区の中央部、B3i₅区。

規模と平面形 長径3.24m、短径3.16mの円形で、深さは42cmである。

長径方向 N-10°-W

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径36～110cmの円形、深さ56～74cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から300点ほど出土している。第93図1～3は深鉢形土器の口縁部片で、すべて本跡に伴うものと思われる。また、4の凹石は中央部の覆土中層から出土している。その他に、覆土中から剝片3点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第28号土坑 (第77・93図)

位置 調査区の中央部、B3i₄区。

規模と平面形 長径2.24m、短径2.22mの不整形円形で、深さは24cmである。

長径方向 N-56°-E

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径48～52cmの円形、深さ50cmである。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から120点ほど出土している。第93図1及び2の深鉢形土器は中央部の覆土下層から中層にかけて散乱した状態で出土している。3は深鉢形土器の口縁部片である。1、2までは本跡に伴うものと思われるが、3は他の土器よりも古い加曾利EⅠ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剝片3点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅡ式期と考えられる。

第31号土坑 (第77・93図)

位置 調査区の中央部、B3h₄区。

規模と平面形 長径1.42m、短径1.34mの円形で、深さは48cmである。

長径方向 N-88°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から30点ほど出土している。第93図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅡ式期と考えられる。

第32号土坑 (第77・93・94・95・96図)

位置 調査区の中央部, B3h区。

規模と平面形 長径3.20m, 短径3.10mの円形で、深さは82cmである。

長径方向 N-84°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径40~48cmの円形、深さ34~92cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から1510点ほど出土している。第94図1~3, 第95図8の深鉢形土器及び9の鉢形土器は中央部の覆土中層から、第94図4の深鉢形土器は中央部の覆土下層から、第95図5及び6の深鉢形土器は南部の覆土中層から、7の深鉢形土器及び第93図10の有孔罎付土器は覆土中から出土している。第95・96図11~22は深鉢形土器の口縁部片である。1~22まですべて本跡に一括投棄されたものと思われる。その他に、第93図23の土器片鏝、24の石鏝及び剥片5点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われるが、比較的良好な一括投棄された遺物が遺存していた。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第33号土坑 (第77・96図)

位置 調査区の中央部, B3f区。

規模と平面形 長径1.38m, 短径1.24mの楕円形で、深さは50cmである。

長径方向 N-36°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から40点ほど出土している。第96図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第41号土坑 (第77・96図)

位置 調査区の中央部, B3f区。

規模と平面形 長径2.88m, 短径2.46mの楕円形で、深さは66cmである。

長径方向 N-30°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは長径98cm、短径78cmの楕円形、深さ82cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると9層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から100点ほど出土している。第96図1の深鉢形土器は中央部の底面直上から、2の深鉢形土器は中央部の覆土下層から、3の有孔罎付土器は覆土中から出土している。

1と2は同一個体と思われる。4は深鉢形土器の口縁部片である。1～3まではすべて本跡に伴うものと思われるが、4は他の土器よりも古い加曾利EⅡ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から5の土器片鏝及び剥片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第44号土坑（第78・96・97図）

位置 調査区の中央部、B3i区。

規模と平面形 長径2.32m、短径2.12mの円形で、深さは84cmである。

長径方向 N-32°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは長径76cm、短径56cmの楕円形、深さ22cmである。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から280点ほど出土している。第96図1の深鉢形土器及び第97図3の浅鉢形土器は中央部の覆土中層から、第96図2の深鉢形土器は中央部の覆土下層から出土している。

1と2は同一個体と思われる。第97図4～6は深鉢形土器の口縁部片である。1～6まではすべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から第97図7の石鏝及び剥片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第45号土坑（第78・97図）

位置 調査区の中央部、B3j区。

規模と平面形 長径1.30m、短径1.18mの楕円形で、深さは70cmである。

長径方向 N-32°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から230点ほど出土している。第97図1の鉢形土器は覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から3の石鏝が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第52号土坑 (第78・97図)

位置 調査区の中央部, B3j₁区。

規模と平面形 長径1.24m, 短径1.08mの楕円形で, 深さは74cmである。

長径方向 N-24°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から120点ほど出土している。第97図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2, 3は深鉢形土器の口縁部片である。1～3まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に, 覆土中から剝片1点が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第54号土坑 (第78・97図)

位置 調査区の南西部, C3b₁区。

規模と平面形 長径2.28m, 短径2.00mの楕円形で, 深さは62cmである。

長径方向 N-68°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径46～64cmの円形, 深さ26～46cmである。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から100点ほど出土している。第97図1の深鉢形土器は南部の覆土中層から出土している。ほとんどの土器片は加曾利E式に属するものであるが, 1は勝坂系の土器で, 流れ込みと考えられる。その他に, 覆土中から剝片1点が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E式期と考えられる。

第55号土坑 (第78・97図)

位置 調査区の南西部, C2a₆区。

重複関係 本跡は第102号土坑を掘り込んで構築されており, 第102号土坑より新しい。

規模と平面形 長径2.84m, 短径2.82mの円形で, 深さは58cmである。

長径方向 N-60°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径78～104cmの円形, 深さ68～106cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると7層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から470点ほど出土している。第97図1の深鉢形土器はP₂の覆土中から, 2の深鉢形土器は覆土中から出土している。3, 4は深鉢形土器の口縁部片である。1, 3及び4まではすべて本跡に伴うものと思われるが, 2は他の土器よりも古い加曾利EⅡ式に属するもので, 流れ込みと考えられる。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第56号土坑（第79・98図）

位置 調査区の南西部，C2a₃区。

重複関係 本跡は第111号土坑に掘り込まれており，第111号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.4)m，短径2.30mの円形と思われ，深さは52cmである。

長径方向 N-2°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径32～100cmの円形，深さ44～112cmで，1か所は袋状を呈している。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から530点ほど出土している。第98図1及び2の深鉢形土器はP₃の覆土中から，3の深鉢形土器及び4の鉢形土器は覆土中から出土している。5，6は深鉢形土器の口縁部片である。1～6まではすべて本跡に伴うものと思われる。また，9の磨石は中央部の覆土中層から出土している。その他に，覆土中から7の土器片鏝，8の石鏝及び剃片5点が出土している。

所見 本跡は，土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第57号土坑（第79・99図）

位置 調査区の南西部，C2a₃区。

規模と平面形 長径2.94m，短径2.52mの楕円形で，深さは46cmである。

長径方向 N-72°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から280点ほど出土している。第99図1～3は深鉢形土器の口縁部片で，すべて本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は，土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第58号土坑（第79・98図）

位置 調査区の南西部，C3c₃区。

規模と平面形 長径2.40m，短径(1.8)mの楕円形と思われ，深さは70cmである。

長径方向 N-66°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径36～82cmの円形，深さ68～96cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から1270点ほど出土している。第98図1の深鉢形土器及び2の浅鉢形土器は覆土中から出土している。3、4は深鉢形土器の口縁部片で、5は鉢形土器の口縁部片である。1、3～5まではすべて本跡に伴うものと思われるが、2は他の土器よりも古い加曾利EⅠ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から6の土器片鋸、7の石鏝及び剥片11点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第59号土坑（第79・99図）

位置 調査区の南西部、C2b₉区。

規模と平面形 長径3.70m、短径(2.8)mの楕円形と思われ、深さは86cmである。

長径方向 N-4°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径56～86cmの円形、深さ88～100cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると10層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から1300点ほど出土している。第99図1の深鉢形土器は覆土下層から、2の深鉢形土器は覆土中層から出土している。3～7は深鉢形土器の口縁部片である。1～7まではすべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から8の土器片鋸、9の土製円板、10の石鏝及び剥片10点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第60号土坑（第80・99図）

位置 調査区の南西部、C2c₉区。

規模と平面形 長径1.60m、短径1.30mの楕円形で、深さは132cmである。

長径方向 N-36°-W

壁面 袋状を呈しており、内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は、長径2.4m、短径2.2mの円形である。また、底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径58cmの円形、深さ20cmである。

覆土 11層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から300点ほど出土している。第99図1及び2の深鉢形土器は覆土中から出土している。3、4は深鉢形土器の口縁部片である。1～3まではすべて本跡に伴うものと思われるが、4は他の土器よりも新しい加曾利EⅢ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剥片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期前半の阿玉台IV式期と考えられる。

第61号土坑 (第80・99図)

位置 調査区の南西部, C2g₂区。

規模と平面形 長径2.16m, 短径2.00mの円形で、深さは28cmである。

長径方向 N-48°-E

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径100cmの円形、深さ14cmの大きく浅いものと、直径62cmの円形、深さ72cmの深いものである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から230点ほど出土している。第99図1, 2は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から3の土器片鏃及び刺片2点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E II式期と考えられる。

第62号土坑 (第80・100図)

位置 調査区の中央部, B2i₂区。

規模と平面形 長径2.30m, 短径2.08mの楕円形で、深さは76cmである。

長径方向 N-20°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが4か所存在している。子供ピットは直径38～92cmの円形、深さ42～92cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から430点ほど出土している。第100図1, 2の深鉢形土器及び3の鉢形土器は覆土中から出土している。4は深鉢形土器の口縁部片である。1～4まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から5, 6の石鏃及び刺片4点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第64号土坑 (第80・99図)

位置 調査区の中央部, B2j₂区。

規模と平面形 長径1.74m, 短径1.64mの円形で、深さは80cmである。

長径方向 N-28°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から380点ほど出土している。第99図1～5は深鉢形土器の口縁部片である。5の口縁部片は集合沈線文が施された曾利系の土器であるが、1～5まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から刺片3点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第65号土坑 (第80・100図)

位置 調査区の中央部, B2j区。

規模と平面形 長径2.26m, 短径2.16mの円形で, 深さは76cmである。

長径方向 N-80°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径84cmの円形, 深さ70cmで, 袋状を呈している。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から390点ほど出土している。第100図1及び2の深鉢形土器は西部の底面直上から, 3の深鉢形土器は東部の覆土下層から出土している。4~6は深鉢形土器の口縁部片である。1~5まではすべて本跡に伴うものと思われるが, 6は他の土器よりも古い加曾利EⅠ式に属するもので, 流れ込みと考えられる。

所見 本跡は, 土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第66号土坑 (第80・100・101図)

位置 調査区の南西部, C2a7区。

規模と平面形 長径2.52m, 短径2.18mの楕円形で, 深さは86cmである。

長径方向 N-26°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径82cmの円形, 深さ56cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から490点ほど出土している。第100図1の深鉢形土器, 第101図3の深鉢形土器の把手及び4の鉢形土器は中央部の覆土中層から出土している。5~7は深鉢形土器の口縁部片である。1, 2, 4~7まではすべて本跡に伴うものと思われるが, 3は他の土器よりも古い加曾利EⅠ式に属するもので, 流れ込みと考えられる。その他に, 覆土中から第101図8の土器片錐が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第67号土坑 (第81・101図)

位置 調査区の南西部, C2b9区。

規模と平面形 長径2.04m, 短径1.94mの円形で, 深さは72cmである。

長径方向 N-16°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径44~88cmの円形, 深さ38~44cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から790点ほど出土している。第101図1, 2の深鉢形土器及び4の器台形土器は覆土中から, 3の鉢形土器は南部の覆土中層から出土している。5~10は深鉢形土器の

口縁部片である。1～10まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剥片2点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第72号土坑（第81・102図）

位置 調査区の南西部，C2f₂区。

規模と平面形 長径1.52m，短径1.40mの円形で，深さは56cmである。

長径方向 N-76°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から240点ほど出土している。第102図1は深鉢形土器の口縁部片で，本跡に伴うものと思われる。その他に，覆土中から2の土器片錘及び剥片1点が出土している。

所見 本跡は，土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第79号土坑（第81・102図）

位置 調査区の南西部，C2e₁区。

規模と平面形 長径1.26m，短径1.12mの楕円形で，深さは64cmである。

長径方向 N-50°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から90点ほど出土している。第102図1は深鉢形土器の口縁部片で，本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は，土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代中期後半の中峠式期と考えられる。

第81号土坑（第81・102図）

位置 調査区の南西部，C2g₂区。

重複関係 本跡は第33号住居跡，第129号土坑を掘り込んで構築されており，これらの遺構より新しい。

規模と平面形 長径3.08m，短径2.96mの円形で，深さは72cmである。

長径方向 N-80°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径40～78cmの円形，深さ98～110cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から390点ほど出土している。第102図1の深鉢形土器は覆土

中から出土している。2～4は深鉢形土器の口縁部片である。1～3まではすべて本跡に伴うものと思われるが、4は他の土器よりも古い加曾利EⅡ式に属するもので、流れ込みと考えられる。また、7の土器片はP₂の覆土中から出土している。その他に、覆土中から5、6の土器片蓋及び剃片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第82号土坑 (第81・102図)

位置 調査区の南西部、C2h₂区。

規模と平面形 長径2.54m、短径2.10mの楕円形で、深さは56cmである。

長径方向 N-32°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径24～92cmの円形、深さ56～76cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から620点ほど出土している。第102図1及び2の深鉢形土器は中央部の覆土中層から、3の深鉢形土器は覆土中から出土している。4、5は深鉢形土器の口縁部片である。1～5まではすべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剃片2点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第83号土坑 (第81・103図)

位置 調査区の南西部、C1h₀区。

規模と平面形 長径2.52m、短径(1.6)mの楕円形と思われ、深さは58cmである。

長径方向 N-18°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは長径98cm、短径56cmの不整楕円形、深さ56cmのもの1か所と、直径58～66cmの円形、深さ44～50cmのもの2か所である。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から110点ほど出土している。第103図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第84号土坑 (第82・102図)

位置 調査区の南西部、C2i₁区。

規模と平面形 長径2.08m、短径1.98mの円形で、深さは50cmである。

長径方向 N-50°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で、全体的に硬く踏み固められている。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から40点ほど出土している。第102図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第85号土坑 (第82・103図)

位置 調査区の南西部, C2i区。

規模と平面形 長径2.06m, 短径1.88mの円形で、深さは46cmである。

長径方向 N-42°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から240点ほど出土している。第103図1及び2の深鉢形土器は覆土中から出土している。3、4は深鉢形土器の口縁部片である。1～4まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から5の土器片鉋及び剥片2点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第90号土坑 (第82・103図)

位置 調査区の中央部, B3h区。

重複関係 本跡は第18号住居跡を掘り込んで構築されており、第18号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径2.86m, 短径2.28mの楕円形で、深さは76cmである。

長径方向 N-26°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径44～86cmの円形、深さ66～84cmである。

覆土 6層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から600点ほど出土している。第103図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2～9は深鉢形土器の口縁部片である。2～9まですべて本跡に伴うものと思われるが、1は他の土器よりも古い加曾利EⅠ式に属するもので、流れ込みと考えられる。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第91号土坑 (第82・103図)

位置 調査区の中央部, B3d区。

重複関係 本跡は第96号土坑を掘り込んで構築されており、第96号土坑より新しい。

規模と平面形 長径1.56m, 短径1.30mの楕円形で、深さは92cmである。

長径方向 N-2°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から40点ほど出土している。第103図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第92号土坑 (第82・103図)

位置 調査区の中央部, B3e₉区。

重複関係 本跡は第10号住居跡に掘り込まれており、第10号住居跡より古い。

規模と平面形 長径2.32m, 短径2.20mの円形で、深さは82cmである。

長径方向 N-46°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており、底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径38~80cmの円形、深さ48~76cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から80点ほど出土している。第103図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第94号土坑 (第83・104図)

位置 調査区の中央部, B3a₉区。

重複関係 本跡は第101号土坑に掘り込まれており、第101号土坑より古い。

規模と平面形 長径3.28m, 短径3.26mの円形で、深さは84cmである。

長径方向 N-20°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは長径140cm, 短径88cmの楕円形、深さ34cmのもの1か所と、直径52~112cmの円形、深さ74~78cmのもの2か所である。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から340点ほど出土している。第104図1及び2の深鉢形土器は覆土中から出土している。第103図3~9は深鉢形土器の口縁部片である。1~9まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から第104図10の土器片鏃、11の磨石及び剥片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第96号土坑 (第82・104図)

位置 調査区の中央部, B3d₄区。

重複関係 本跡は第91号土坑に掘り込まれており, 第91号土坑より古い。

規模と平面形 直径2.20mの円形と思われ, 深さは50cmである。

長径方向 N-88°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径32~82cmの円形, 深さ32~72cmである。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から130点ほど出土している。第104図1は深鉢形土器の口縁部片で, 本跡に伴うものと思われる。その他に, 覆土中から剥片2点が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第97号土坑 (第83・104・105図)

位置 調査区の中央部, B3i₄区。

重複関係 本跡は第19号住居跡, 第105号土坑を掘り込んで構築されており, これらの遺構より新しい。

規模と平面形 長径[2.9]m, 短径2.54mの楕円形と思われ, 深さは104cmである。

長径方向 N-26°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径46cmの円形, 深さ78cmである。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から500点ほど出土している。第105図1の深鉢形土器は北部の覆土中層から, 2の深鉢形土器は南部の覆土中層から, 3, 4の鉢形土器及び5の深鉢形土器は中央部の覆土中層から出土している。6~15は深鉢形土器の口縁部片である。5だけは他の土器よりも古い田戸上層式に属するものであるが, 1~15まですべて本跡に一括投棄されたものと思われる。また, 第104図18及び19の凹石は東部の覆土中層から出土している。その他に, 覆土中から第104図16の石鏃, 17の磨石及び剥片2点が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第100-A号土坑 (第83・106図)

位置 調査区の南西部, C3b₄区。

重複関係 本跡は第100-B号土坑を掘り込んで構築されており, 第100-B号土坑より新しい。また, 第100-C号土坑に掘り込まれており, 第100-C号土坑より古い。

規模と平面形 長径2.70m, 短径2.48mの円形で, 深さは56cmである。

長径方向 N-2°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが5か所存在している。子供ピットは直径38~100cmの円形, 深さ34~92cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から530点ほど出土している。第106図1の鉢形土器は覆土中から出土している。2～5は深鉢形土器の口縁部片である。1～5まですべて本跡に伴うものと思われる。また、6のナイフ形石器はP₁の覆土中から出土している。その他に、覆土中から7の打製石斧及び剥片10点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第102号土坑（第78・106図）

位置 調査区の中央部、B2₀区。

重複関係 本跡は第29号住居跡、第1、2号陥し穴を掘り込んで構築されており、これらの遺構より新しい。

また、第55号土坑に掘り込まれており、第55号土坑より古い。

規模と平面形 長径(3.4)m、短径2.66mの楕円形と思われ、深さは82cmである。

長径方向 N-62'-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径42cmの円形、深さ58cmである。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から1020点ほど出土している。第106図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2～8は深鉢形土器の口縁部片である。1～7までではすべて本跡に伴うものと思われるが、8は他の土器よりも新しい加曾利EⅣ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から9の土器片鏃及び剥片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第104号土坑（第83・106・107図）

位置 調査区の南西部、C2₀区。

規模と平面形 長径3.16m、短径2.68mの楕円形で、深さは86cmである。

長径方向 N-20'-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径40～56cmの円形、深さ34～100cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から740点ほど出土している。第107図1の深鉢形土器は覆土下層から出土している。第106図2～5は深鉢形土器の口縁部片である。1～5まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から第107図6の磨石及び剥片5点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第107号土坑（第84・107図）

位置 調査区の南西部，C3b区。

重複関係 本跡は第108号土坑を掘り込んで構築されており，第108号土坑より新しい。

規模と平面形 長径3.18m，短径2.90mの円形で，深さは68cmである。

長径方向 N-86°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径26～110cmの円形，深さ52～108cmで，1か所は袋状を呈している。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から1280点ほど出土している。第107図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2，3は深鉢形土器の口縁部片である。1，2は本跡に伴うものと思われるが，3は他の土器よりも古い阿玉台Ⅲ式に属するもので，流れ込みと考えられる。その他に，覆土中から剥片10点が出土している。

所見 本跡は，土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第108号土坑（第84・107図）

位置 調査区の南西部，C2c区。

重複関係 本跡は第107号土坑に掘り込まれており，第107号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.7)m，短径2.44mの楕円形と思われ，深さは128cmである。

長径方向 N-38°-E

壁面 袋状を呈しており，内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は，長径2.9m，短径2.7mの円形である。また，底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは長径126cm，短径70cmの楕円形，深さ32cmで，袋状を呈したものの1か所と，直径40cmの円形，深さ26cmのもの1か所である。

覆土 6層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から300点ほど出土している。第107図1の深鉢形土器は中央部の覆土下層から中層にかけて散乱した状態で，2及び3の深鉢形土器は中央部の覆土中層から出土している。4は深鉢形土器の口縁部片である。1～4まですべて本跡に一括投棄されたものと思われる。また，5の石鏃及び6の小形磨製石斧は中央部の覆土中層から出土している。その他に，覆土中から剥片3点が出土している。

所見 本跡は，土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第110号土坑（第84・107図）

位置 調査区の南西部，C2d区。

重複関係 本跡は第32号住居跡を掘り込んで構築されており，第32号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径1.92m，短径1.80mの円形で，深さは98cmである。

長径方向 N-14'-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは長径150cm、短径80cmの楕円形、深さ14cmで、袋状を呈したものの1か所と、直径42cmの円形、深さ32cmのもの1か所である。

覆土 7層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から50点ほど出土している。第107図1の深鉢形土器の把手は覆土中から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から刺片11点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第111号土坑 (第79・107図)

位置 調査区の南西部, C2a₂区。

重複関係 本跡は第56号土坑を掘り込んで構築されており、第56号土坑より新しい。

規模と平面形 長径2.38m、短径1.98mの不整楕円形で、深さは54cmである。

長径方向 N-88'-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から130点ほど出土している。第107図1の深鉢形土器は南部の底面直上から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III 式期と考えられる。

第113号土坑 (第84・108図)

位置 調査区の中央部, B3₂区。

重複関係 本跡は第114号土坑を掘り込んで構築されており、第114号土坑より新しい。また、第24号住居跡に掘り込まれており、第24号住居跡より古い。

規模と平面形 長径2.76m、短径(2.3)mの楕円形と思われ、深さは74cmである。

長径方向 N-78'-E

壁面 袋状を呈しており、内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は、長径3.0m、短径2.4mの楕円形である。また、平坦である。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から180点ほど出土している。第108図1の深鉢形土器及び2の深鉢形土器の把手は東部の覆土中層から出土している。3は深鉢形土器の口縁部片である。1～3まですべて本跡に一括投棄されたものと思われる。また、6の磨製石斧は東部の覆土中層から出土している。その他に、覆土中から4の土製門板及び5の石鏃が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第114号土坑 (第84・108図)

位置 調査区の中央部, B3j区。

重複関係 本跡は第23号住居跡, 第113号土坑に掘り込まれており, これらの遺構より古い。

規模と平面形 長径2.02m, 短径(1.4)mの楕円形と思われ, 深さは84cmである。

長径方向 N-40°-W

壁面 袋状を呈しており, 内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は, 長径2.3m, 短径1.6mの楕円形である。また, 平坦である。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から20点ほど出土している。第108図1の鉢形土器は中央部の覆土中層から出土している。1は本跡に伴うものと思われる。その他に, 覆土中から2の磨石が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第116号土坑 (第85・109図)

位置 調査区の南西部, C2f区。

重複関係 本跡は第51号住居跡を掘り込んで構築されており, 第51号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径2.60m, 短径2.14mの楕円形で, 深さは62cmである。

長径方向 N-60°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から50点ほど出土している。第109図1は深鉢形土器の口縁部片で, 本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は, 土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第118号土坑 (第84・108図)

位置 調査区の南西部, C2f区。

重複関係 本跡は第52号住居跡を掘り込んで構築されており, 第52号住居跡より新しい。また, 第142号土坑に掘り込まれており, 第142号土坑より古い。

規模と平面形 長径3.40m, 短径2.70mの不整楕円形で, 深さは74cmである。

長径方向 N-34°-W

壁面 袋状を呈しており, 内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は, 長径3.4m, 短径3.0mの円形である。また, 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径52~78cmの円形, 深さ18~58cmである。

覆土 8層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から570点ほど出土している。第108図1の深鉢形土器は中央部の底面直上から、2の深鉢形土器及び3の浅鉢形土器は覆土中から出土している。4～9は深鉢形土器の口縁部片である。1～6まではすべて本跡に伴うものと思われるが、7、8は他の土器よりも新しい加曾利EⅢ式に属するもので、9は同じく加曾利EⅢ式期に見られる集合沈線文が施された曾利系の土器で、この3個体は流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剝片6点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の中時式期と考えられる。

第120号土坑 (第85・109図)

位置 調査区の南西部, C2_g区。

重複関係 本跡は第51号住居跡, 第125土坑を掘り込んで構築されており, これらの遺構より新しい。

規模と平面形 長径(2.4)m, 短径(1.2)mの楕円形と思われ, 深さは58cmである。

長径方向 N-86°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており, 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは長径86cm, 短径58cmの楕円形, 深さ64cmである。

覆土 8層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から310点ほど出土している。第109図1、2は深鉢形土器の口縁部片である。1は本跡に伴うものと思われるが、2は他の土器よりも古い加曾利EⅡ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剝片2点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第121号土坑 (第85・109図)

位置 調査区の南西部, C3_a区。

規模と平面形 長径(2.4)m, 短径(2.2)mの円形と思われ, 深さは92cmである。

長径方向 N-86°-E

壁面 袋状を呈しており, 内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は, 長径2.8m, 短径2.7mの円形である。また, 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは長径116cm, 短径62cmの楕円形, 深さ14cmのもの1か所と, 直径26～54cmの円形, 深さ34～52cmのもの2か所である。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると5層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から330点ほど出土している。第109図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から3の土器片鏃及び剝片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第123号土坑 (第85・109図)

位置 調査区の南西部, C2e₃区。

規模と平面形 長径1.50m, 短径1.40mの円形で, 深さは96cmである。

長径方向 N-28°-W

壁面 袋状を呈しており, 内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は, 長径2.0m, 短径1.7mの楕円形である。また, 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径36~56cmの円形, 深さ38~66cmである。

覆土 10層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から160点ほど出土している。第109図1, 2の深鉢形土器の把手及び3, 4の深鉢形土器は覆土中から出土している。5, 6は深鉢形土器の口縁部片である。1~7まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に, 覆土中から剥片2点が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第125号土坑 (第85・110図)

位置 調査区の南西部, C2h₇区。

重複関係 本跡は第120号土坑に掘り込まれており, 第120号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.4)m, 短径(1.4)mの不整円形と思われ, 深さは80cmである。

長径方向 N-88°-W

壁面 袋状を呈しており, 内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は, 長径2.7m, 短径1.5mの楕円形である。また, 全体的に硬く踏み固められており, 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは長径68cm, 短径44cmの楕円形, 深さ12cmのもの1か所と, 直径58cmの円形, 深さ16cmのもの1か所である。

覆土 9層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から150点ほど出土している。第110図1, 3及び4の深鉢形土器は北部の覆土下層から, 2の深鉢形土器は西部の底面直上から出土している。1~4まですべて本跡に伴うものと思われる。

所見 本跡は, 土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の中峠式期と考えられる。

第126号土坑 (第85・110図)

位置 調査区の南西部, C2i₂区。

規模と平面形 長径3.00m, 短径(2.9)mの円形と思われ, 深さは96cmである。

長径方向 N-66°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており, 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径36cmの円形, 深さ52cmである。

覆土 7層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から650点ほど出土している。第110図1及び4の深鉢形土器は覆土中層から、2及び3の深鉢形土器は覆土中から出土している。5～11は深鉢形土器の口縁部片である。1～3、5～11まではすべて本跡に伴うものと思われるが、4は他の土器よりも古い加曾利EⅡ式に属するもので、流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から第109図12の小形磨製石斧及び13の磨石が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第127号土坑 (第86・111図)

位置 調査区の南西部, C1g₂区。

規模と平面形 長径2.94m, 短径2.42mの楕円形で、深さは70cmである。

長径方向 N-74°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径42～52cmの円形、深さ46～80cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から980点ほど出土している。第111図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2～7は深鉢形土器の口縁部片である。1～7まではすべて本跡に伴うものと思われる。また、8の磨石は西部の覆土中層から、9の凹石は南部の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第128号土坑 (第86・111図)

位置 調査区の南西部, C2j₁区。

規模と平面形 長径3.30m, 短径3.02mの楕円形で、深さは62cmである。

長径方向 N-50°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で、全体的に硬く踏み固められている。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から280点ほど出土している。第111図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剝片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第129号土坑 (第81・112図)

位置 調査区の南西部, C2g₁区。

重複関係 本跡は第81号土坑に掘り込まれており、第81号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.0)m, 短径1.82mの円形と思われ、深さは48cmである。

長径方向 N-48°-E

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径28~74cmの円形、深さ56~66cmである。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から270点ほど出土している。第112図1の深鉢形土器は底面直上から、2の深鉢形土器の把手は覆土中から出土している。3~6は深鉢形土器の口縁部片である。1~6まですべて本跡に伴うものと思われる。また、7の土器片鏝はP₃の覆土中から出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われるが、第112図1の深鉢形土器の出土状態から、所謂「鉢被り」をした墓塚の可能性も考えられる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第131号土坑 (第86・111図)

位置 調査区の南西部、C2₁区。

重複関係 本跡は第132号土坑に掘り込まれており、第132号土坑より古い。

規模と平面形 長径2.16m、短径(1.9)mの不整楕円形と思われ、深さは72cmである。

長径方向 N-14°-E

壁面 袋状を呈しており、内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は、長径2.5m、短径2.0mの楕円形である。また、全体的に硬く踏み固められており、底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径96cmの円形、深さ38cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から300点ほど出土している。第111図1及び2の深鉢形土器は覆土中から出土している。1、2とも本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から刺片5点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。

第132号土坑 (第86・113図)

位置 調査区の南西部、C2₁区。

重複関係 本跡は第131、133号土坑を掘り込んで構築されており、これらの土坑より新しい。また、第37号住居跡に掘り込まれており、第37号住居跡より古い。

規模と平面形 長径2.60m、短径2.22mの楕円形で、深さは98cmである。

長径方向 N-36°-W

壁面 袋状を呈しており、内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は、長径2.6m、短径2.4mの円形である。また、全体的に硬く踏み固められており、底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径52~92cmの円形、深さ62~64cmである。

覆土 6層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から150点ほど出土している。第113図1、2、4の深鉢形土器及び6の鉢形土器は中央部の覆土中層から、3の深鉢形土器は覆土中から、5の深鉢形土器は北部の覆土

下層から出土している。7～9は深鉢形土器の口縁部片で、10は深鉢形土器の胴部片である。5だけは本跡が機能していた時期に近いものと思われるが、1～4及び6～10まではすべて新しく、1～3と6～9は加曾利EⅢ式に属するもの、4と10は大木9式に属するもので、この9個体は本跡が埋まる過程で一括投棄されたものと考えられる。また、11の凹石は北部の覆土下層から出土している。その他に、覆土中から剝片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、下層の出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅠ式期と考えられる。また、中層からも大木9式の土器を含む加曾利EⅢ式期の遺物がまともて出土している。

第133号土坑 (第86・112図)

位置 調査区の南西部、C2i区。

重複関係 本跡は第37号住居跡、第132号土坑に掘り込まれており、これらの遺構より古い。

規模と平面形 長径(2.2)m、短径1.98mの楕円形と思われ、深さは78cmである。

長径方向 N-46°-W

壁面 袋状を呈しており、内傾しながら立ち上がる。

底面 底面の規模と平面形は、長径2.6m、短径2.5mの円形である。また、平坦で、全体的に硬く踏み固められている。

覆土 6層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から460点ほど出土している。第112図1の深鉢形土器は中央部の覆土中層から、2の深鉢形土器の把手は覆土下層から出土している。3は深鉢形土器の口縁部片である。1～3まですべて本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剝片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から袋状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の中鉢式期と考えられる。

第134号土坑 (第86・113図)

位置 調査区の南西部、C2j区。

重複関係 本跡は第135号土坑に掘り込まれており、第135号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.0)m、短径(1.6)mの楕円形と思われ、深さは70cmである。

長径方向 N-58°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径66cmの円形、深さ76cmである。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から80点ほど出土している。第113図1は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剝片1点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅡ式期と考えられる。

第137号土坑 (第87・112図)

位置 調査区の南西部, D2a₃区。

重複関係 本跡は第139号土坑を掘り込んで構築されており, 第139号土坑より新しい。

規模と平面形 長径2.64m, 短径2.48mの円形で, 深さは44cmである。

長径方向 N-56°-W

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており, 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは直径24~72cmの円形, 深さ18~32cmである。

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から450点ほど出土している。第112図1の深鉢形土器は西部の覆土中層から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片である。1, 2とも本跡に伴うものと思われる。また, 4の打製石斧は西部の覆土中層から, 5の凹石は東部の覆土中層から出土している。その他に, 覆土中から3の石鏝及び剃片5点が出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第139号土坑 (第87・114図)

位置 調査区の南西部, D2b₁区。

重複関係 本跡は第144号土坑を掘り込んで構築されており, 第144号土坑より新しい。また, 第137号土坑に掘り込まれており, 第137号土坑より古い。

規模と平面形 長径2.76m, 短径2.74mの円形で, 深さは60cmである。

長径方向 N-88°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で, 全体的に硬く踏み固められている。

覆土 3層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から40点ほど出土している。第114図1の深鉢形土器は東部の底面直上から, 2の深鉢形土器は覆土中から出土している。1は本跡に伴うものと思われるが, 2は他の土器よりも新しい加曾利EIV式に属するもので, 流れ込みと考えられる。また, 3の石鏝は東部の底面直上から出土している。

所見 本跡は, 土坑の形態から円筒状を呈する貯蔵穴と思われる。時期は, 出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I 式期と考えられる。

第140号土坑 (第87・114図)

位置 調査区の南西部, C2₄区。

規模と平面形 長径(3.3)m, 短径(1.8)mの円形と思われ, 深さは36cmである。

長径方向 N-58°-E

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており, 底面に子供ピットが2か所存在している。子供ピットは長径106cm,

短径46cmの長楕円形、深さ28cmのもの1か所と、直径68cmの円形、深さ58cmのもの1か所である。

覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から150点ほど出土している。第114図1、2は深鉢形土器の口縁部片で、本跡に伴うものと思われる。その他に、覆土中から剥片2点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I式期と考えられる。

第141号土坑 (第87・114図)

位置 調査区の南西部、D2a₄区。

規模と平面形 長径(2.7)m、短径(2.4)mの不整形形と思われ、深さは20cmである。

長径方向 N-86°-W

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており、底面に子供ピットが3か所存在している。子供ピットは直径46~56cmの円形、深さ36~88cmである。

覆土 子供ピットの覆土まで含めると4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から310点ほど出土している。第114図1の深鉢形土器は覆土中から出土している。2、3は深鉢形土器の口縁部片である。1、2は本跡に伴うものと思われるが、3は他の土器よりも古い中峠式に属するもので、流れ込みと考えられる。また、5の磨石はP₃の覆土中から出土している。その他に、4の磨製石斧及び剥片3点が出土している。

所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E III式期と考えられる。

第144号土坑 (第87・114図)

位置 調査区の南西部、D2b₉区。

重複関係 本跡は第139号土坑に掘り込まれており、第139号土坑より古い。

規模と平面形 長径(2.7)m、短径(2.5)mの円形と思われ、深さは20cmである。

長径方向 N-24°-E

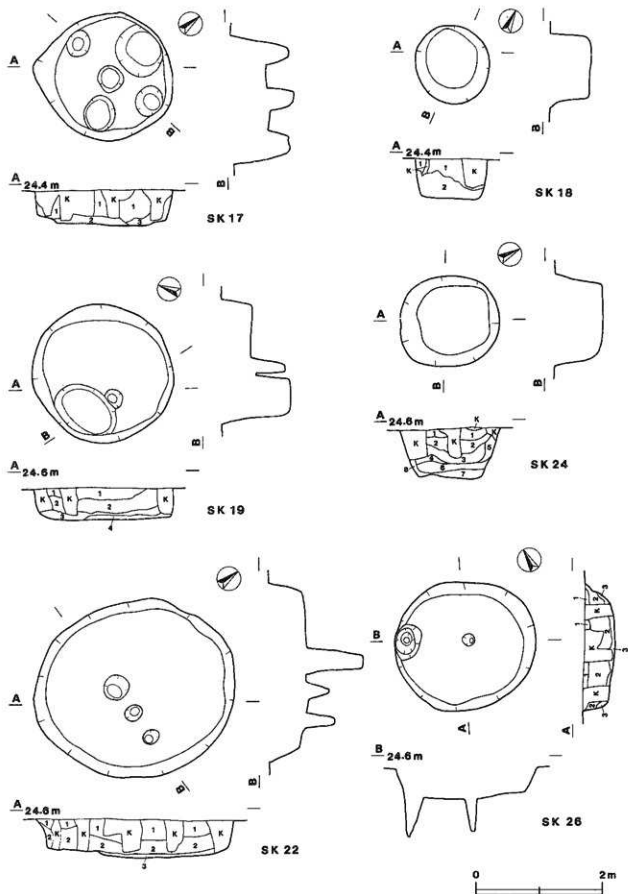
壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 全体的に硬く踏み固められており、底面に子供ピットが1か所存在している。子供ピットは直径82cmの円形、深さ46cmである。

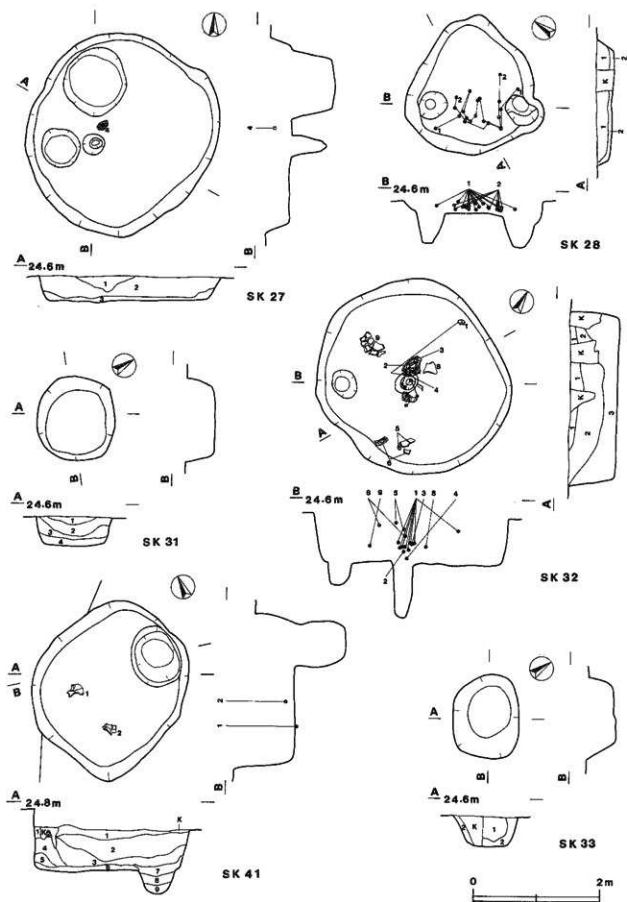
覆土 4層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した縄文土器及び縄文土器片が覆土中から130点ほど出土している。第114図1は深鉢形土器の口縁部片である。ほとんどの土器片は加曾利E I式に属するものであるが、1は加曾利E II式に属するもので流れ込みと考えられる。その他に、覆土中から剥片2点が出土している。

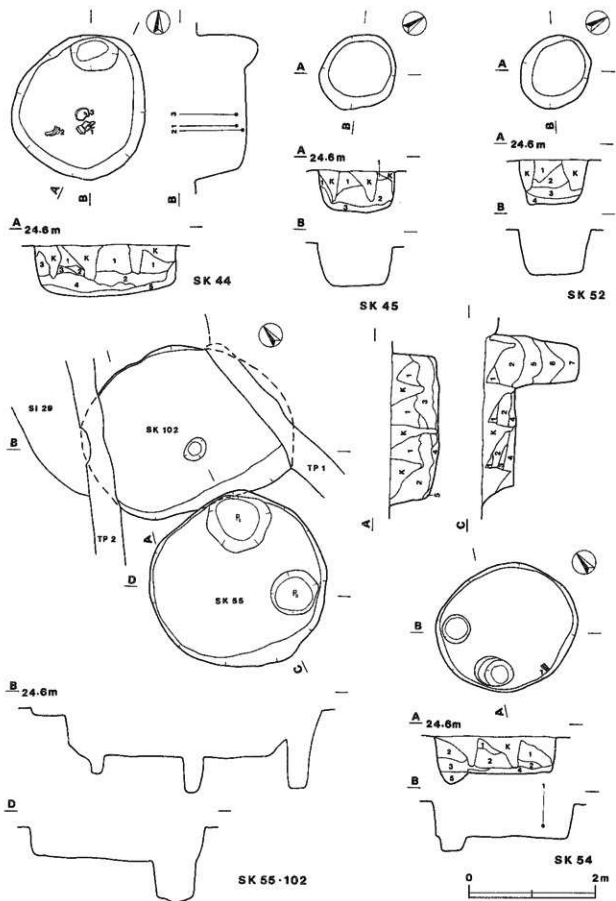
所見 本跡は、土坑の形態から子供ピットをもつ貯蔵穴と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E I式期と考えられる。



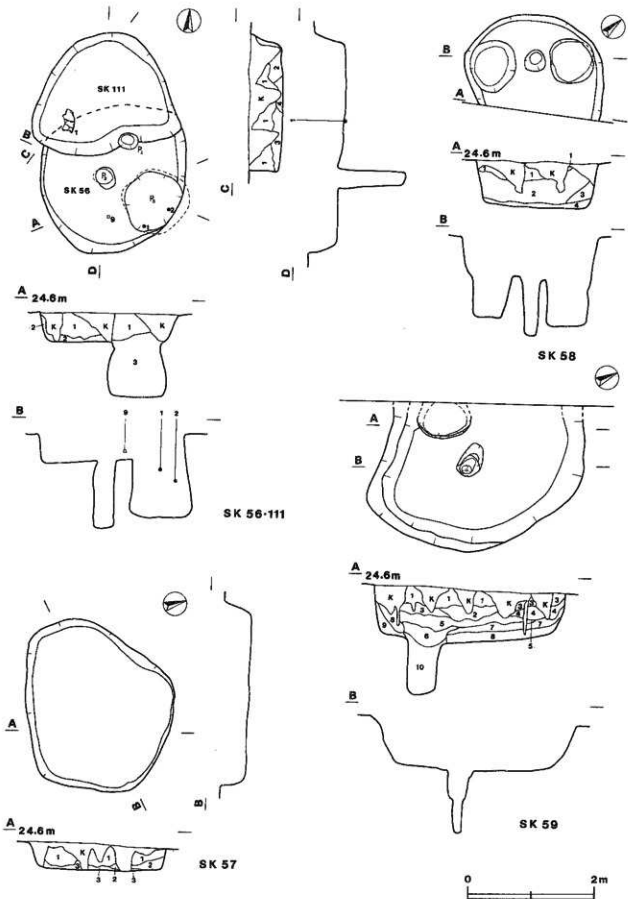
第76图 第17·18·19·22·24·26号土坑突测图



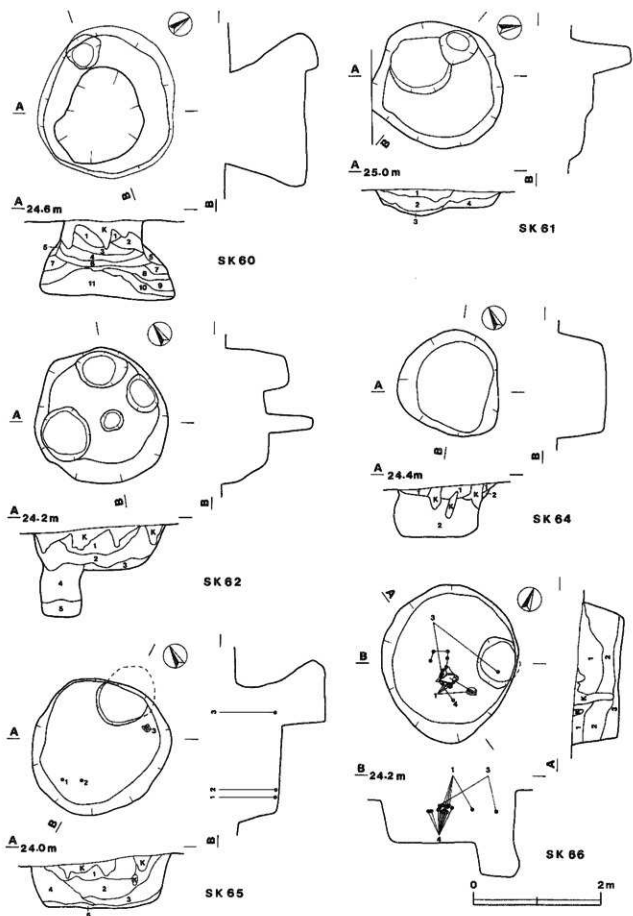
第77图 第27·28·31·32·33·41号土坑实测图



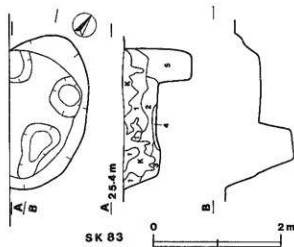
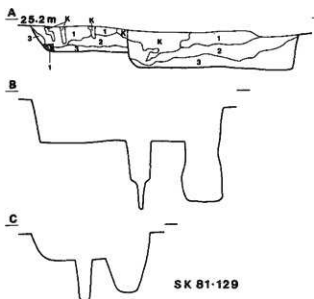
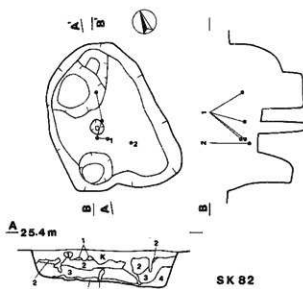
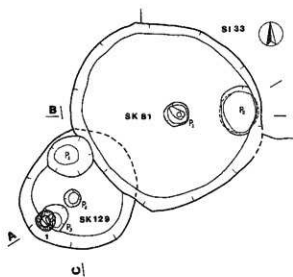
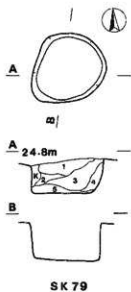
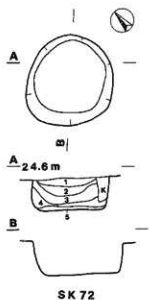
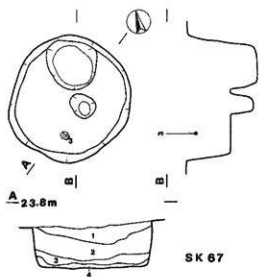
第78图 第44·45·52·54·55·102号土坑实测图



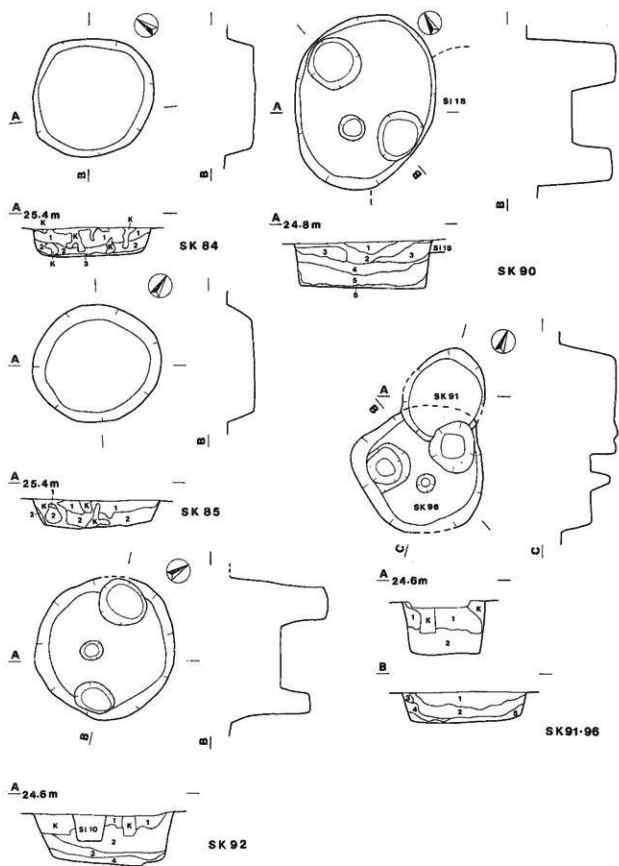
第79图 第56·57·58·59·111号土坑实测图



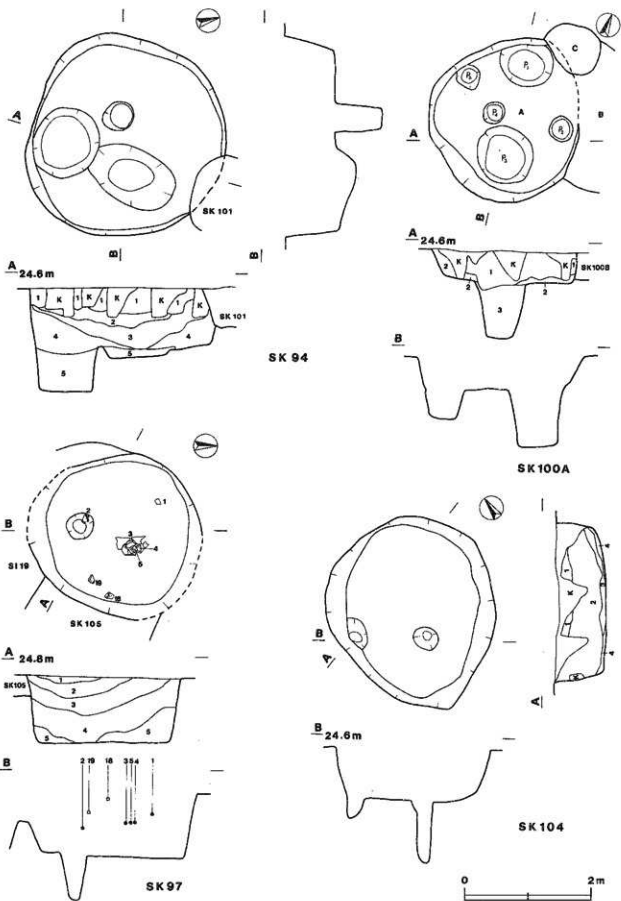
第80图 第60·61·62·64·65·66号土坑实测图



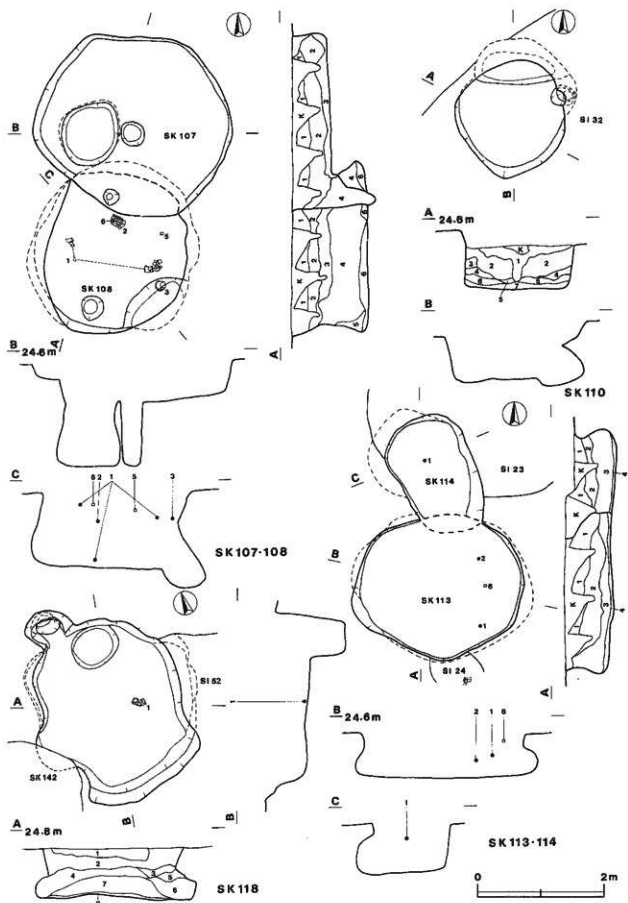
第81图 第67·72·79·81·82·83·129号土坑实测图



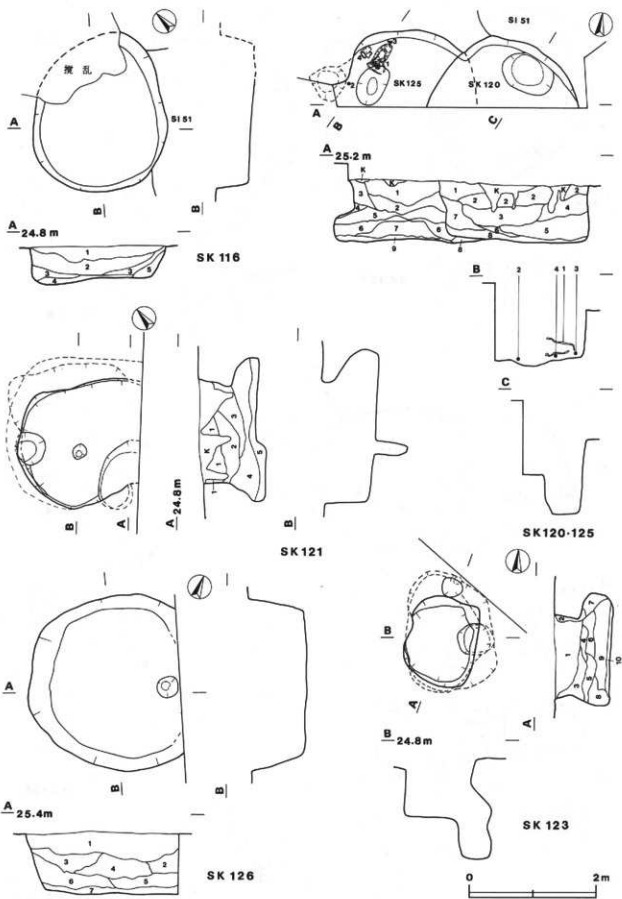
第82图 第84·85·90·91·92·96号土坑突测图



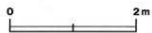
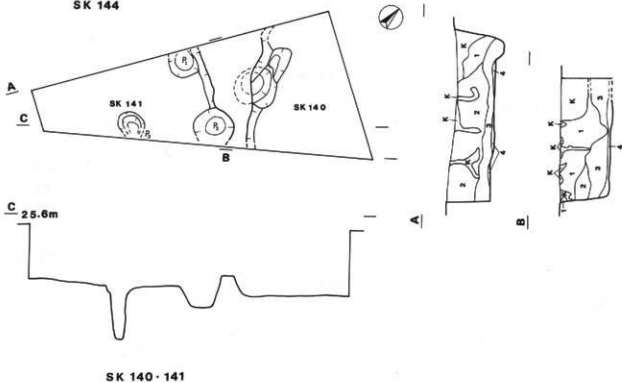
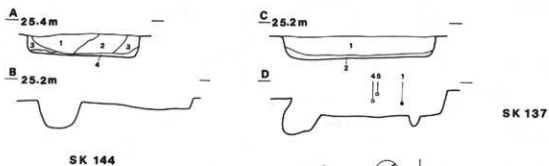
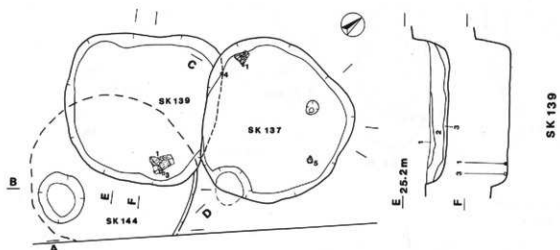
第83图 第94·97·100—A·104号土坑突测图



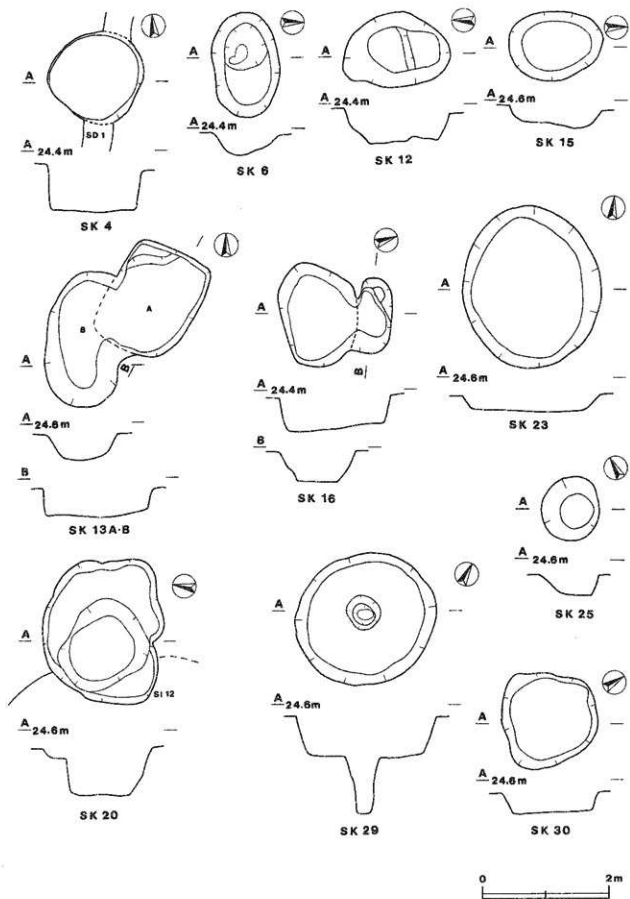
第84图 第107·108·110·113·114·118号土坑实测图



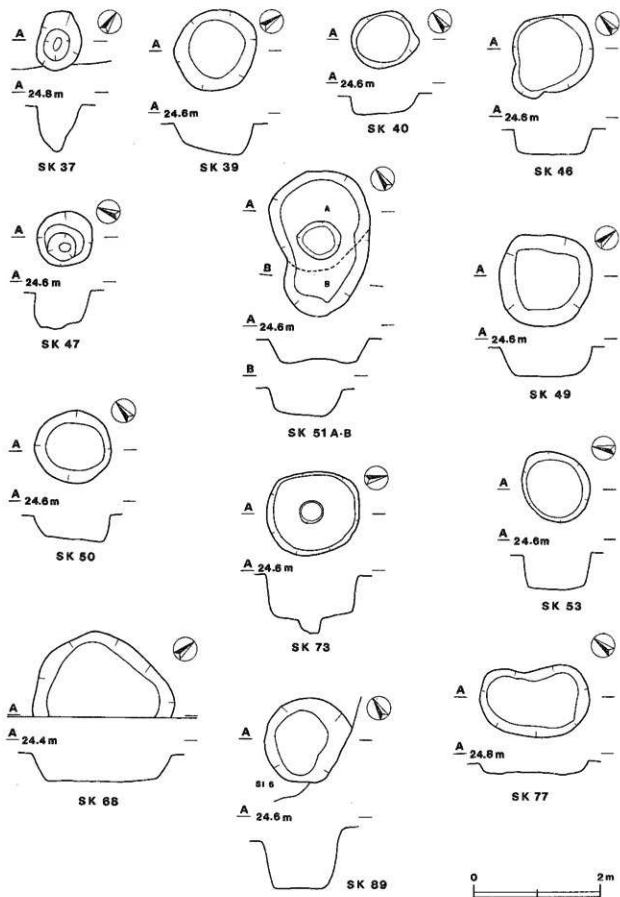
第05图 第116·120·121·123·125·126号土坑夹测图



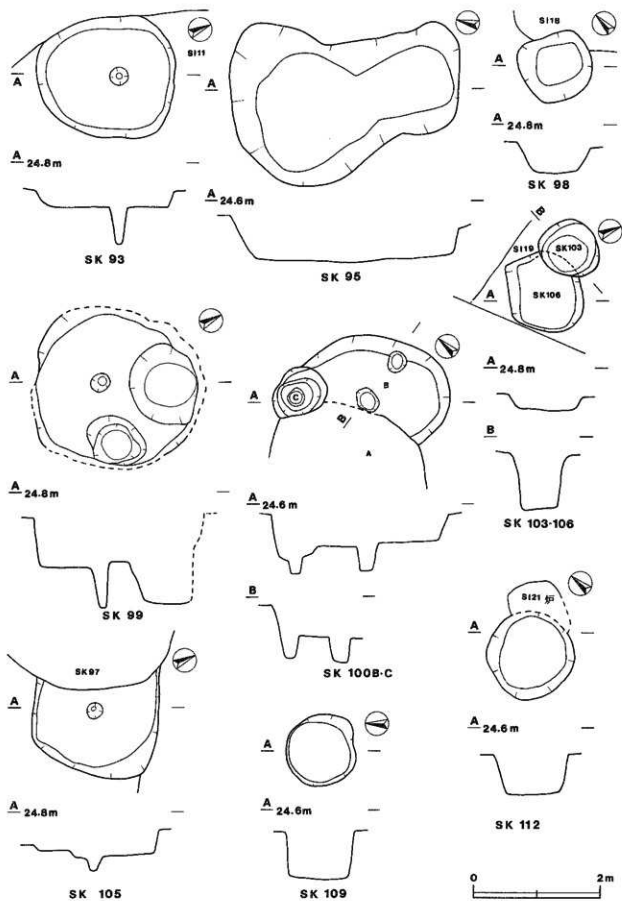
第87图 第137·139·140·141·144号土坑实测图



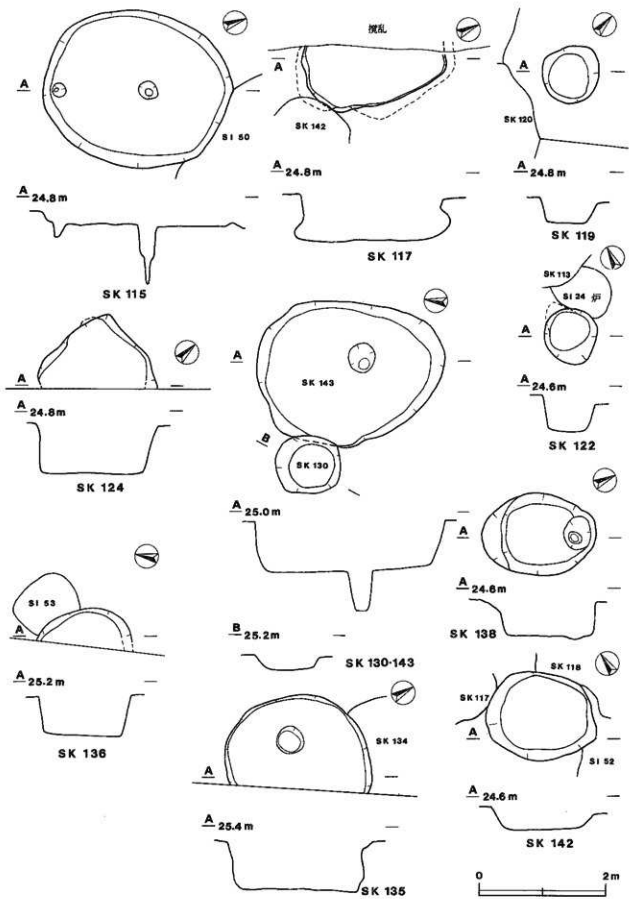
第88图 第4·6·12·13-A·B·15·16·20·23·25·29·30号土坑实测图



第69图 第37·39·40·46·47·49·50·51—A·B·53·68·73·77·89号土坑实测图



第90图 第93·95·98·99·100—B·C·103·105·106·109·112号土坑实测图



第91图 第115·117·119·122·124·130·135·136·138·142·143号土坑实测图

第133号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物中量、ローム大ブロック・焼土中ブロック少量
- 2 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量、ローム大ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物中量
- 4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 6 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

第134号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 近い黄褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量

第137号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子少量

第139号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子微量

第140号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子多量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム大ブロック・焼土中ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム大・中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量

第141号土坑土層解説

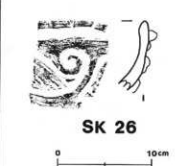
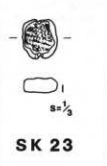
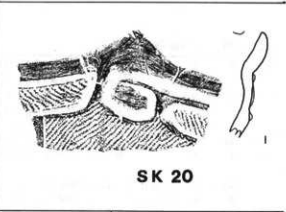
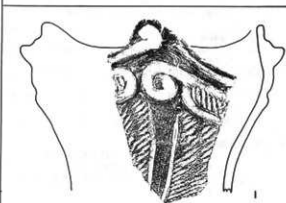
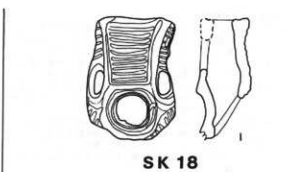
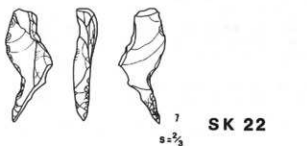
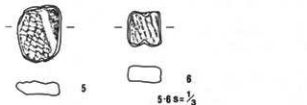
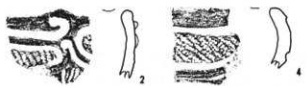
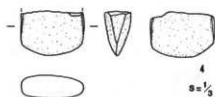
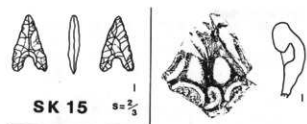
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物中量、ローム大ブロック・焼土大・中ブロック少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・炭化粒子中量、ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

第144号土坑土層解説

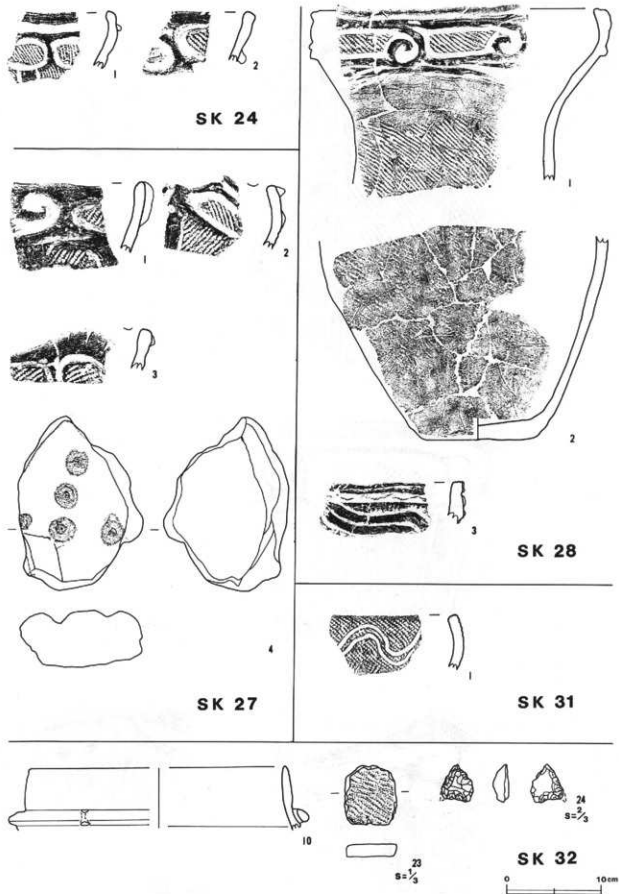
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・炭化粒子中量、ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

土坑出土縄文土器観察表

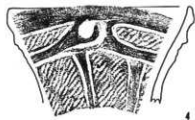
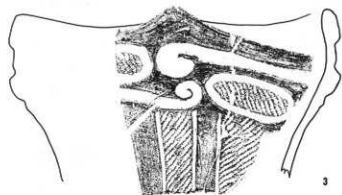
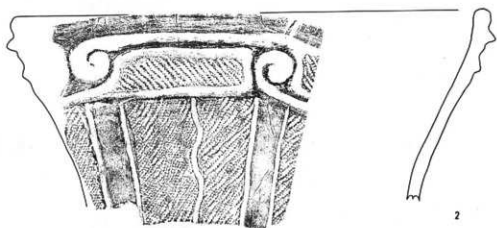
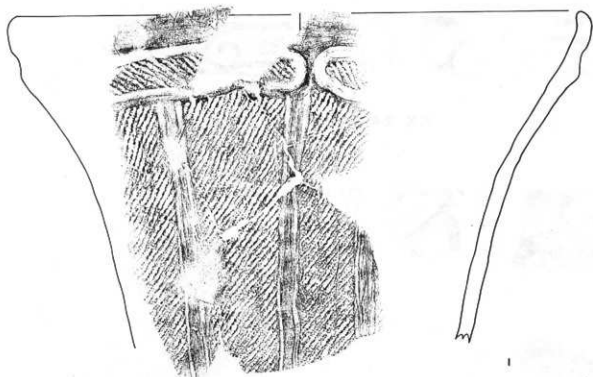
図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第92図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (8.0)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は3つ孔の空く穿孔把手である。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による渦巻文と横円区画文で、区画内に単筋R Lの縄文が施され、口唇部に把手から続く1条の沈線を巡らしている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P205 5% SK 17層土 PL28
第90図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (12.9)	把手部片。把手は5つ孔の空く中空把手で、孔の周囲に隆帯や沈線を巡らし、正面及び右側面に横空の短沈線が充填されている。	砂粒・長石・雲母・石英 褐色 普通	P81 5% SK 18層土 PL28
第92図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (24.4) B (15.7)	口縁部から胴部上半にかけての破片。波状口縁。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による渦巻文と横円区画文で、区画内に単筋R Lの縄文が施されている。渦巻文が描かれたところの口唇部さらに渦巻文を描く突起をもち、そこから続く1条の沈線を巡らしている。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施され、2条の沈線を区画された胴部帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P206 20% SK 19層土 PL28
第93図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 29.6 B (18.0)	胴部下半から底部にかけて欠損。口縁部は地文に単筋R Lの縄文が施され、その上に沈線を沿わせた隆帯を渦巻状及び杵状に貼付している。上方が隆帯で区画された頸部は無文帯である。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 によい褐色 普通	P82 40% SK 20層土上層下・中層 PL28
2	深鉢形土器 縄文土器	B (21.1) C 11.8	口縁部から胴部上半にかけて欠損。平底。胴部は地文に単筋R Lの縄文が施されているが、摩滅が著しい。胴部下層は横位の瘤きである。	砂粒・長石・雲母 によい褐色 普通	P83 50% SK 20層土上層下・中層 PL28



第92图 第15·17·18·19·20·22·23·26号土坑出土遺物実測·拓影图



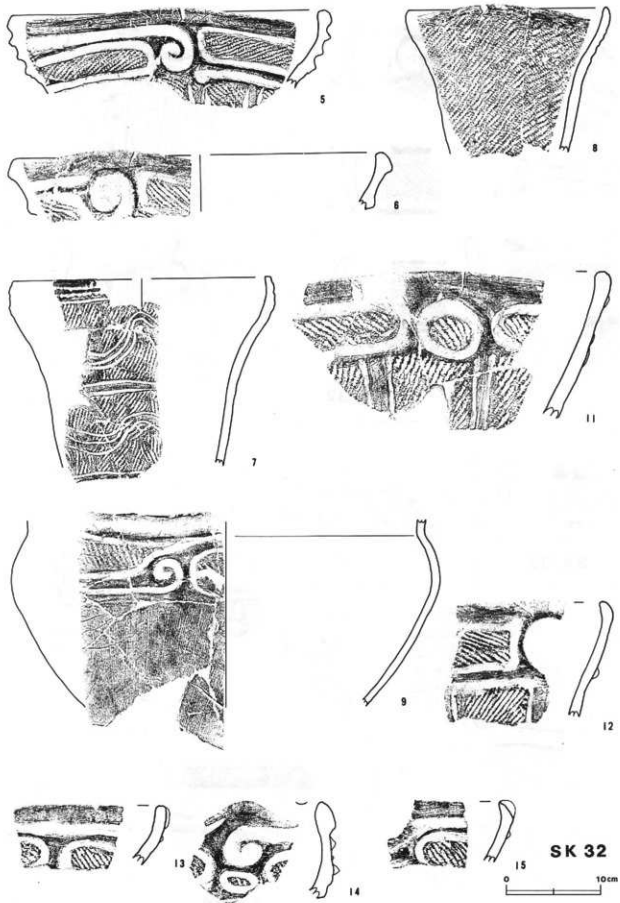
第93圖 第24・27・28・31・32号土坑出土遺物実測・拓影圖



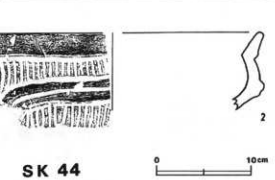
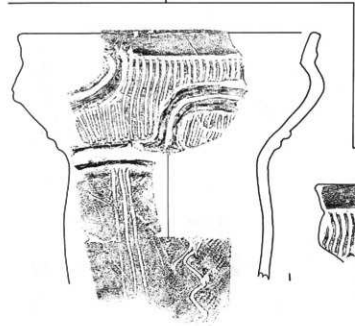
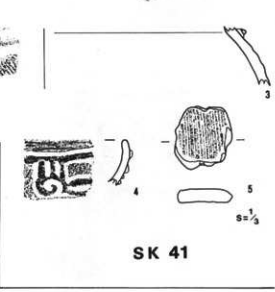
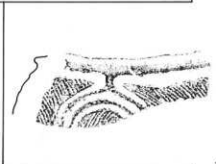
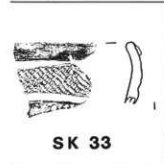
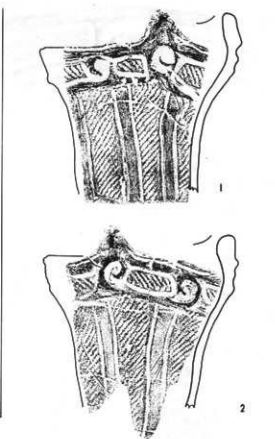
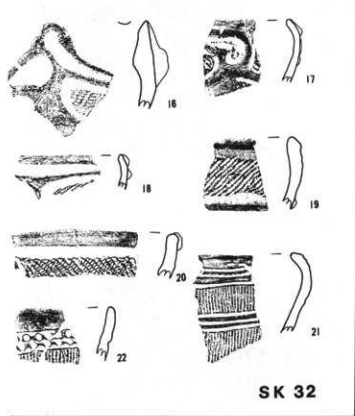
SK 32



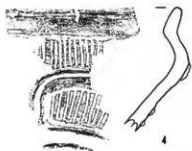
第94图 第32号土坑出土遗物实测·拓影图(1)



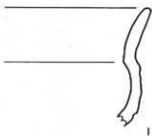
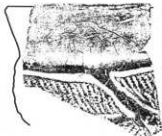
第95图 第32号土坑出土遗物实测·拓影图(2)



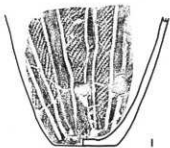
第96图 第32·33·41·44号土坑出土遗物实测·拓影图



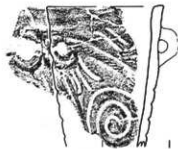
SK 44



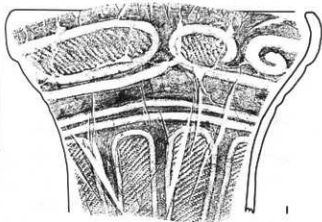
SK 45



SK 52



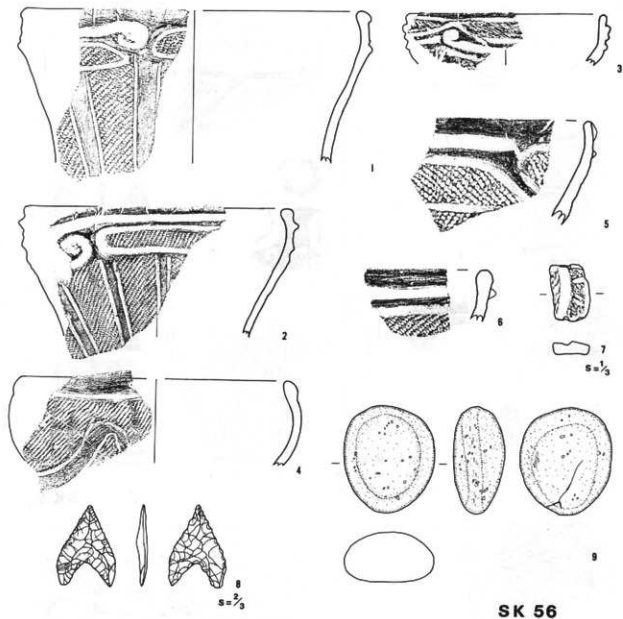
SK 54



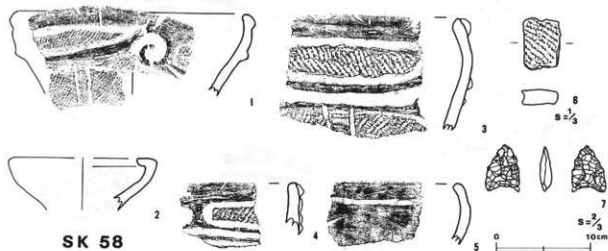
SK 55



第97图 第44·45·52·54·55号土坑出土文物实测·拓影图

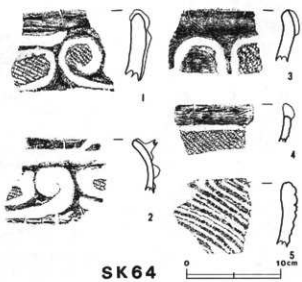
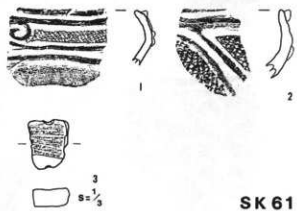
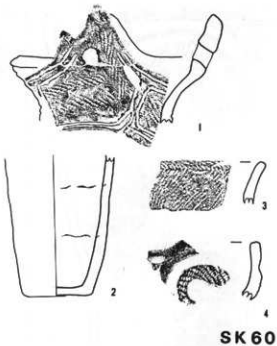
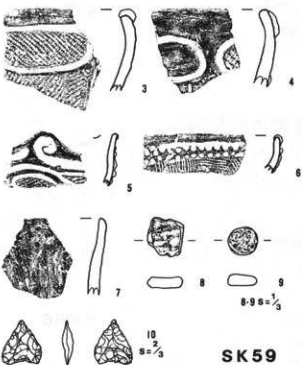
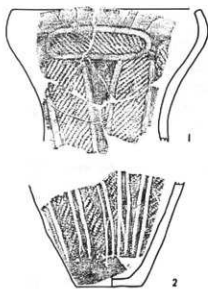
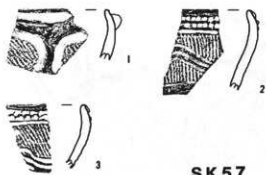


SK 56

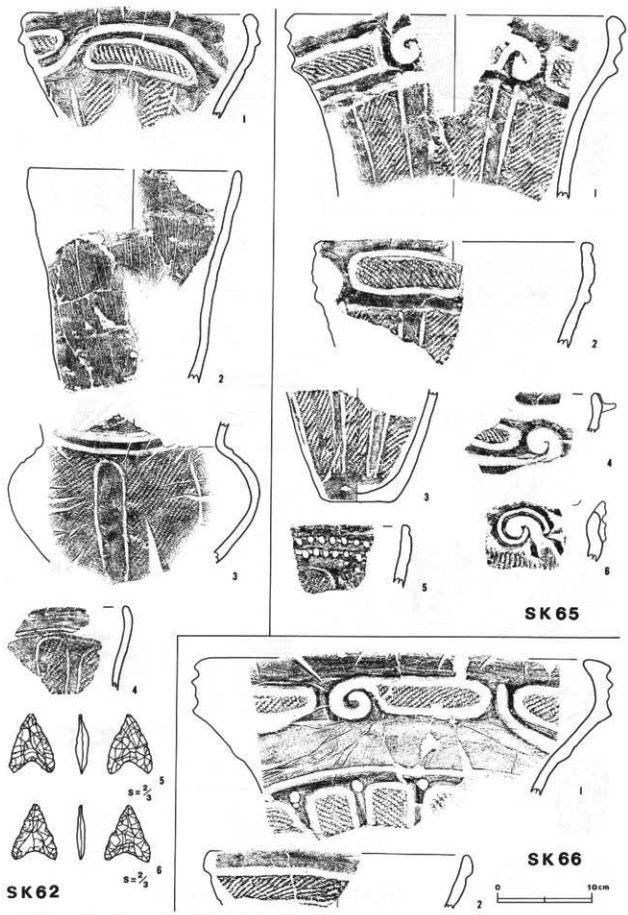


SK 58

第98图 第56·58号土坑出土文物实测·拓影图



第99图 第57·59·60·61·64号土坑出土遗物实测·拓影图

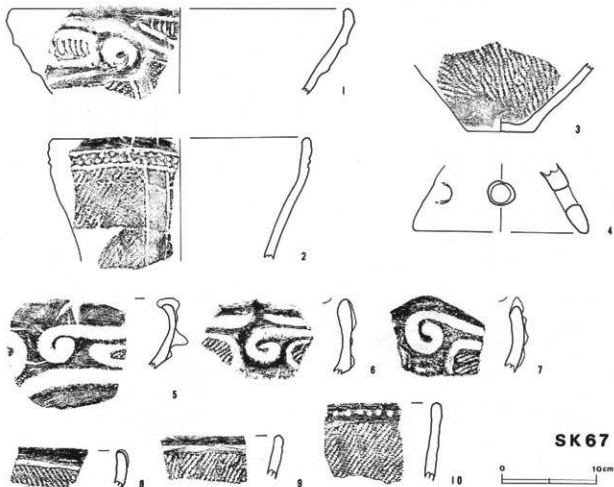
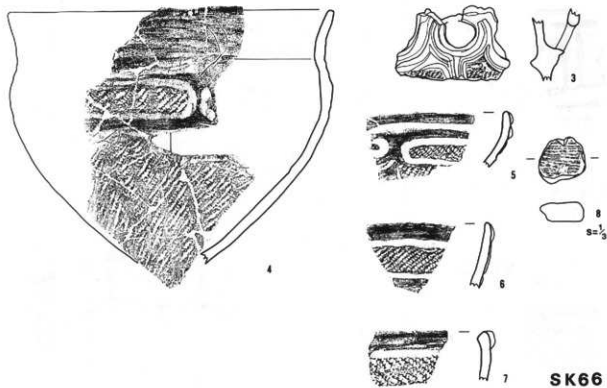


SK62

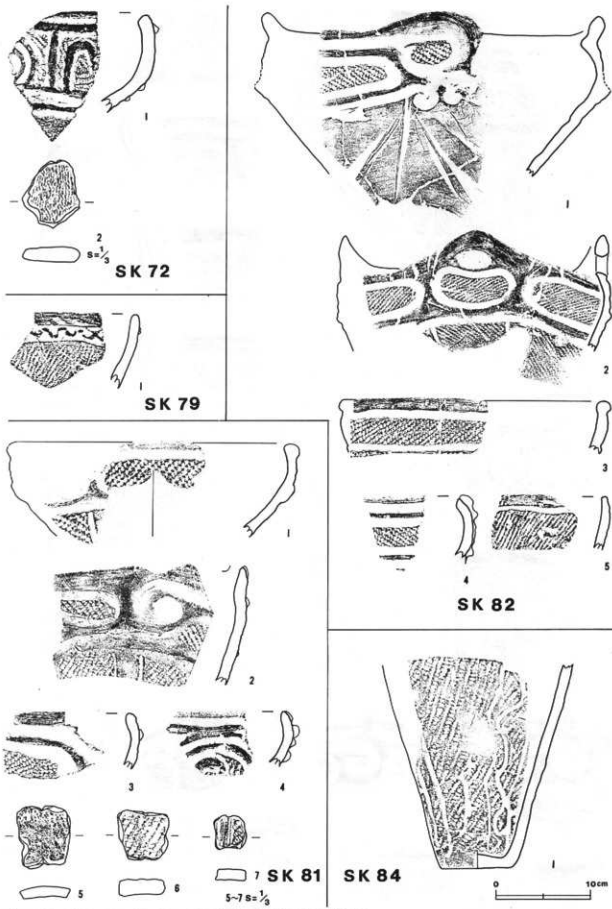
SK65

SK66

第100图 第62·65·66号土坑出土物实测·拓影图



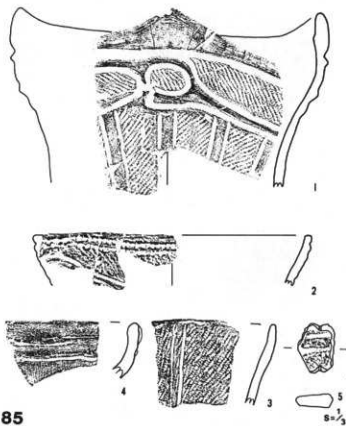
第101图 第66·67号土坑出土遗物实测·拓影图



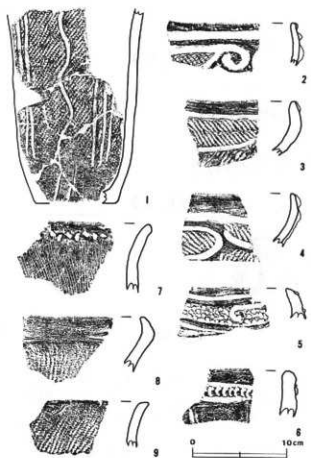
第102图 第72・79・81・82・84号土坑出土遗物实测・拓影图



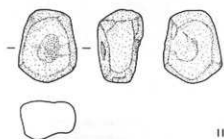
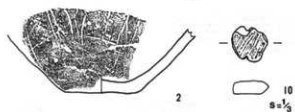
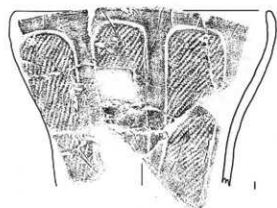
SK 85



SK 90



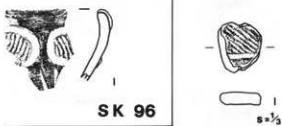
第103图 第83·85·90·91·92·94号土坑出土遗物实测·拓影图



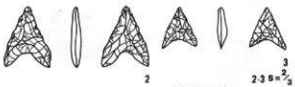
SK 94



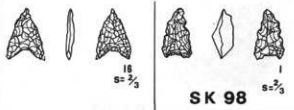
SK 95



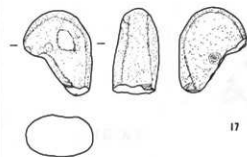
SK 96



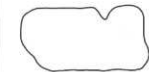
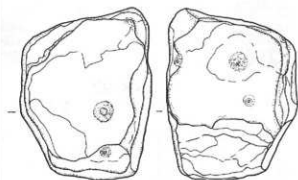
SK 99



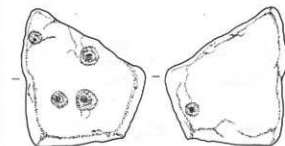
SK 98



17



18

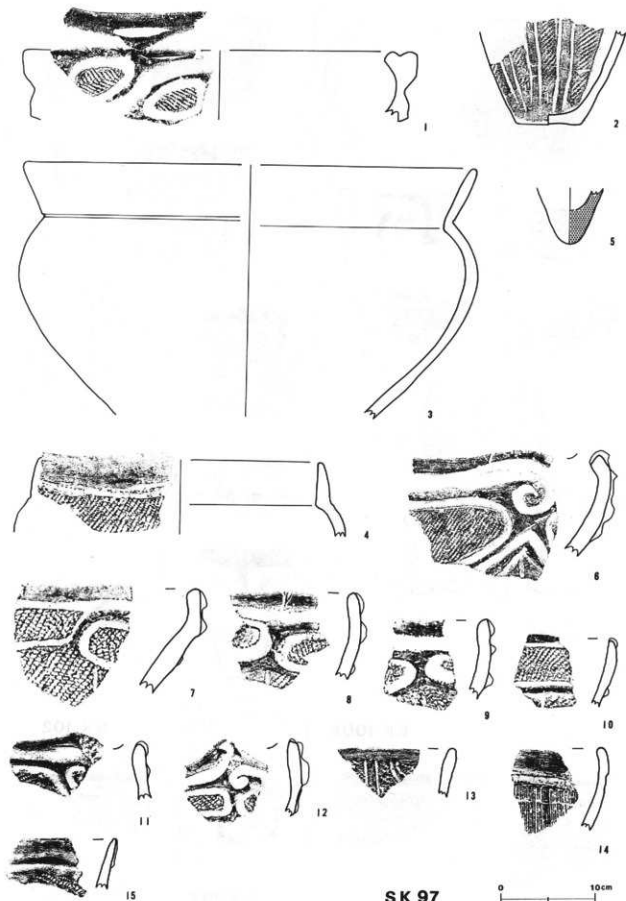


19

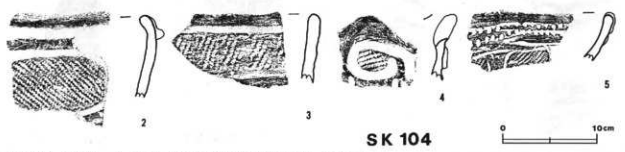
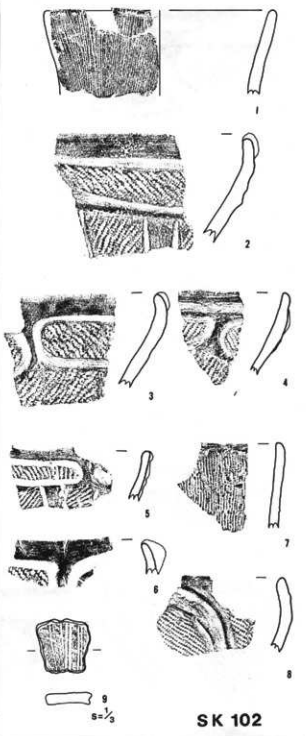
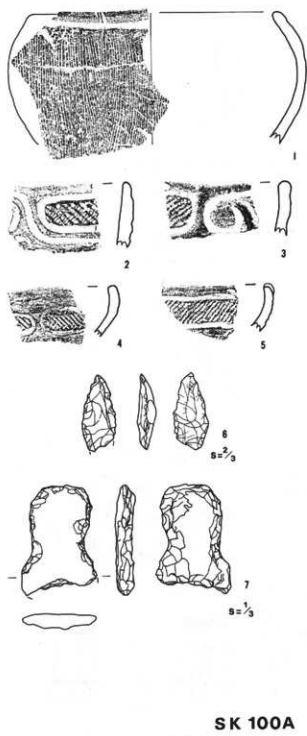
SK 97



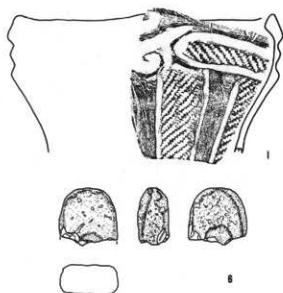
第104图 第94·95·96·97·98·99号土坑出土遗物实测·拓影图



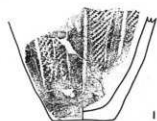
第105图 第97号土坑出土遗物实测·拓影图



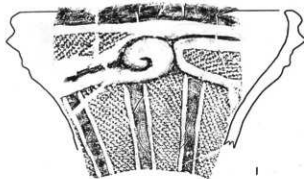
第106图 第100—A・102・104号土坑出土遺物実測・拓影图



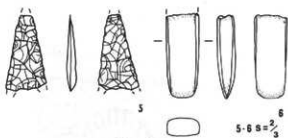
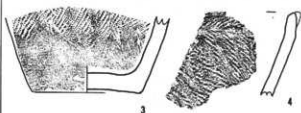
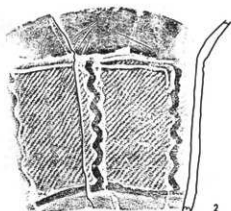
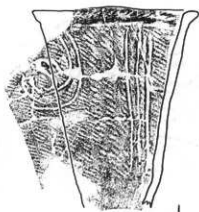
SK 104



SK 107



SK 111

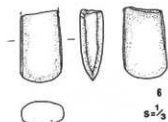
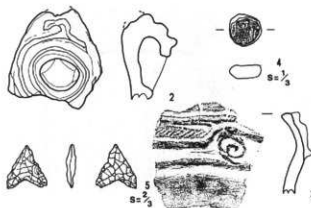
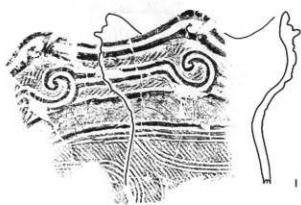


SK 108

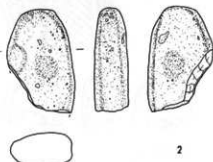
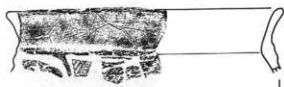


SK 110

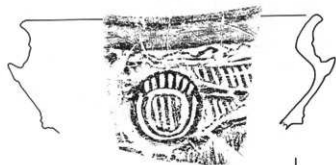
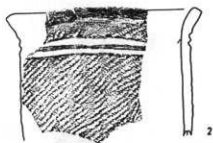
第107图 第104·107·108·110·111号土坑出土遗物实测·拓影图



SK 113



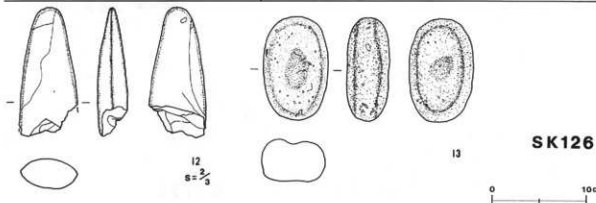
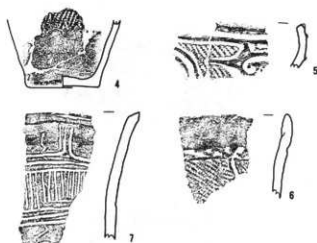
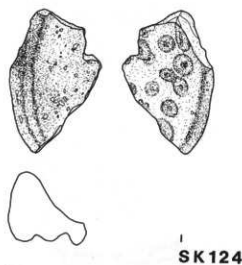
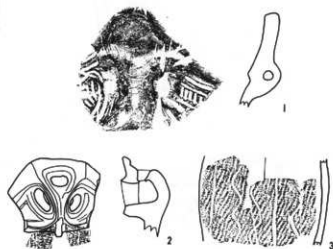
SK 114



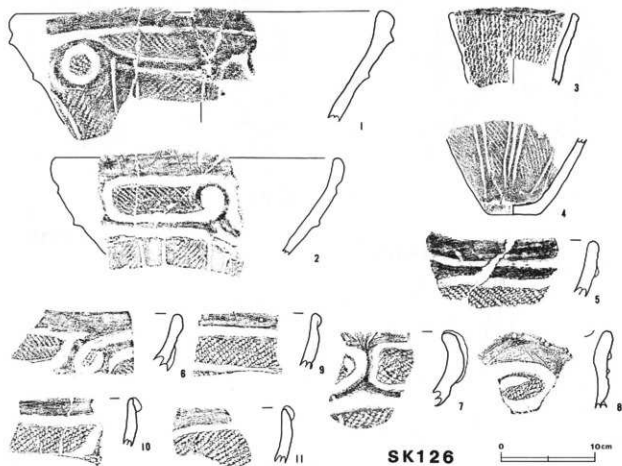
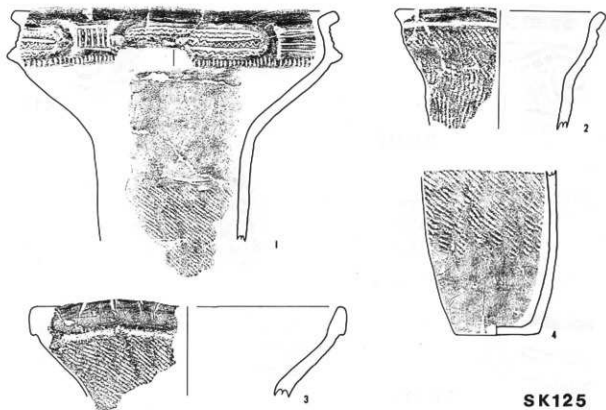
SK 118

0 10cm

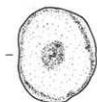
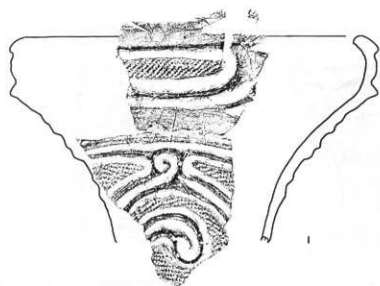
第108图 第113·114·118号土坑出土遗物实测·拓影图



第109图 第116・120・121・123・124・126号土坑出土遺物実測・拓影图

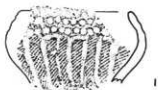


第110图 第125·126号土坑出土文物实测·拓影图

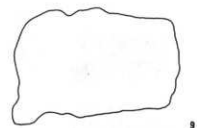
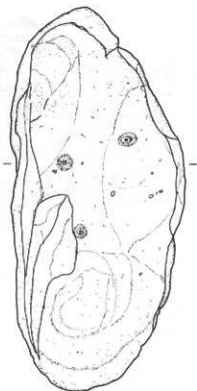


8

SK 127



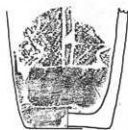
SK 128



9

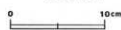


1

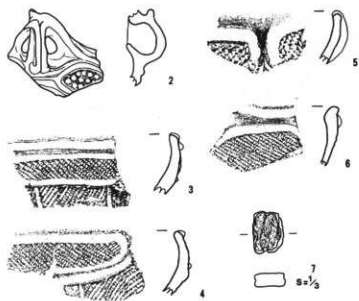
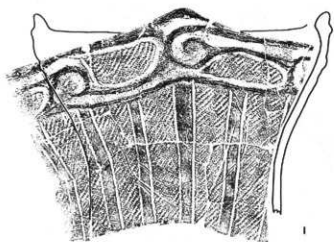


2

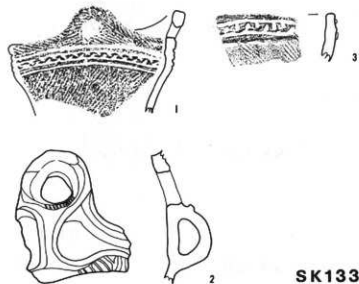
SK 131



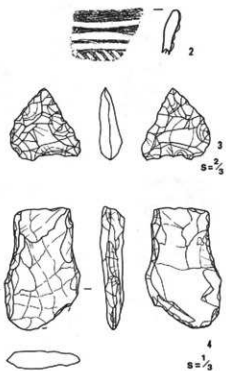
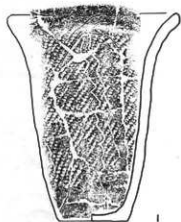
第111图 第127·128·131号土坑出土遗物实测·拓影图



SK129



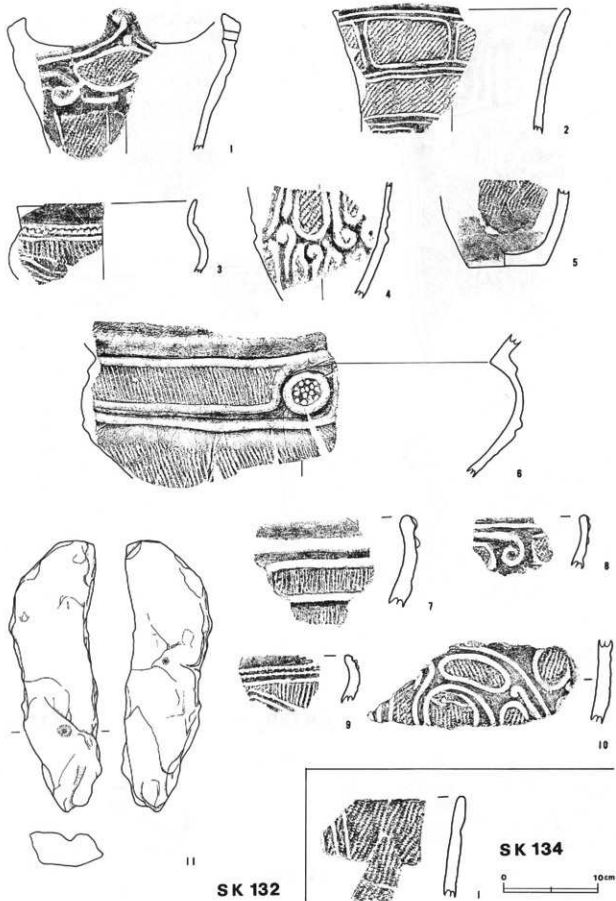
SK133



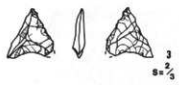
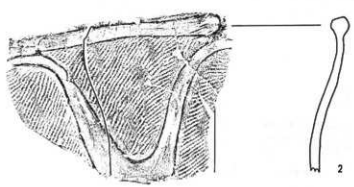
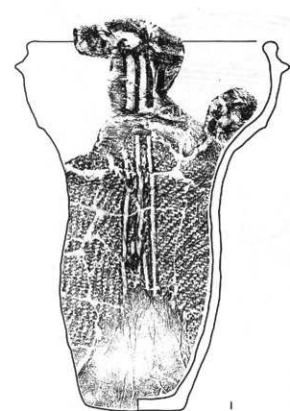
SK137



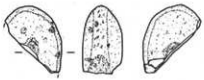
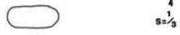
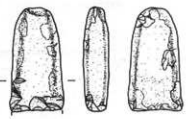
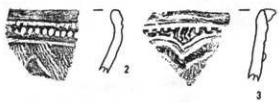
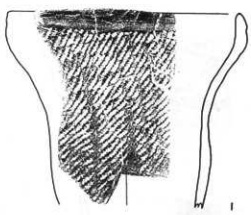
第112图 第129·133·137号土坑出土遗物实测·拓影图



第113图 第132·134号土坑出土遗物实测·拓影图



SK139



SK141



SK140



SK144

第114图 第139・140・141・144号土坑出土遺物実測・拓影图

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第94図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (60.8)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間区面文と長方形区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P84 40% SK-32中央部土中層 PL29
		B (35.1)			
2	深鉢形土器 縄文土器	A (51.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と長方形区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P87 20% SK-32中央部土中層 PL29
		B (20.2)			
3	深鉢形土器 縄文土器	A (33.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と横円区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P88 20% SK-32中央部土中層 PL29
		B (17.8)			
4	深鉢形土器 縄文土器	A 19.4	胴部下半から底部にかけて欠損。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と横円区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P93 30% SK-32中央部土中層 PL29
		B (10.6)			
第95図 5	深鉢形土器 縄文土器	A (33.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と長方形区面文で、区内に単節L Rの縄文が施されている。胴部は地文に単節L Rの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P89 10% SK-32南端土中層 PL30
		B (8.3)			
6	深鉢形土器 縄文土器	A (39.4)	口縁部片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と長方形区面文で、右側の区内には単節R L、左側の区内には単節L Rの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 淡黄褐色 普通	P91 10% SK-32南端土中層 PL30
		B (6.0)			
7	深鉢形土器 縄文土器	A (27.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は3条単位の沈線を通らし、口唇部に近い2条の沈線には円形刺突文が重ねられている。口縁部下半は地文に単節R Lの縄文が施され、3条の沈線で区画された磨消帯を波状に巡らしている。胴部は地文に単節L Rの縄文が施され、3条の沈線で区画された磨消帯を波状に巡らしている。また、その下にも沈線で区画された波状の磨消帯が認められる。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P94 20% SK-32覆土 PL30
		B (20.0)			
8	深鉢形土器 縄文土器	A (32.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部上端は無文帯で、それ以外の器面は全面に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P92 20% SK-32中央部土中層 PL29
		B (15.3)			
9	鉢形土器 縄文土器	A (19.7)	口縁部下半から胴部にかけての破片。口縁部下半は隆縁で区画された無文帯で、「く」の字状に外傾する。胴部上端は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と横円区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に細かな条線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P96 40% SK-32中央部土中層 PL29
		B (19.7)			
第93図 10	有孔肩付土器 縄文土器	A (27.4)	口縁部は横位の瘤が施されている。口縁部直下に肩状の隆帯が貼付され、その肩状隆帯には上下に貫通する孔が空けられている。口縁部上半及び口縁部内面には赤形の痕が一部遺存している。	砂粒・長石・雲母 褐色 内面は黒色 普通	P97 5% SK-32覆土 PL29
		B (6.8)			
第96図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (20.6)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と長方形区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。一方の横間文が描かれたところの口唇部に舌状突起をもち、そこから1条の沈線を通らしている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 黄褐色 普通	P98 20% SK-41中央部底直上 PL30
		B (19.0)			
2	深鉢形土器 縄文土器	A (20.6)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横間文と長方形区面文で、区内に単節R Lの縄文が施されている。一方の横間文が描かれたところの口唇部に舌状突起をもち、そこから1条の沈線を通らしている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 黄褐色 普通	P99 20% SK-41中央部底直上層 P98と同一個体 PL30
		B (18.5)			
3	有孔肩付土器 縄文土器	B (5.8)	胴部上半の破片。口縁部直下に肩状の隆帯が貼付され、その肩状隆帯には上下に貫通する孔が空けられている。胴部は地文に単節L Rの縄文が施され、その中に2条単位の隆縁とそれに沿う3条単位の沈線で横間文が描かれているものと思われる。肩状隆帯の上端には赤形の痕が一部遺存している。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 内面は黒色 普通	P100 5% SK-41覆土 PL30

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼色	備 考
第96図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (32.0) B (26.7)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は幅の広い隆帯、胴部との境に中央になぞりを伴う隆帯をそれぞれ帯状に貼付して区画し、その中に沈線に伴う隆帯をクランク状に貼付している。区画内に縦位の短沈線が充填されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、3条単位の沈線を直線状に懸垂し、その間にも2条あるいは1条単位の沈線を波状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	P101 30% SK-49中央部土層 PL30
	深鉢形土器 縄文土器	A (32.0) B (8.3)	口縁部片。口縁部は幅の広い隆帯を帯状に、その下方に沈線に伴う隆帯をクランク状に貼付して区画しており、区画内に縦位の短沈線が充填されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	P102 10% SK-49中央部土層 P101と同一体 PL30
第97図 3	浅鉢形土器 縄文土器	A (22.2) B (7.9) C (8.2)	平底、平縁口縁であるが、口縁部に5単位の押圧による波状加工が2か所認められる。口縁部上端に2条あるいは1条単位の沈線を巡らし、それ以下横位の磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 内面はオリーブ褐色 普通	P103 60% SK-49中央部土層 PL31
	鉢形土器 縄文土器	A (33.2) B (12.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯で区画された無文帯で、「く」の字状に外縁する。胴部上端は隆帯とそれに沿う沈線による棒状文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P207 20% SK-45覆土
第97図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (13.6) C 7.0	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を胴部直下まで直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 橙褐色 普通	P104 30% SK-52覆土 PL31
第97図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (12.2) B (14.8)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は無文帯で、口縁部直下に縦線状把手が付く。把手は孔の周囲に隆帯や沈線を巡らしている。胴部上位に把手から続く2条の隆帯が貼付され、その隆帯上には単節R Lの縄文が施されている。また、胴部には渦巻文などの沈線文様も描かれている。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P105 20% SK-50中央部土層 PL31
	深鉢形土器 縄文土器	A (32.0) B (21.3)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と楕円区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。口縁部下半は無文帯で、胴部との境に2条の沈線で区画された磨消帯を帯状に巡らしている。胴部は1条の沈線による縦長楕円と思われる区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されており、区画外は磨消されている。	砂粒・長石・雲母 橙褐色 普通	P106 30% SK-55、P、覆土 PL31
2	深鉢形土器 縄文土器	B (6.7) C 7.4	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された幅の狭い磨消帯を直線状に懸垂し、その間にも1条単位の沈線を2条直線状に懸垂している。胴部直下は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 橙褐色 普通	P108 20% SK-55覆土 PL31
	深鉢形土器 縄文土器	A (36.2) B (16.1)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と楕円区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P109 20% SK-56、P、覆土 PL31
2	深鉢形土器 縄文土器	A (28.4) B (13.7)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と長方形区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 橙褐色 普通	P110 20% SK-56、P、覆土 PL31
	深鉢形土器 縄文土器	A (21.0) B (5.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と楕円区画文で、区画内に無節Lの縄文が施されている。胴部は地文に無節Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 橙褐色 普通	P208 10% SK-56覆土
4	鉢形土器 縄文土器	A (28.2) B (8.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は幅の広い隆帯を帯状に貼付している。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を波状に巡らしている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	P209 10% SK-56覆土
	深鉢形土器 縄文土器	A (24.6) B (8.6)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と楕円区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P111 10% SK-58覆土 PL31
2	浅鉢形土器 縄文土器	A (15.8) B (5.5)	底部欠損。口縁部を「く」の字状に内縁させ、幅の広い平縁状の口唇部を作り出している。口唇部以下横位の磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P112 20% SK-58覆土 PL32
	深鉢形土器 縄文土器	A (20.0) B (14.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は沈線による楕円区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	P210 20% SK-59覆土下層 普通

図版番号	器 種	計測値(cm)	輪 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第99図 2	深鉢形土器	B (11.0)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条あるいは4条の沈線で区画された磨消帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 ぶい・褐色 普通	P113 30% SK-59覆土中層 PL32
	縄文土器	C 7.0			
第99図 1	深鉢形土器	A (20.4)	口縁部片。口縁部は地に単節R Lの縄文が施され、その上に沈線による杵状文が描かれている。口唇部に先端が2つの舌状把手をもち、その把手中央には1つの孔が空けられている。	砂粒・長石・雲母 ぶい・褐色 普通	P114 20% SK-60覆土 PL32
	縄文土器	B (11.5)			
2	深鉢形土器	B (14.5)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は縦位のナガが施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P115 30% SK-60覆土 PL32
	縄文土器	C 7.4			
第100図 1	深鉢形土器	A (24.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P117 20% SK-62覆土 PL32
	縄文土器	B (11.0)			
2	深鉢形土器	A (22.0)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部及び胴部とも地文に細かな条線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P116 30% SK-62覆土 PL32
	縄文土器	B (22.3)			
3	鉢形土器	B (14.2)	口縁部下半から胴部にかけての破片。口縁部下半は1条の隆線と沈線で区画された無文帯で、「く」の字状に外傾する。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、その中に1条の沈線による縦長杵柄と思われる区画文が描かれており、区画内は磨消されている。	砂粒・長石・雲母 ぶい・褐色 普通	P118 30% SK-62覆土 PL32
	縄文土器	C 7.4			
第100図 1	深鉢形土器	A (34.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀文と長方形区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母・石英 褐色 普通	P119 20% SK-63西區直道上 PL33
	縄文土器	B (19.3)			
2	深鉢形土器	A (28.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀区画文と長方形区画文と思われ、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P211 20% SK-63西區直道上
	縄文土器	B (11.2)			
3	深鉢形土器	B (11.6)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P120 30% SK-64西區直上層 PL33
	縄文土器	C 7.6			
第100図 1	深鉢形土器	A (42.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀文と栴檀区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。口縁部下半は無文帯で、胴部との境に1条の隆線と沈線を帯状に巡らしている。胴部は隆線とそれに沿う沈線による縦長杵柄と思われる区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されており、懸垂する隆線の起点には円形の押圧がある。	砂粒・長石・雲母・石英 褐色 普通	P123 20% SK-66中央部直上層 PL33
	縄文土器	B (14.4)			
2	深鉢形土器	A (27.4)	口縁部片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀区画文と思われ、区画内に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P122 10% SK-66覆土
	縄文土器	B (5.7)			
第101図 3	深鉢形土器	B (7.1)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は3つ以上孔の空く中空把手で、孔の周囲に隆帯や沈線を通らしている。口縁部は地に単節R Lの縄文が施され、把手から隆帯を放射している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P124 5% SK-66中央部直上層 PL33
4	鉢形土器	A (34.4)	底部欠損。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀区画文と長方形区画文と思われ、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 ぶい・褐色 普通	P121 30% SK-66中央部直上層 PL33
	縄文土器	B (26.8)			
第101図 1	深鉢形土器	A (36.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による栴檀文と栴檀区画文で、区画内に縦位の短沈線が充満されている。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P212 10% SK-67覆土
	縄文土器	B (9.0)			
2	深鉢形土器	A (27.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は2条の沈線で区画され、区画内に2列の連続的欠文が施されている。胴部は地に単節R Lが施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P213 20% SK-67覆土
	縄文土器	B (12.9)			
3	鉢形土器	B (7.0)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地に単節R Lの縄文が施されている。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P125 20% SK-67西區直上層 PL33
	縄文土器	C 7.0			

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第101図 4	深鉢形土器 縄文土器	B (7.0)	唇受部欠損。胴部は直線的に開き、中位に透かし孔が空く。横位及び斜位のナデが施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P126 20% SK-67覆土 PL33
		C (18.4)			
第102図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (30.6)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による栞円区画文で、区画内に複筋L R Lの縄文が施されている。胴部は地文に複筋L R Lの縄文が施され、沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P127 10% SK-81覆土 PL33
		B (9.9)			
第102図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (36.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。緩やかな波状口縁。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による栞円区画文で、区画内に複筋L R Lの縄文が施されている。口縁部下半は無文帯で、胴部との境に1条の沈線が認められる。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P128 20% SK-40中央部覆土中層 PL33
		B (17.0)			
2	深鉢形土器 縄文土器	A (27.8)	口縁部から胴部上半にかけての破片。波状口縁。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による栞円区画文で、区画内に単筋L Rの縄文が施されている。小さい方の栞円区画文が描かれたところの口唇部、1つ孔の空く穿孔肥手が付く。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P129 20% SK-42中央部覆土中層 PL34
		B (12.3)			
3	深鉢形土器 縄文土器	A (28.0)	口縁部片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による長方形区画文と思われ、区画内に単筋L Rの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P130 10% SK-82覆土
		B (5.0)			
第103図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (9.0)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、中央がやや凹む。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施されている。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P131 20% SK-83覆土 PL34
		C 6.2			
第102図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (21.5)	口縁部から胴部上半にかけて欠損。平底。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、2条単位の沈線を直線状に懸垂し、その間にも3条単位の沈線を波状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P132 50% SK-84覆土 PL34
		C 7.4			
第103図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (33.6)	口縁部から胴部上半にかけての破片。緩やかな波状口縁。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による栞円区画文で、区画内に単筋L Rの縄文が施されている。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P133 20% SK-85覆土 PL34
		B (18.4)			
2	深鉢形土器 縄文土器	A (29.4)	口縁部片。口縁部は2条単位の沈線を巡らし、その沈線には円形刺突文が重ねられている。口縁部下半は地文に磨余文が施され、2条以上の沈線で区画された磨消帯を波状に巡らしている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P214 10% SK-85覆土
		B (5.3)			
第103図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (20.0)	志那から胴部にかけての破片。平底。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、3条単位の沈線を直線状に懸垂し、その間にも1条の沈線を波状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P135 30% SK-90覆土 PL34
		C (8.6)			
第104図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (27.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部文様帯は消失し、胴部文様帯と一体化している。1条の沈線による縦長栞円と思われる区画文で、区画内に単筋L Rの縄文が施されており、区画外は磨消されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P137 20% SK-94覆土
		B (18.6)			
2	深鉢形土器 縄文土器	B (6.1)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、2条あるいは3条の沈線で区画された磨消帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P139 20% SK-94覆土 PL34
		C 8.2			
第105図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (42.0)	口縁部片。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による栞円区画文で、区画内に単筋L Rの縄文が施されている。栞円区画文の先端で磨消帯がコブ状に隆起し、その1帯部に短沈線が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P215 10% SK-42北端覆土中層
		B (7.3)			
2	深鉢形土器 縄文土器	B (9.8)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単筋L Rの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P64 20% SK-49中央部覆土中層 PL35
		C 7.0			
3	鉢形土器 縄文土器	A (48.2)	底面欠損。口縁部は沈線で区画された無文帯で、「く」の字状に外縁する。口縁部及び胴部上半は横位の磨き、胴部下半は縦位の磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 褐色 普通	P63 30% SK-99中央部覆土中層 PL35
		B (26.7)			
4	鉢形土器 縄文土器	A (30.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は沈線で区画された無文帯で、ほぼ直立する。胴部上半は地文に単筋L Rの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P216 10% SK-47中央部覆土中層 普通
		B (7.8)			
5	深鉢形土器 縄文土器	B (6.4)	底部片。尖底。外面は縦位のナデ、内面は斜位のナデが施されている。磨消土器である。	砂粒・長石・雲母・黒褐色 褐色 普通	P65 10% SK-49中央部覆土中層 PL35

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 ビ 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第106図 1	鉢形土器 縄文土器	A (26.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は沈線で区画された無文帯である。胴部は地に細かな条線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P140 20% SK-100A覆土
		B (13.9)			
第106図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (24.8)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部及び胴部とも地に細かな条線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P217 10% SK-102覆土
		B (9.0)			
第107図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (27.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。腰やかな波状口縁。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による渦巻文と横門区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された渦巻帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P218 20% SK-104覆土下層
		B (14.5)			
第107図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (10.6)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された渦巻帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P141 30% SK-107覆土 PL36
		C 6.4			
第107図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 18.8	底部欠損。腰やかな波状口縁。口縁部上端に隆帯が帯状に貼付され、その隆帯には無節Lの縄文が施されている。胴部は地に無節Lの縄文が施され、3条単位の沈線を口縁部直下から直線状に懸垂し、その間にも2条単位の沈線で渦巻文が描かれている。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P142 60% SK-108中央部土中層 PL36
		B (21.2)			
2	深鉢形土器 縄文土器	B (20.0)	口縁部上半及び底部欠損。口縁部下半は無文帯である。胴部は地に単節R Lの縄文が施され、上端に2条単位の沈線を巡らしている。また、両側に沈線に沿った隆帯を口縁部直下から波状に貼付し、胴部下端にも片側に沈線に沿った隆帯を帯状に貼付している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P143 60% SK-109中央部土中層 PL36
		C 11.2			
3	深鉢形土器 縄文土器	B (7.9)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、中央がやや凹む。胴部は地に単節R Lの縄文が施されている。胴部下端は横位のナデである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P144 30% SK-110中央部土中層 PL36
		C 11.2			
第107図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (7.8)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は4つ孔の空く中空把手で、孔の周囲に隆帯や沈線が巡らしている。口縁部は地に単節R Lの縄文が施され、把手から続く隆帯を貼付している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P219 5% SK-110覆土 PL36
第107図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (29.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による渦巻文と横門区画文で、区画内に複節L R Lの縄文が施されている。胴部は地に複節L R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された渦巻帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P145 20% SK-111中部覆土上 PL36
		B (14.6)			
第108図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 19.0	胴部下半から底部にかけて欠損。波状口縁。口縁部は地に単節L Rの縄文が施され、その上に沈線に沿った隆帯を渦巻状及び帯状に貼付している。渦巻文が描かれたところの口唇部にさらに渦巻文を描く突起をもち、そこから続く1条の沈線を巡らしている。上方が隆帯、下方が隆帯と3条単位の沈線で区画された胴部は無文帯である。胴部は地に単節L Rの縄文が施され、その中に3条単位の沈線で渦巻文やクランク文が描かれている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P146 40% SK-112中部覆土中層 PL36
		B (18.3)			
2	深鉢形土器 縄文土器	B (10.6)	把手部片。把手は3つ孔の空く中空把手で、孔の周囲に隆帯や沈線が巡らしている。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P147 5% SK-113底部覆土中層 PL36
第108図 1	鉢形土器 縄文土器	A (29.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯で区画された無文帯で、「く」の字状に外傾する。胴部上端は隆帯とそれに沿う沈線による区画文で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P220 10% SK-114中部覆土中層
		B (6.5)			
第108図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (32.0)	口縁部。口縁部上端に幅の広い隆帯を帯状に貼付し、その直下を沈線で区画しており、区画内に交互刺状文が施されている。口縁部下半は沈線に伴う隆帯を円形及び帯状に貼付して区画し、その円形隆帯の上端には期目が施されている。区画内に縦位の短沈線が充填されている。	砂粒・長石・雲母・石英 明赤褐色 普通	P148 20% SK-115中部覆土上 PL37
		B (12.0)			
2	深鉢形土器 縄文土器	A [20.8]	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は2条の沈線で区画され、一部に単節R Lの縄文が認められる。胴部は地に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P149 20% SK-117覆土 PL37
		B (13.4)			
3	浅鉢形土器 縄文土器	A (30.6)	口縁部片。平縁口縁。一部に単節L Rの縄文が認められる。口縁部以下横位のナデが施されている。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P150 10% SK-118覆土 PL37
		B (4.3)			
第109図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (9.1) C 9.0	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地に無節Lの縄文が施されている。胴部下端は横位のナデである。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P151 20% SK-121覆土 PL37

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・産成	備 考
第109図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (10.2)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は舌状突起の下に上下に付く筒状把手である。口縁部は沈線を伴う隆帯を貼付して区画しており、区画内に縦位の短沈線が充填されている。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P152 5% SK-123覆土 PL37
	深鉢形土器 縄文土器	B (8.5)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は4つ孔の空く中央把手で、孔の周囲に隆帯や沈線を巡らしている。口縁部は地文に単節R Lの縄文が施され、把手から鋭く隆帯を貼付している。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P153 5% SK-123覆土 PL37
	深鉢形土器 縄文土器	B (9.1)	胴部片。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条あるいは1条単位の沈線を直線状に懸垂し、その間にも2条あるいは1条の沈線を帯状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P154 20% SK-123覆土 PL37
4	深鉢形土器 縄文土器	B (7.1) C 9.0	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、中央がやや凹む。胴部は地文に単節R Lの縄文が施されている。胴部下端は横位の帯片である。	砂粒・長石・雲母 赤色 普通	P155 20% SK-123覆土 PL37
	深鉢形土器 縄文土器	A (34.4) B (24.8)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は上端と下端に隆帯を帯状に貼付して区画し、さらに上下の隆帯をつなぐように隆帯を貼付して楕円形に区画されている。楕円区画内は横位の沈線による3条の波線と2条の直線が交互に充填されている。楕円区画外の一方は縦位の短沈線、もう一方は横位の短沈線が充填されている。口縁部下端の隆帯上には連続爪形文が施されており、上方がこの隆帯で区画された頸部は無文帯である。胴部は地文に無節Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P156 30% SK-123覆土7層 PL38
第110図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (22.6) B (12.3)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は1条の沈線で区画されている。口縁部下半から胴部は地文に単節R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 赤褐色 普通	P221 20% SK-126覆土直上
	深鉢形土器 縄文土器	A (33.4) B (9.5)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部上端に幅の広い隆帯を帯状に貼付している。口縁部下半から胴部は地文に無節Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 均赤褐色 普通	P222 10% SK-126覆土7層
	深鉢形土器 縄文土器	B (17.7) C 9.2	口縁部から胴部上半にかけて欠損。平底。胴部は地文に単節L Rの縄文が施されている。胴部下端は横位の帯片である。	砂粒・長石・雲母・石英 黄褐色 普通	P157 40% SK-126覆土1層
	深鉢形土器 縄文土器	A (39.4) B (11.7)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による円形区画と楕円区画で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい橙色 普通	P223 20% SK-126覆土中層
2	深鉢形土器 縄文土器	A (30.4) B (10.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と長方形区画で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P224 10% SK-126覆土
	深鉢形土器 縄文土器	A (13.8) B (7.5)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部上端以下全面に複節L R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P225 10% SK-126覆土
第111図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (8.0) C 5.8	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単節L Rの縄文が施され、2～4条の沈線で区画された幅の狭い磨消帯を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の帯片である。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P158 20% SK-126覆土中層 PL38
	深鉢形土器 縄文土器	A (35.6) B (21.7)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による楕円区画と楕円区画で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。口縁部下半は無文帯で、胴部との間に1条の隆帯と2条の沈線を帯状に巡らしている。胴部は地文に複節L R Lの縄文が施され、その中に隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文が描かれている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P226 30% SK-127覆土 PL38
	深鉢形土器 縄文土器	A (11.8) B (7.5)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は2列の連続刺突文が施されている。胴部上半は地文に単節R Lの縄文が施され、その中に1条の沈線による縦長楕円区画が描かれている。胴部中位にも連続刺突文が認められる。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P227 10% SK-128覆土
	深鉢形土器 縄文土器	A (31.4) B (21.9)	胴部下半から底部にかけて欠損。腰やかな袋状口縁。口縁部は隆帯とそれに沿う沈線による渦巻文と楕円区画で、区画内に単節R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単節R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P159 60% SK-129内面直上直上 PL38

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第112図 2	深鉢形土器 縄文土器	B (8.1)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は3つ孔の空く穿孔把手で、把手の先端に溝文が描かれている。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による横凹区画文で、区画内に円形刺突文が充填され、口唇部に把手から続く1条の沈線を巡らしている。	砂粒・長石・雲母 黄褐色 普通	P160 5% SK-129覆土 PL38
	深鉢形土器 縄文土器	B (6.0)	胴部下端の破片。胴部は地文に単距R Lの縄文が施されている。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P161 20% SK-131覆土 PL39
2	深鉢形土器 縄文土器	B (12.5)	胴部から胴部下半にかけての破片。平底で、中央がやや凹む。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、2条単位の沈線を直線状に懸垂し、その間にも1条の沈線を波状に懸垂している。胴部下端は横位のナデである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P162 20% SK-131覆土 PL39
	深鉢形土器 縄文土器	A (24.8) B (14.1)	口縁部から胴部上半にかけての破片。波状口縁。口縁部は隆縁とそれに沿う沈線による溝凹文と横凹区画文で、区画内に単距R Lの縄文が施されている。横凹区画文が描かれたところの口唇部に、1つ孔の空く穿孔把手が付く。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 暗褐色 普通	P228 20% SK-132中央部覆土中層
2	深鉢形土器 縄文土器	A (25.2) B (13.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は地文に単距R Lの縄文が施され、口縁部上端には2条の沈線で、口縁部下端には3条の沈線で区画された磨消帯を帯状に巡らしている。さらに2条の沈線で区画された磨消帯を上端から下端にかけて直線状に懸垂して、長方形区画を作り出している。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、3条の沈線で区画された磨消帯を帯状に巡らしている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P229 20% SK-132中央部覆土中層
	深鉢形土器 縄文土器	A (19.0) B (7.7)	胴部破片。口縁部上半は無文帯で、「く」の字状に外傾する。中位には3条単位の沈線を巡らし、口唇部に近い2条の沈線には円形刺突文が重ねられている。口縁部下半は地文に懸文が施され、3条の沈線で区画された磨消帯を波状に巡らしている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P230 10% SK-132覆土
4	深鉢形土器 縄文土器	B (12.2)	胴部片。胴部は隆縁とそれに沿う沈線による磨消文と縦長横凹と思われる区画文で、区画内に単距R Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P164 30% SK-132中央部覆土中層 PL39
5	深鉢形土器 縄文土器	B (7.8) C 8.2	胴部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、1条の沈線を波状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P163 20% SK-132中央部覆土中層 PL39
6	鉢形土器 縄文土器	B (14.3)	口縁部下半から胴部にかけての破片。口縁部下半は1条の隆縁と沈線で区画された無文帯で、「く」の字状に外傾する。胴部上端は隆縁とそれに沿う沈線による円形区画文と長方形区画文で、円形区画内には円形刺突文が充填され、長方形区画内には懸文が施される。胴部は地文に懸文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P231 30% SK-132中央部覆土中層
	深鉢形土器 縄文土器	A (18.8) B (10.7)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は4条単位の沈線を巡らし、中の2条の沈線で区画された内側には交互刺突文が描かれる。口唇部に帯状把手が付く。口縁部上端及び把手は地文に単距R Lの縄文が施されている。胴部は地文に単距R Lの縄文が施されるが、その原体には別の条が縛られたところが3か所認められる。	砂粒・長石・雲母・石英 明赤褐色 普通	P166 10% SK-132中央部覆土中層 PL39
2	深鉢形土器 縄文土器	B (13.7)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は環状把手と橋状把手が結合したもので、孔の周囲に隆帯と沈線を巡らしている。環状把手の隆帯の下部には刃み孔が施されている。口縁部は沈線を伴う隆帯を帯状に貼付して区画し、区画内に縦位の短沈線が充填されている。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P167 5% SK-133覆土下層 PL39
第112図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 18.4 B 22.0 C 7.6	口縁部上端に幅の広い隆帯を貼付している。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、2条単位の沈線を波状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P168 90% SK-133中央部覆土中層 PL39
	深鉢形土器 縄文土器	A [26.4]	口縁部は胴部との境に沈線を伴う隆帯を帯状に貼付して区画し、その中に沈線を伴う隆帯を溝凹状及びクランク状に貼付している。区画内に縦位の短沈線が充填されている。胴部上端は無文帯である。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、3条単位の沈線を直線状に懸垂している。胴部下端は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P169 80% SK-133中央部覆土上層 PL40
	深鉢形土器 縄文土器	A [27.6] B [16.4]	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は片側をなせる微隆起線で区画された無文帯で、無文帯中にコブ状突起をもつ。胴部は地文に単距R Lの縄文が施され、片側をなせる2条の微隆起線で区画された磨消帯を口縁部直下から逆「U」字帯に垂下している。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P170 20% SK-139覆土 PL39

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備 考
第114図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 24.8 B (20.5)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部上端は縄文帯で、それ以外の器面は全面に単節R.Lの縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P171 60% SK-141 覆土 PL40

土坑出土土製品観察表

図版番号	種 別	計 測 値				現存率(%)	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第 92図 5	土器片鏝	4.5	3.5	1.1	18.8	100	SK-22覆土	DP17 PL28
6	土器片鏝	2.7	2.7	1.3	11.2	100	SK-22覆土	DP18 PL28
第 92図 1	土器片鏝	3.1	2.8	1.2	12.1	100	SK-23覆土	DP19 PL28
第 93図 23	土器片鏝	4.8	4.2	1.0	26.8	100	SK-32覆土	DP20 PL28
第 96図 5	土器片鏝	5.0	4.7	1.1	28.0	100	SK-41覆土	DP23 PL28
第 98図 7	土器片鏝	5.0	3.6	1.1	24.0	100	SK-56覆土	DP25 PL28
第 98図 6	土器片鏝	4.2	3.0	1.2	17.8	100	SK-58覆土	DP26 PL32
第 99図 8	土器片鏝	3.2	2.9	0.9	9.2	100	SK-59覆土中層	DP27 PL32
9	土製円板	2.3	2.3	0.8	5.3	100	SK-59覆土	DP28 PL34
第 99図 3	土器片鏝	(3.3)	3.3	1.4	(20.0)	90	SK-61覆土	DP29 PL32
第100図 8	土器片鏝	(3.8)	3.8	1.5	(21.3)	90	SK-66覆土	DP30 PL32
第102図 2	土器片鏝	(5.5)	4.6	1.2	(24.0)	90	SK-72覆土	DP31 PL32
第102図 5	土器片鏝	5.0	4.3	0.9	21.8	100	SK-81覆土	DP32 PL32
6	土器片鏝	4.1	4.0	1.4	25.5	100	SK-81覆土	DP33 PL32
7	土器片鏝	2.8	2.6	0.9	7.8	100	SK-81, P ₂ 覆土	DP34 PL32
第103図 5	土器片鏝	4.0	3.0	1.1	13.7	100	SK-85覆土	DP35 PL34
第103図10	土器片鏝	2.8	2.9	1.0	8.6	100	SK-94覆土	DP37 PL34
第104図 2	土製円板	3.9	4.1	1.2	19.9	100	SK-95覆土	DP39 PL34
第104図1	土器片鏝	4.0	3.5	1.1	15.1	100	SK-99覆土	DP38 PL34
第106図 9	土器片鏝	4.4	4.3	1.0	22.5	100	SK-102覆土	DP40 PL34
第108図 4	土製円板	2.6	2.6	1.0	8.0	100	SK-119覆土	DP41 PL34
第109図 3	土器片鏝	4.6	3.9	1.2	24.9	100	SK-121覆土	DP42 PL34
第112図 7	土器片鏝	3.4	2.5	1.1	10.9	100	SK-129, P ₂ 覆土	DP43 PL34

土坑出土石器観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第92図1	石 鏃	2.2	1.4	0.3	0.8	100	安山岩	SK-15覆土	Q31 PL28
第92図4	磨製石斧	(3.8)	5.6	(2.3)	(73.5)	40	砂岩	SK-17覆土	Q32 PL28
第92図3	石 鏃	1.4	(1.3)	0.4	(0.6)	80	チャート	SK-19覆土	Q33 PL28
第92図7	石 鏃	4.5	1.8	0.9	3.6	100	チャート	SK-22覆土	Q34 PL28
第93図4	凹 石	18.3	12.3	6.0	1989.8	100	雲母片岩	SK-27中央部覆土中層	Q35 PL28
第96図24	石 鏃	1.5	(1.3)	0.6	(0.8)	95	黒曜石	SK-32覆土	Q36 PL28
第97図7	石 鏃	1.9	1.5	0.5	0.9	100	チャート	SK-44覆土	Q37 PL28
第97図3	石 鏃	1.3	(1.0)	0.3	(0.3)	95	チャート	SK-45覆土	Q38 PL28
第98図8	石 鏃	3.3	2.4	0.5	1.8	100	チャート	SK-56覆土	Q39 PL28
9	磨 石	11.3	9.6	5.5	817.0	100	安山岩	SK-56中央部覆土中層	Q40 PL31
第98図7	石 鏃	1.8	(1.4)	0.5	(1.0)	95	黒曜石	SK-58覆土	Q41 PL32
第99図10	石 鏃	1.8	1.6	0.5	0.8	100	チャート	SK-59覆土	Q42 PL32
第100図5	石 鏃	2.4	1.8	0.5	1.1	100	チャート	SK-62覆土	Q43 PL32
6	石 鏃	2.2	1.8	0.3	0.8	100	チャート	SK-62覆土	Q44 PL32
第104図11	磨 石	7.7	6.3	4.8	204.5	100	安山岩	SK-94覆土	Q52 PL35
第104図16	石 鏃	2.0	(1.4)	0.3	(0.6)	95	黒曜石	SK-97覆土	Q46 PL32
17	磨 石	(9.1)	(7.3)	4.9	(338.9)	60	安山岩	SK-97覆土	Q45 PL33
18	凹 石	18.0	13.9	6.9	2650.7	100	雲母片岩	SK-97東部覆土中層	Q17 PL35
19	凹 石	14.7	13.0	5.9	1511.9	100	雲母片岩	SK-97東部覆土中層	Q18 PL35
第104図1	石 鏃	2.0	1.2	0.9	1.2	100	黒曜石	SK-98覆土	Q47 PL32
第104図2	石 鏃	2.4	2.0	0.4	1.2	100	チャート	SK-99覆土	Q48 PL36
3	石 鏃	1.8	1.4	0.4	0.2	100	チャート	SK-99覆土	Q49 PL36
第106図6	ナイフ形石器	(3.1)	1.5	0.7	(2.5)	80	チャート	SK-100A, P, 覆土	Q51 PL35
7	打製石斧	(8.8)	(6.1)	1.6	(81.4)	80	凝灰岩	SK-100A覆土	Q50 PL35
第106図6	磨 石	(6.0)	6.3	3.3	(175.3)	50	安山岩	SK-104覆土下層	Q53 PL36
第107図5	石 鏃	(3.1)	(1.6)	0.4	(1.6)	70	チャート	SK-108中央部覆土中層	Q55 PL36
6	小形磨製石斧	(3.4)	1.3	0.7	(5.4)	80	緑泥片岩	SK-108中央部覆土中層	Q54 PL36
第108図5	石 鏃	1.8	1.6	0.3	0.6	100	チャート	SK-113覆土	Q57 PL36
6	磨製石斧	(7.6)	4.5	2.6	(139.3)	80	砂岩	SK-113東部覆土中層	Q56 PL36
第108図2	磨 石	(11.2)	(6.7)	3.6	(376.2)	60	安山岩	SK-114覆土	Q58 PL37
第109図1	石 皿	(15.2)	(9.8)	7.7	(694.6)	20	安山岩	SK-124覆土	Q59 PL37
第110図12	小形磨製石斧	(5.2)	(2.3)	(1.2)	(17.1)	80	粘板岩	SK-126覆土	Q61 PL38
13	磨 石	10.9	6.8	4.5	529.7	100	安山岩	SK-126覆土中層	Q60 PL38
第111図8	磨 石	10.1	8.3	4.8	521.5	100	安山岩	SK-127西部覆土中層	Q63 PL38
9	凹 石	40.6	18.6	12.2	12400.0	100	雲母片岩	SK-127東部覆土中層	Q62 PL38
第113図11	凹 石	28.7	9.8	3.7	1310.3	100	雲母片岩	SK-132北東部覆土下層	Q64 PL39
第112図3	石 鏃	2.9	2.9	0.9	6.0	100	チャート	SK-137覆土	Q66 PL36
4	打製石斧	9.7	6.1	1.9	(122.1)	90	緑泥片岩	SK-137東部覆土中層	Q67 PL39
5	凹 石	12.2	11.5	3.8	635.8	100	雲母片岩	SK-137東部覆土中層	Q68 PL39
第114図3	石 鏃	2.0	(1.9)	0.5	(1.0)	95	チャート	SK-139底面直上	Q71 PL36
第114図4	磨製石斧	(8.3)	4.3	2.0	(117.9)	80	凝灰岩	SK-141覆土中層	Q69 PL40
5	磨 石	(7.4)	(6.1)	4.3	(198.4)	50	安山岩	SK-141, P, 覆土	Q70 PL40

(3) 陥し穴

今回の調査では、調査区の中央部から北東部にかけて陥し穴6基を検出した。

第1号陥し穴(第115図)

位置 調査区の中央部, B3j₁区。

規模と平面形 長径(3.6)m, 短径(0.6)mの長楕円形と思われ、深さは130cmである。

長径方向 N-6°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。短径方向の断面形は「V」字形であるが、長径方向の断面形は袋状を呈している。

底面 平坦であるが、幅が狭い。

覆土 自然堆積である。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は、縄文時代と考えられる。

第2号陥し穴(第115図)

位置 調査区の中央部, B2j₂区。

規模と平面形 長径(4.4)m, 短径(0.6)mの長楕円形と思われ、深さは138cmである。

長径方向 N-30°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、短径方向の断面形は「V」字形である。

底面 南北の両端が深く、中央がやや高い。

覆土 自然堆積である。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は、縄文時代と考えられる。

第3号陥し穴(第115図)

位置 調査区の北東部, A4e₂区。

規模と平面形 長径1.88m, 短径0.82mの不整形長方形で、深さは144cmである。

長軸方向 N-24°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、短軸方向の断面形は「U」字形である。

底面 南北の両端が円形に凹み、中央がやや高い。

覆土 自然堆積である。

遺物 縄文土器片が覆土中から10点ほど出土している。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は、縄文時代と考えられる。

第4号陥し穴(第115図)

位置 調査区の北東部, A4c₂区。

規模と平面形 長径1.92m, 短径1.08mの楕円形で、深さは56cmである。

長径方向 N-42°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、短径方向の断面形は「V」字形である。
底面 平坦であるが、幅が狭い。
覆土 自然堆積である。
遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。
所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は、縄文時代と考えられる。

第5号陥し穴(第115図)

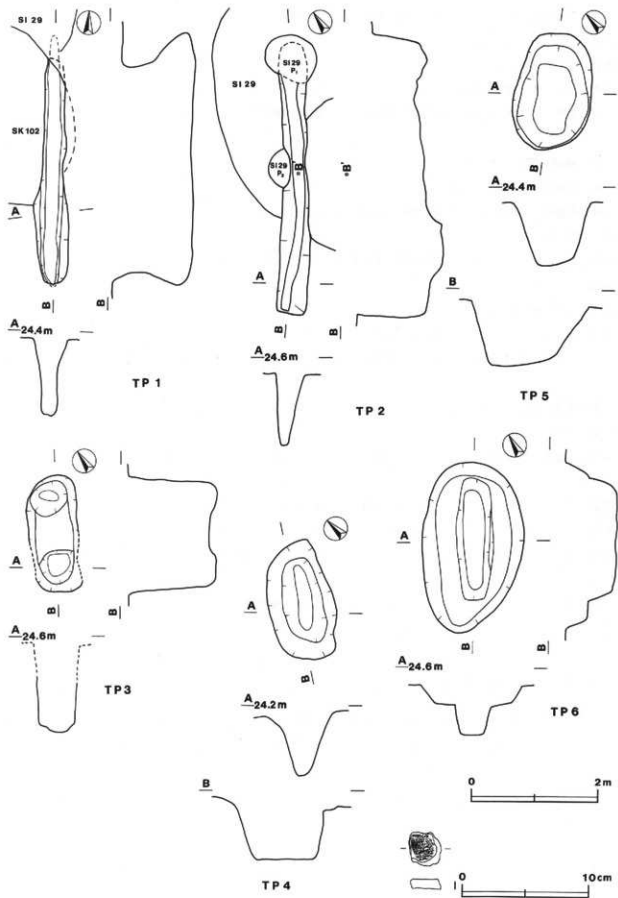
位置 調査区の北東部, A4b区。
規模と平面形 長径1.90m, 短径1.26mの楕円形で、深さは102cmである。
長径方向 N-60°-E
壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、短径方向の断面形は「U」字形である。
底面 平坦である。
覆土 自然堆積である。
遺物 縄文土器片が覆土中から20点ほど出土している。
所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は、縄文時代と考えられる。

第6号陥し穴(第115図)

位置 調査区の中央部, B3f区。
規模と平面形 長径2.72m, 短径1.64mの楕円形で、深さは84cmである。
長径方向 N-34°-E
壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、短径方向の断面形は2段の逆台形である。
底面 2段になっており、低いほうの底面は平坦であるが、幅が狭い。
遺物 縄文土器片が覆土中から40点ほど出土している。その他に、覆土中から第115図1の土器片鍬及び剥片1点が出土している。
所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は、縄文時代と考えられる。

第6号陥し穴出土遺物観察表

図版番号	種別	計 測 値				残存率(%)	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第115図1	土器片鍬	(2.7)	2.6	0.8	(6.8)	90	覆土	DP22 PL40



第115図 陥し穴実測，出土遺物実測・拓影図

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、調査区の中央部から北東部にかけて竪穴住居跡4軒及び土坑4基を検出した。時期はすべて古墳時代中期のものと考えられる。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

なお、土坑については出土遺物も少なく、性格も不明であるため、遺構配置図及び土坑一覧表だけの掲載とした。

(1) 竪穴住居跡

今回の調査では、調査区の中央部から北東部にかけて竪穴住居跡4軒を検出した。大半の竪穴住居跡は、トレンチャーによる攪乱を受けており、遺存状況は良好とは言えない。

第1号住居跡（第116・117図）

位置 調査区の北東部，A4f₄区。

規模と平面形 長軸5.78m，短軸5.70mの方形である。

主軸方向 N-54'-W

壁 壁高は32～36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は一部分だけである。南東壁際のほぼ中央に逆「U」字状のわずかな高まりがあり、その付近だけは硬く踏み固められている。ここが本跡の出入口部と思われる。

炉 P₁とP₄を結ぶライン上のほぼ中央に付設され、平面形は長径92cm，短径80cmの楕円形で、床面を8cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 4か所（P₁～P₄）。P₁～P₄は直径28～40cmの円形、深さ54～84cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

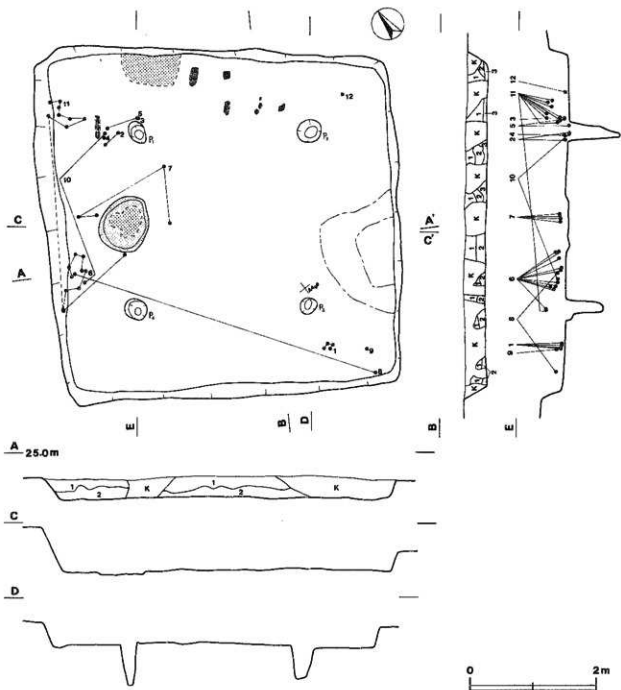
覆土 3層からなる。上層は自然堆積であるが、下層は人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---|------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大・中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム中・小ブロック・炭化物・炭化物・炭化粒子中量，焼土粒子少量 | | |

遺物 図示した土師器及び土師器片が覆土中層から床面にかけて550点ほど出土している。第117図1の坏は南コーナー寄りの床面直上から，2，3，4及び5の坏は北コーナー寄りの床面直上からそれぞれ出土している。また，6の甕は北西壁寄りの覆土下層から中層にかけて散乱した状態で，7の甕は炉付近の覆土下層から散乱した状態で，8の甕は南コーナー寄り及び北西壁寄りの覆土下層から散乱した状態で，9の甕は南コーナー寄りの床面直上から，10の甕は北コーナー寄りの床面直上及び北西壁寄りの覆土下層から散乱した状態で，11の甕は北コーナー及び北西壁寄りの覆土下層から中層にかけて散乱した状態でそれぞれ出土している。12の土玉は東コーナー寄りの床面直上から出土している。

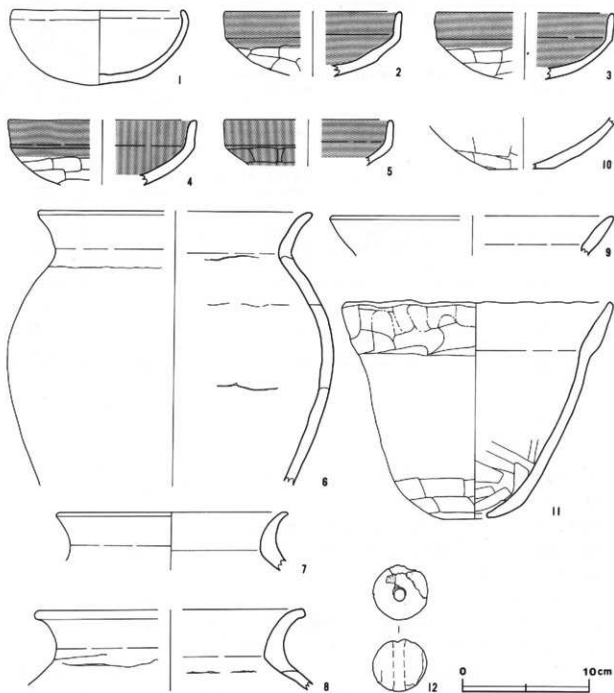
所見 本跡は，炭化材及び焼土ブロックの検出状況から焼失家屋であると思われる。また，覆土の確認状況から，焼失直後に人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は，出土遺物から古墳時代中期の5世紀後半と考えられる。



第116図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図 1	环 土 器	A 13.4 B 5.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 に い い 特 色 普通	P1 70% 北コーナ-群I類跡土 PL44
2	环 土 器	A (14.0) B (5.1)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 に い い 黄 橙 色 普通	P2 40% 北コーナ-群I類跡土 PL44
3	环 土 器	A (14.2) B (5.2)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 に い い 黄 橙 色 普通	P3 30% 北コーナ-群I類跡土 PL44



第117図 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図	土器	A (15.0)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に線をもち、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P4 30% 北コーナ-寄り灰面土 PL44
		B (5.1)				
5	土器	A (13.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に線をもち、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P5 20% 北コーナ-寄り灰面土 PL44
		B (3.6)				
6	土器	A (21.6)	底部欠損。体部は縦長の球形を呈し、上半に最大径を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内面に軸横み痕あり。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P6 60% 北西寄り灰土下-4層 外面横付着 PL44
		B (21.7)	口縁部は外反する。			

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第117図 7	嬰 土 師 器	A 18.4 B (3.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 に多い褐色 普通	P7 10% 伊付近置土下層 PL44
8	嬰 土 師 器	A [21.4] B (6.0)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面に 輪積み痕あり。	砂粒・長石・雲母・石英 に多い黄褐色 普通	P8 10% 溝ノテ寄り北西壁 下層 PL44
9	嬰 土 師 器	A [22.8] B (3.1)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 に多い褐色 普通	P9 5% 溝ノテ寄り北西壁 下層 PL44
10	嬰 土 師 器	B (4.0) C (5.2)	底部片。平底。	体部下端及び底部外面傾位のヘ ラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 明黄褐色 普通	P10 20% 溝ノテ寄り北西壁 下層 PL44
11	瓶 土 師 器	A 21.6 B 17.2 C 4.2	単孔式。体部は内斂しながら立 ち上る。口縁部は外傾する。	口縁部外面指ナデ、内面横ナデ。 体部内・外面ヘラナデ。体部下 端外面傾位のヘラ削り。内面指 ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P11 60% 北ノテ・北西壁寄り 土下層 PL44

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	出 土 地 点	備 考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)			
第117図12	土 甕	4.2	4.4	4.4	1.0	(56.6)	90	溝ノテ寄り北西壁 下層	DP1 PL45

第2号住居跡 (第118・119・120図)

位置 調査区の北東部, A4₆区。

重複関係 本跡は第1号溝に掘り込まれており, 第1号溝より古い。

規模と平面形 長軸5.70m, 短軸(5.3)mの方形と思われる。南東壁際は農道のため調査区外となっている。

主軸方向 N-64°-W

壁 壁高は40~48cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

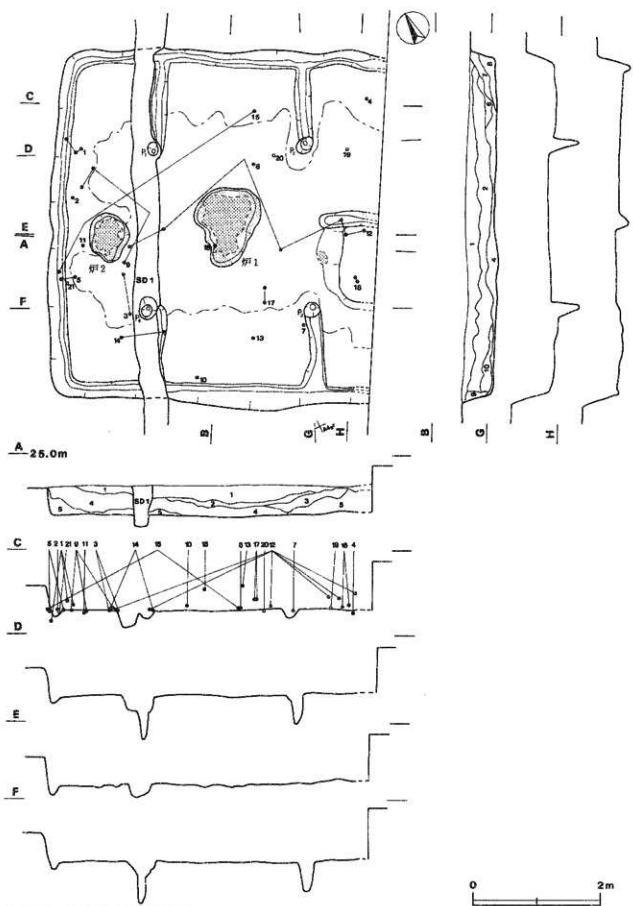
壁溝 壁下を全周している。上幅約16cm, 下幅約6cm, 深さ約12cmで, 断面形は「U」字形である。

床 平坦で, 壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。南東壁際中央に階段状のわずかな高まりがあり, その付近だけは特に硬く踏み固められている。ここが本跡の出入口部と思われる。また, 床には間仕切溝が5条付設されている。北東壁下の壁溝からはP₁及びP₂にかけて, 南西壁下の壁溝からはP₃及びP₄にかけて, 南東壁際からは階段状の高まりの先端にかけてそれぞれ掘り込まれている。上幅約26cm, 下幅約10cm, 深さ約14cmで, 断面形は「U」字形である。

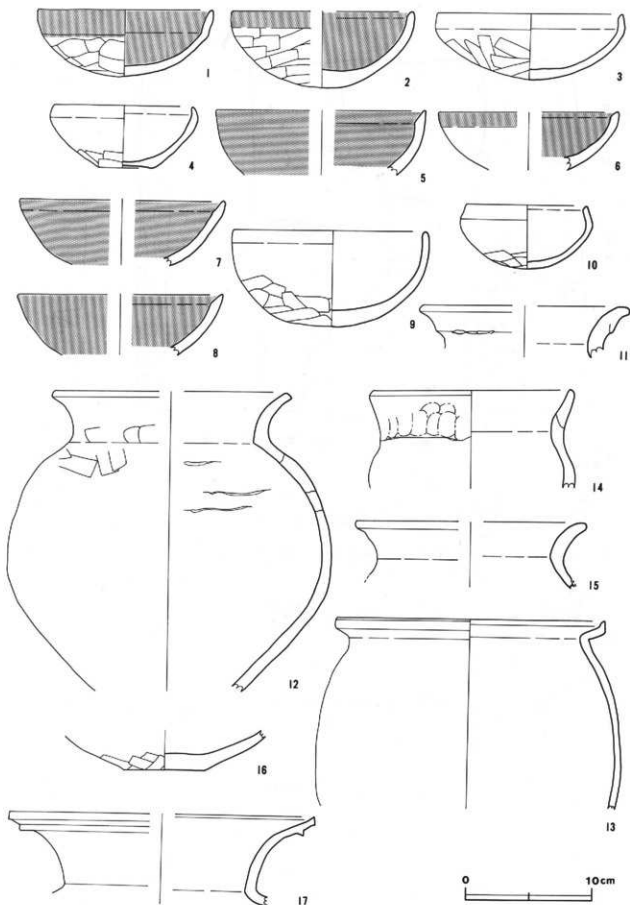
炉 2か所。炉1はほぼ中央に付設され, 平面形は長径130cm, 短径100cmの不整形円で, 床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。炉2はP₁とP₄を結ぶラインより北西壁寄りのほぼ中央に付設され, 平面形は長径80cm, 短径64cmの楕円形で, 床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は直径26~36cmの円形, 深さ46~70cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

覆土 10層からなる。上層は自然堆積であるが, 下層は人為堆積である。



第118图 第2号住居跡実測図



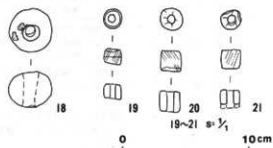
第119图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量
 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭土中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量, 炭化物・炭化粒子微量
 5 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, 炭化物・炭化粒子微量

- 6 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量
 7 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, ローム大ブロック・焼土粒子少量
 8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量, 炭化粒子微量
 9 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
 10 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, ローム大ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 図示した土師器及び土師器片が覆土中層から床面にかけて1000点ほど, また, 須臾器が1点出土している。第119図1の坏は北西壁寄りの床面直上から覆土下層にかけて, 2及び5の坏は北西壁寄りの床面直上から, 3の坏及び9の碗は炉2付近の床面直上から, 4及び7の坏は南東壁寄りの床面直上から, 6の坏は炉1付近の床面直上から, 10の碗は南西壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。また, 11の壺は炉2付近の床面直上から, 12の甕は炉2付近の床面直上及び南東壁寄りの覆土下層から中層にかけて散乱した状態で, 13の甕は南西壁寄りの覆土上層から投げ込まれたような状態で, 14の甕は南西壁寄りの床面直上から, 15の甕は北西壁寄りの覆土下層及び北東壁寄り覆土中層から散乱した状態で, 16の甕は南東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。17の須臾器甕は炉1付近の覆土中層から, 第120図18の土玉は炉1の上から, 19の白玉は南東壁寄りの床面直上から, 20の白玉は炉1付近の床面直上から, 21の白玉は北西壁寄りの床面直上から出土している。



第120図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 本跡の南東壁だけは調査できなかったが, トレンチャーによる掘乱も受けていなかったため, 比較的良好な遺物が遺存していた。時期は, 出土遺物から古墳時代中期の5世紀後半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	坏	A 13.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り, 内面ヘラナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母・石英 に ぶ い い 黄 橙 色 普通	P12 70% 北西壁寄り床面直上・ 土層 PL45
	土師器	B 5.4				
2	坏	A [14.4]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り, 内面ヘラナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母・石英 に ぶ い い 黄 橙 色 普通	P13 50% 北西壁寄り床面直上 PL45
	土師器	B 6.1				
3	坏	A 14.8	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り, 内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・石英 に ぶ い い 黄 橙 色 普通	P14 50% 炉2付近床面直上 PL45
	土師器	B 5.4				
4	坏 土師器	A 11.2	底部は平底で, 中央がやや凹む。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・石英 に ぶ い い 黄 橙 色 普通	P15 80% 南東壁寄り床面直上 PL45
		B 4.9				
		C 4.2				
5	坏	A [16.4]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は直立する。内面の口縁部下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P16 20% 北西壁寄り床面直上 PL45
	土師器	B (5.2)				
6	坏	A [14.4]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母・石英 に ぶ い い 黄 橙 色 普通	P17 20% 炉1付近床面直上 PL45
	土師器	B (4.6)				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第119図 7	坏 土 器 器	A [16.4]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は外傾する。内面の口縁部下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤色 普通	P18 20% 南西壁寄り床面直上 PL45
		B (5.3)				
8	坏 土 器 器	A [16.4]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外傾する。内面の口縁部下端に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P19 20% 東部・西部腹土 PL45
		B (4.8)				
9	碗 土 器 器	A 15.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P21 70% 伊1付近床面直上 PL46
		B 7.6				
10	碗 土 器 器	A 9.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P22 10% 南西壁寄り腹土下層 PL45
		B 5.2				
11	壺 土 器 器	A [16.7]	口縁部片。口縁部は折り返し口縁で、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・石英 にふい橙色 普通	P23 5% 伊1付近床面直上 PL45
		B (3.4)				
12	壺 土 器 器	A [18.8]	底部欠損。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内面に輪痕み痕あり。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P24 30% 伊1付近床面直上・南西壁寄り腹土下層 PL46
		B (23.7)				
13	壺 土 器 器	A 21.4	体部下半及び底部欠損。口縁部は外傾し、口縁端部につまみ上げをもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい橙褐色 普通	P25 20% 南西壁寄り腹土上層 PL45
		B (14.8)				
14	壺 土 器 器	A 16.0	体部下半及び底部欠損。口縁部は外傾する。	口縁部外面指ナデ。内面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P26 20% 南西壁寄り床面直上 PL46
		B (7.4)				
15	壺 土 器 器	A [18.8]	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	P27 5% 北西壁寄り腹土下層・北西壁寄り腹土中層 PL46
		B (5.0)				
16	壺 土 器 器	B (3.7)	底部片。平底。	体部下端及び底部外面斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 淡黄色 普通	P30 20% 南西壁寄り腹土下層 PL46
		C 6.4				
17	須 壺 器 器	A [22.0]	口縁部片。口縁部は外反する。口縁端部直下に断面三角形の凸帯をもつ。	ロクロ成形。口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	P32 5% 伊1付近腹土中層 PL45
		B (6.4)				

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)			
第120図18	土 玉	2.8	3.4	3.4	1.3	27.7	100	伊1上面	DP2 PL45

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)				
第120図19	白 玉	0.3	0.5	0.5	0.2	0.1	100	滑石	南西壁寄り床面直上	Q1 PL45
	白 玉	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2	100	滑石	伊1付近床面直上	Q2 PL45
	21 白 玉	0.5	0.5	0.5	0.2	(0.2)	80	滑石	北西壁寄り床面直上	Q3 PL45

第3号住居跡(第121・122図)

位置 調査区の北東部、A4i区。

重複関係 本跡は第1号溝に掘り込まれており、第1号溝より古い。

規模と平面形 長軸(7.3)m、短軸6.98mの方形と思われる。南東壁際は農道のため調査区外となっている。

主軸方向 N-56°-W

壁 壁高は38~50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 P₁とP₂を結ぶライン上よりやや北西壁寄りのほぼ中央に付設され、平面形は長径70cm、短径54cmの円形で、床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₄は直径32~46cmの円形、深さ62~72cmで、規模や配列から柱柱穴と考えられる。このうち、P₂は直径114cm、深さ24cmの皿状の掘り方の中に掘り込まれている。また、P₃は長軸90cm、短軸74cmの隅丸長方形、深さ40cmで、位置から貯蔵穴の可能性が高い。P₅は直径82cmの円形、深さ52cmで、同じく位置から貯蔵穴の可能性が高い。

覆土 7層からなる。自然堆積である。

土層解説

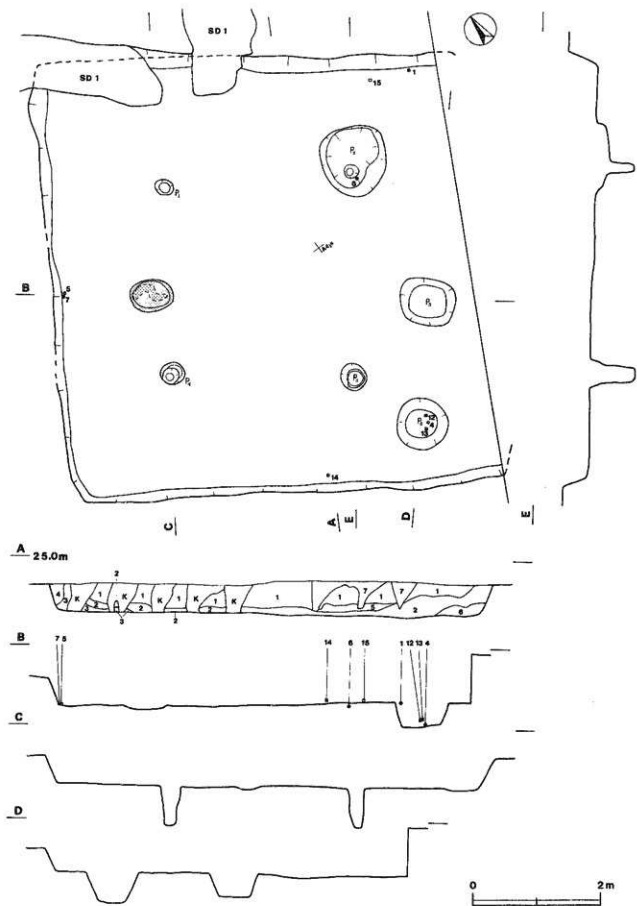
1 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック少量、炭化粒子微量	7 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・炭化粒子少量、炭化物質微量
4 褐色	ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、炭化粒子微量		

遺物 図示した土師器及び土師器片が覆土中層から床面にかけて950点ほど、また、須恵器片が2点出土している。第122図1の坏は東コーナー寄りの覆土下層から、4の椀はP₂の覆土から、5の椀は北西壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。また、6の甕はP₂の上面から、7の甕は北西壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。12及び13の土玉、16の刀子、17の鎌はP₂の覆土から、14の土玉は南西壁寄り覆土下層から、15の紡錘車は北東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。さらに、覆土中からは小形環、手捏土器も出土している。

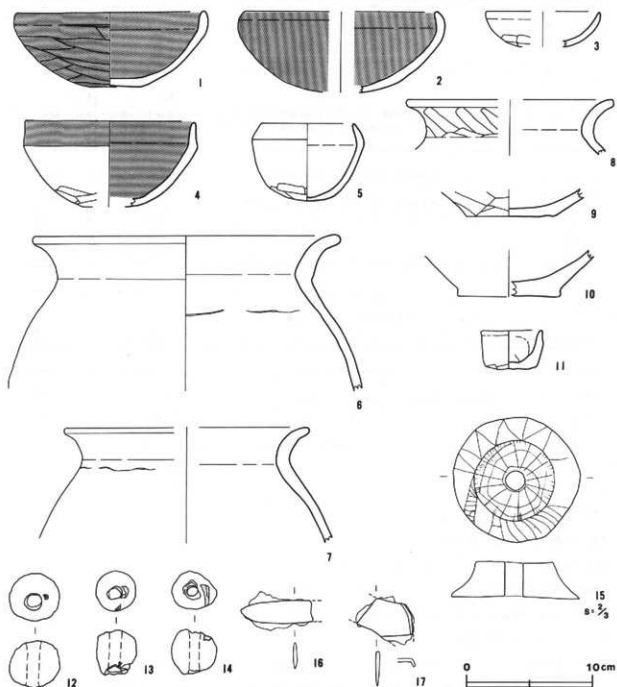
所見 本跡は、貯蔵穴の可能性が高いP₂及びP₃という2つの穴を有している。時期は、出土遺物から古墳時代中期の5世紀後半と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図原番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	土師器	A 14.8	底部は平底で、中央がやや凹む。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母・石英 明赤褐色	P33 80% 東部覆土層 PL46
		B 5.9				
		C 4.2				
2	土師器	A (15.4)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P34 30% 東部覆土 PL46
		B (6.5)				
3	小形土師器	A (9.2)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端外面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 内赤褐色 普通	P35 30% 南部覆土 PL46
		B (2.8)				
4	土師器	A 13.4	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端外面横位のヘラ削り。内面及び口縁部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 内赤褐色 普通	P36 70% P ₂ 覆土 PL46
		B (6.2)				
5	土師器	A 7.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下端及び底部外面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 内赤褐色 普通	P37 80% 北西壁寄り床面上 PL46
		B 6.2				



第121图 第3号住居跡実測図



第122図 第3号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第122図 6	甕 土 器	A 24.2 B (12.2)	体部下半及び底部欠損。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内面に輪横み痕あり。	砂粒・長石・雲母 P ₃₈ 30% P ₉ 上面 普通	PL46
7	甕 土 器	A (19.4) B (8.8)	体部下半及び底部欠損。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 P ₃₉ 20% 北西壁寄り表面直上 普通	PL47
8	甕 土 器 破	A (16.6) B (4.1)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ後斜位のヘラ削り、内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 P ₄₀ 10% 東部厚土 普通	PL46

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第122図 9	壺 土 師 器	B (1.5)	底部片。平底。	体部下端及び底部外面斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P42 10% 東部覆土 PL47
		C 7.0				
10	壺 土 師 器	B (3.3)	底部片。平底。	体部下端及び底部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P43 5% P ₁ 覆土 PL47
		C (8.2)				
11	手捏土器 土 師 器	A 4.8	平底。体部は外傾しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面指ナデ。体部下端及び底部外面斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P44 80% 西部覆土 PL47
		B 3.1				
		C 3.8				

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)			
第122図12	土 玉	3.7	4.1	3.8	1.2	47.6	100	P ₁ 覆土	DP4 PL45
13	土 玉	3.5	3.2	3.2	1.1	(26.1)	95	P ₁ 覆土	DP5 PL45
14	土 玉	3.6	3.6	3.0	1.0	(28.5)	95	南東壁寄り層下層	DP6 PL45

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)				
第122図15	紡 輪 車	5.1	5.1	1.5	0.7	43.5	100	滑石	北東壁寄り層下層	Q5 PL47

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	材 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)				
第122図16	刀 予	(5.8)	1.9	0.4	(11.4)	50	鉄	P ₁ 覆土	M1 PL47	
17	鏃	(4.5)	(3.1)	0.4	(12.6)	30	鉄	P ₁ 覆土	M2 PL47	

第7号住居跡(第123・124図)

位置 調査区の中央部, B4d₂区。

規模と平面形 長軸6.50m, 短軸6.44mの方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は32~38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

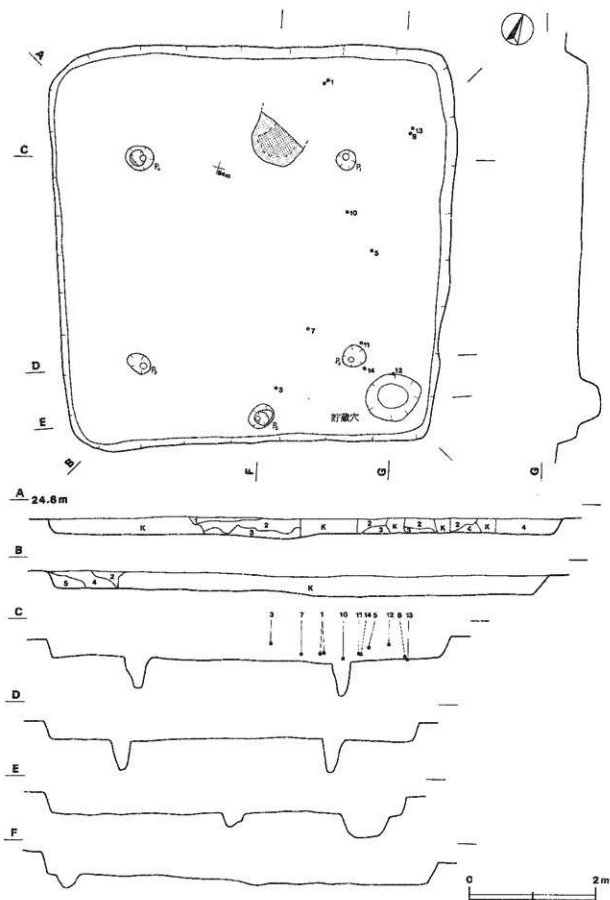
床 平坦であるが、踏み固められた面は認められない。

炉 P₁とP₂を結ぶライン上よりやや北壁寄りのほぼ中央に付設されているが、北東部は攪乱を受けている。平面形は直径約92cmの円形と思われ、床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉床面の赤変硬化はあまり認められない。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は直径32~46cmの円形、深さ46~56cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は直径42cmの円形、深さ24cmで、位置から出入口ピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー寄りに付設され、平面形は長径90cm, 短径76cmの楕円形である。深さは40cmで、断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 5層からなる。自然堆積である。



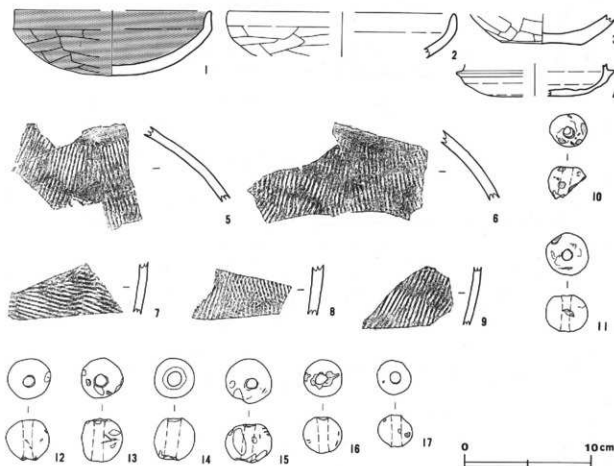
第123图 第7号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量, ローム小ブロック・焼土小ブロック中量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子少量, 焼土中ブロック微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土粒子中量, ローム大ブロック・焼土大・中・小ブロック少量, 炭化物・炭化粒子微量 | | |

遺物 図示した土師器及び土師器片が覆土中層から床面にかけて600点ほど, また, 須恵器及び須恵器片が41点出土している。第124図1の坏は北壁寄りの床面直上から, 3の甕は南壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。また, 5の須恵器甕の体部片は東壁寄りの覆土下層から, 7の体部片はP₁付近の床面直上から, 8の体部片は北東コーナー寄りの床面直上からそれぞれ出土しており, 接合はできないが, これらはすべて同一個体と思われる。10の土玉はP₁付近の床面直上から, 11及び14の土玉はP₂付近の床面直上から, 12の土玉は貯蔵穴付近の覆土中層から, 13の土玉は北東コーナー寄りの床面直上からそれぞれ出土している。さらに, 覆土中からは須恵器坏身も出土している。

所見 本跡は, 他の3軒の古墳時代の竪穴住居跡とは主軸方向が異なっている。時期は, 出土遺物から古墳時代中期の5世紀後半と考えられる。



第124図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第124図 1	坏 土 節 器	A (15.6) B 5.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色	P45 30% 北壁寄り灰褐色土 PL47
	2	A (17.8) B (3.3)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色	P46 10% 南西部覆土 PL47
3	壺 土 節 器	B (1.5) C 7.0	底部片。平底。	体部下端及び底部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色	P47 20% 北壁寄り覆土中層 PL47
4	坏 須 恵 器	B (2.1)	口縁部及び底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、受け部に至る。	ロクロ成形。体部外面回転ヘラ削り、内面ロクロナデ。	砂粒・長石 暗オリーブ灰色 良好	P48 20% 南西部覆土 PL47

第124図5～9は同一個体と思われる古墳時代中期後葉の須恵器壺の体部片で、平行叩きが施されている。

図版番号	種 別	計 測 値					現存率(%)	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重量(g)			
第124図10	土 玉	2.6	2.9	2.6	0.9	(14.2)	60	P ₁ 付近床面直上	DP7 PL47
11	土 玉	2.8	3.4	3.4	0.8	31.1	100	P ₁ 付近床面直上	DP8 PL47
12	土 玉	3.2	3.4	3.2	0.9	32.1	100	折敷穴付近覆土中層	DP9 PL47
13	土 玉	3.4	3.3	3.1	0.9	31.3	100	北壁・ナテ形近床直上	DP10 PL47
14	土 玉	3.3	3.2	3.2	1.0	30.3	100	P ₁ 付近床面直上	DP11 PL47
15	土 玉	3.0	3.6	3.6	0.9	35.5	100	覆土	DP12 PL47
16	土 玉	2.8	3.0	3.0	0.9	(22.9)	95	覆土	DP13 PL47
17	土 玉	2.5	2.7	2.7	1.0	16.1	100	覆土	DP14 PL47

表2 宮前遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 長短方向	平面形	規 模 (長軸×短軸) (長径×短径)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	主 な 遺 物	備 考
							壁溝	支柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	炉・竈			
1	A4a	N-54°W	方 形	5.78 × 5.70	32~36	平坦	-	4	-	-	-	炉1	人為	土器(平・高・壺・土玉)	古墳時代中期(後葉)後半、 焼成良好
2	A4a	N-54°W	(方 形)	5.70 × (5.3)	40~48	平坦	全周	4	-	-	-	炉2	人為	土器(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)	古墳時代中期(後葉)後半、 SD-1より出
3	A4a	N-56°W	(方 形)	(7.3) × 6.98	38~50	平坦	-	4	-	2	-	炉1	自然	土器(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)	古墳時代中期(後葉)後半、 SD-1より出
4	A4a	不 明	(円 形)	(5.0) × (2.6)	14~16	平坦	-	2	-	-	-	炉1	自然	甕土・土器	甕土(平・高・壺・土玉)
6	B4a	N-66°W	円 形	5.60 × 5.16	20~30	平坦	-	3	-	-	-	炉1	自然	甕土・土器・銅片	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
7	B4a	N-20°W	方 形	6.50 × 6.44	32~38	平坦	-	4	1	-	-	炉1	自然	土器(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)	古墳時代中期(後葉)後半、 SD-1より出
9	B3a	N-2°E	横円形	6.22 × 5.38	12~28	平坦	-	3	-	-	-	炉1	自然	甕土・土器・銅片・銅釘	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
10	B3a	N-84°W	横円形	4.88 × 4.34	10~18	平坦	-	4	-	2	-	炉1	自然	甕土・土器・銅片	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
11	B3a	N-6°E	横円形	5.36 × 4.50	12~18	平坦	-	2	-	-	-	自然	甕土	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)	
12	B3a	N-24°W	円 形	4.48 × 4.12	6~10	平坦	-	4	-	-	-	炉1	自然	甕土	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
14-A	B3a	N-52°E	横円形	7.80 × 6.88	12~22	平坦	-	7	-	6	-	炉1	自然	甕土・土器(平・高・壺・土玉)	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
14-B	B3a	N-52°E	(横円形)	6.90 × (4.1)	12~20	平坦	-	4	-	2	-	炉1	自然	甕土	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
15	B3a	N-52°E	横円形	5.14 × 4.28	16~28	平坦	5/6周	2	-	1	-	炉1	自然	甕土・銅片	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)
16	B3a	N-84°E	(横円形)	7.52 × 6.70	4~16	平坦	-	5	-	2	-	炉1	自然	甕土・土器(平・高・壺・土玉)	甕土(平・高・壺・土玉)、須恵器(土玉)

住居番号	位置	主軸方向 真経方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸) (真柱×假柱)	変高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	主な遺物	備 考	
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	炉・竈				
18	B3a	不明	(円形)	4.5 × 2.5	14~20	平組	-	2	-	-	-	炉1	自然	竈土器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-20-28より古い	
19	B3c	N-42°W	(楕円形)	4.1 × 4.5	10~12	平組	-	-	-	-	-	-	炉1	自然	竈土器・磨製石器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-27-10-10-106より古い
20	B3a	N-18°W	楕円形	4.58 × 3.84	8~12	平組	-	5	-	2	-	炉1	自然	竈土器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-112より古い	
21	B3a	不明	不明	不明	-	-	-	3	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-112より古い	
23	B3c	N-10°E	楕円形	4.44 × 3.82	10~14	平組	-	4	-	-	-	炉1	自然	竈土器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-114より古い	
24	B3c	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-112より古い、SK-113より古い	
25	B3c	N-80°W	楕円形	5.06 × 3.68	8~12	平組	-	5	-	-	-	炉2	自然	竈土器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-102より古い、SK-103より古い	
26	C3a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
28	C3a	N-28°W	楕円形	3.90 × 3.06	6~24	平組	-	4	-	-	-	炉1	自然	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
29	B2a	N-18°E	(楕円形)	3.8 × 3.40	10~16	平組	-	3	-	-	-	炉1	自然	竈土器・磨製石器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-102より古い、SK-103より古い	
30	C3a	不明	不明	不明	-	-	-	1	-	-	-	炉1	不明	竈土器・磨製石器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
32	C3a	N-52°E	(楕円形)	5.3 × 4.48	12~22	平組	-	4	-	1	-	炉1	自然	竈土器・磨製石器・磨製石斧	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-104より古い	
33	C2a	N-12°E	(楕円形)	6.4 × 4.7	12~14	2段	-	2	-	2	-	炉2	自然	竈土器・石器・磨製石斧	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-41-102より古い、SK-41-2より古い	
37	C2a	不明	不明	不明	-	-	-	1	-	-	-	炉1	不明	竈土器・銅片	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-120-121より古い	
40	A4a	N-14°W	楕円形	5.00 × 3.92	24~32	平組	-	2	-	-	-	炉1	自然	竈土器・磨製石器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
41	C3a	不明	不明	不明	-	-	-	1	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
42	B3a	不明	不明	不明	-	-	-	4	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
43	B3a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-65より古い	
44	C2a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
45	C3a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
46	B3a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
47	B3a	不明	不明	不明	-	-	-	4	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
48	B2a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
49	B2a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期)	
50	C2a	不明	(円形)	3.6 × 2.5	26~34	平組	伝説	2	-	-	-	-	自然	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-115より古い	
51	C2a	不明	(楕円形)	4.1 × 3.1	22~24	平組	-	3	-	-	-	炉1	自然	竈土器・磨製石器・小形磨製石斧	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-124SK-126-119-120より古い	
52	C2a	不明	(楕円形)	6.3 × 1.8	14~16	平組	-	3	-	-	-	-	自然	竈土器・砥石	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-116-124-142より古い、SK-52より古い	
53	C2a	不明	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	竈土器	縄文時代中期(加賀川正位式期) SK-126より古い	

3 その他の遺構と遺物

(1) 土坑

今回の調査では、調査区のほぼ全域から土坑125基を検出した。時代別に見てみると、縄文時代117基、古墳時代4基、中世1基、時期不明3基である。縄文時代の土坑については、項を設けて前述したが、古墳時代、中世及び時期不明の土坑については、出土遺物も少なく、性格も不明であるため、遺構配置図及び土坑一覧表だけの掲載とした。

なお、土坑と思われる遺構に第1～144号まで番号をつけたが、調査の過程で、陥穴であることや遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、第13, 16, 51及び100号土坑については、同じく調査の過程で重複関係のある2基、あるいは3基の土坑であることが判明したため、土坑番号の後ろにアルファベットを付けて、それぞれ-A, -B, あるいは-C号土坑とした。

表3 宮前遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (具軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	A4ca	N-80°-W	楕円形	0.82 × 0.71	50	外傾	皿状	自然		
4	A4c7	N-82°-E (円形)	円形	1.54 × 1.48	84	外傾	平坦	自然		縄文時代前期 SDより古い
6	A4ca	N-82°-E	楕円形	1.58 × 1.06	38	外傾	凹凸	自然		縄文時代中期
7	A4ca	N-28°-E	楕円形	1.38 × 0.86	40	外傾	皿状	自然	縄文土器片・土器残片	古墳時代中期
8	A4ca	N-84°-E	楕円形	1.14 × 0.90	38	外傾	皿状	自然		
9	A4c1	N-66°-E	楕円形	1.82 × 1.22	68	外傾	凹凸	人為	縄文土器片・土器片	古墳時代中期
10	A4ca	N-48°-E	不整形円形	1.44 × 1.31	64	外傾	平坦	人為	縄文土器片・土器片・土器片	古墳時代中期
12	A4ca	N-80°-E	楕円形	1.74 × 1.20	58	外傾	凹凸	自然		縄文時代中期 SIより古い
13-A	A4ca	N-24°-E (長方形)	長方形	1.76 × 1.40	48	外傾	平坦	人為	縄文土器片・土器片	古墳時代中期 SIより古い
13-B	A4ca	N-12°-E (楕円形)	楕円形	2.18 × 1.28	48	外傾	平坦	人為	縄文土器片	縄文時代中期 SIより古い
14	A4ca	N-24°-W	長楕円形	1.70 × 0.68	44	外傾	平坦	自然		
15	A4ca	N-4°-W	楕円形	1.52 × 1.12	38	外傾	凹凸	自然	縄文土器片・土器片	縄文時代中期
16-A	B3ba	N-86°-W (楕円形)	楕円形	1.70 × 1.24	56	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SIより古い
16-B	B3ba	N-68°-W (楕円形)	楕円形	1.22 × 0.77	52	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SIより古い
17	B3ba	N-58°-E	円形	2.26 × 2.06	62	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器片・土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
18	B3ba	N-58°-W	円形	1.28 × 1.18	68	垂直	子供ビット2	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
19	B3ba	N-10°-W	円形	2.28 × 2.20	50	垂直	子供ビット2	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
20	B3c7	N-58°-E	不整形円形	2.44 × 2.14	78	外傾	凹凸	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式) SIより古い
22	B3c7	N-18°-E	楕円形	3.26 × 2.82	66	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器片・土器片・土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
23	B3ca	N-14°-W	楕円形	2.60 × 2.22	30	外傾	平坦	自然	縄文土器片・土器片	縄文時代中期
24	B3ca	N-20°-W	円形	1.66 × 1.58	78	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
25	B3ba	N-30°-E	円形	1.04 × 0.94	34	外傾	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期
26	B3ba	N-86°-W	円形	2.26 × 2.10	52	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
27	B3ba	N-18°-W	円形	3.24 × 3.16	42	外傾	子供ビット3	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
28	B3ba	N-56°-E	不整形円形	2.24 × 2.22	24	外傾	子供ビット2	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
29	B3ba	N-46°-E	楕円形	2.28 × 2.06	70	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
30	B3ba	N-22°-W	不整形円形	1.70 × 1.64	38	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
31	B3ba	N-88°-W	円形	1.42 × 1.34	48	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
32	B3ba	N-84°-W	円形	3.20 × 3.10	82	垂直	子供ビット2	自然	縄文土器片・土器片	縄文時代中期(加藤利直式)
33	B3ba	N-36°-W	楕円形	1.38 × 1.24	50	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加藤利直式)

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な遺物	備 考
				長さ×短径(m)	深さ(m)					
37	B3 ₁	N-16'-W	楕円形	0.98 × 0.70	76	外傾	凹状	自然	縄文土器・銅片	縄文時代前期(加賀野原式) S3-10より小さい
39	C3 ₁	N-30'-W	楕円形	1.36 × 1.22	50	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代前期
40	C3 ₂	N-42'-E	楕円形	1.08 × 0.92	36	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
41	B3 ₂	N-32'-E	楕円形	2.88 × 2.46	66	垂直	子供ピット1	自然	縄文土器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
44	B3 ₁	N-32'-E	円形	2.32 × 2.12	84	垂直	子供ピット1	自然	縄文土器・石器片	縄文時代中期(加賀野原式)
45	B3 ₃	N-32'-W	楕円形	1.30 × 1.18	70	垂直	平坦	自然	縄文土器・石器	縄文時代中期(加賀野原式)
46	C3 ₂	N-82'-E	不整形円形	1.52 × 1.30	42	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
47	C3 ₂	N-40'-W	円形	0.92 × 0.92	64	外傾	凹状	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期
49	C3 ₁	N-2'-E	円形	1.58 × 1.58	48	外傾	平坦	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期
50	C3 ₂	N-42'-W	円形	1.22 × 1.16	46	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
51-A	C3 ₂	N-46'-W	(円形)	1.64 × [1.6]	40	外傾	子供ピット1	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
51-B	C3 ₂	N-42'-E	(楕円形)	(1.6) × 1.26	46	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
52	B3 ₂	N-24'-W	楕円形	1.24 × 1.08	74	垂直	平坦	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
53	C3 ₁	N-44'-E	楕円形	1.22 × 1.04	62	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
54	C3 ₂	N-68'-W	楕円形	2.28 × 2.06	62	垂直	子供ピット2	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
55	C2 ₂	N-68'-W	円形	2.84 × 2.82	58	垂直	子供ピット2	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
56	C2 ₂	N-2'-W	(円形)	[2.4] × 2.30	52	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器・土器片・石器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式) S3-11より小さい
57	C2 ₂	N-72'-E	楕円形	2.94 × 2.52	46	垂直	平坦	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式)
58	C3 ₂	N-66'-E	(楕円形)	2.40 × (1.8)	70	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器・土器片・石器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
59	C2 ₂	N-4'-E	(楕円形)	3.76 × (2.8)	86	垂直	子供ピット2	自然	縄文土器・土器片・石器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
60	C2 ₁	N-36'-W	楕円形	1.60 × 1.30	132	傾斜	子供ピット1	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
61	C2 ₁	N-46'-E	(円形)	2.16 × 2.00	28	外傾	子供ピット2	自然	縄文土器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
62	B2 ₂	N-28'-W	楕円形	2.30 × 2.08	76	垂直	子供ピット4	自然	縄文土器・石器片	縄文時代中期(加賀野原式)
64	B2 ₂	N-28'-W	円形	1.74 × 1.64	80	垂直	平坦	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
65	B2 ₁	N-80'-W	円形	2.26 × 2.16	76	垂直	子供ピット1	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式)
66	C2 ₁	N-26'-W	楕円形	2.52 × 2.18	86	垂直	子供ピット1	自然	縄文土器・土器片	縄文時代中期(加賀野原式)
67	C2 ₂	N-16'-E	円形	2.94 × 1.94	72	垂直	子供ピット2	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
68	C2 ₁	N-38'-E	(円形)	2.26 × (1.3)	38	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
72	C2 ₂	N-76'-E	円形	1.82 × 1.40	56	垂直	平坦	自然	縄文土器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
73	C2 ₂	N-80'-W	円形	1.54 × 1.44	74	垂直	子供ピット1	自然	縄文土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
77	C2 ₂	N-34'-W	楕円形	1.76 × 1.38	24	傾斜	平坦	自然		縄文時代中期
79	C2 ₁	N-50'-E	楕円形	1.26 × 1.12	64	垂直	平坦	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式)
81	C2 ₁	N-80'-W	円形	3.08 × 2.96	72	垂直	子供ピット2	自然	縄文土器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
82	C2 ₂	N-34'-W	楕円形	2.54 × 2.10	56	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
83	C1 ₂	N-18'-W	(楕円形)	2.52 × (1.6)	58	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式)
84	C2 ₁	N-50'-W	円形	2.46 × 1.98	50	垂直	平坦	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式)
85	C2 ₁	N-50'-E	円形	2.66 × 1.88	46	垂直	平坦	自然	縄文土器・土器片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式)
89	B4 ₂	N-72'-E	円形	1.40 × 1.34	100	外傾	平坦	自然		縄文時代中期 S3-10より小さい
90	B3 ₂	N-42'-E	楕円形	2.86 × 2.26	76	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
91	B3 ₂	N-2'-E	楕円形	1.56 × 1.30	92	垂直	平坦	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
92	B3 ₂	N-46'-W	円形	2.32 × 2.20	82	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
93	B3 ₂	N-36'-E	円形	2.24 × 2.04	32	外傾	子供ピット1	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加賀野原式) S3-11より小さい
94	B3 ₂	N-20'-W	(円形)	3.28 × 3.26	84	垂直	子供ピット3	自然	縄文土器・土器片・銅片・銅片	縄文時代中期(加賀野原式) S3-10より小さい
95	A3 ₂	N-42'-W	不整形円形	3.80 × 2.84	76	外傾	平坦	自然	縄文土器・土器片	縄文時代中期(加賀野原式)

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形状	規模		壁面	底面	覆土	主な遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
96	B3aa	N-88°-W	(円形)	2.20 × (2.2)	50	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
97	B3aa	N-26°-E	(楕円形)	(2.8) × 2.54	104	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器-石器-磨石-土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30-SK-35より新しい
98	B3aa	N-28°-W	円形	1.24 × 1.22	52	外傾	凹状	自然	縄文土器-石器	SK-30より新しい
99	A4a	N-72°-E	円形	2.82 × 2.78	88	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器-土器-磨石-石器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器)
100-A	C3aa	N-2°-W	(円形)	2.70 × 2.48	56	垂直	子供ビット5	自然	縄文土器-打製石片+ナイフ形石片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30Cより新しい SK-30Bより新しい
100-B	C3aa	N-28°-W	(楕円形)	2.40 × (1.9)	52	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30Aより新しい
100-C	C3aa	N-76°-W	楕円形	0.94 × 0.76	98	外傾	凹状	自然	縄文土器	縄文時代前期
101	B3aa	N-36°-W	楕円形	1.34 × 1.06	80	外傾	凹凸	人為	縄文土器-土器-磨石-石器-骨片 -陶器-骨片-漆器	縄文時代前期 SK-30Aより新しい
102	B2aa	N-62°-W	(楕円形)	3.4 × 2.66	82	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器-土器-磨石-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい SK-30-37より新しい
103	B3aa	N-52°-E	楕円形	1.02 × 0.90	94	外傾	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期
104	C2aa	N-20°-E	楕円形	3.16 × 2.68	86	垂直	子供ビット2	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器)
105	B3aa	N-88°-W	(円形)	(2.4) × 2.30	46	外傾	子供ビット1	自然	縄文土器	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい SK-30より新しい
106	B3aa	N-62°-E	(楕円形)	1.46 × (1.3)	24	緩斜	平皿	自然		縄文時代前期 SK-30より新しい SK-30より新しい
107	C3aa	N-86°-W	円形	3.18 × 2.90	68	垂直	子供ビット3	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
108	C2aa	N-38°-E	(楕円形)	(2.7) × 2.44	128	袋状	子供ビット2	自然	縄文土器-石器-中石器製石-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
109	B3aa	N-60°-W	円形	1.22 × 1.16	94	外傾	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期 SK-30より新しい
110	C2aa	N-14°-E	円形	1.92 × 1.80	98	垂直	子供ビット2	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
111	C2aa	N-88°-W	不整形円形	2.38 × 1.98	54	垂直	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
112	B3aa	N-58°-E	(円形)	(1.5) × 1.40	68	外傾	平皿	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期 SK-30より新しい
113	B3aa	N-78°-E	(楕円形)	2.76 × (2.3)	74	袋状	平皿	自然	縄文土器-土器-磨石-石器-磨石	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい SK-30より新しい
114	B3aa	N-49°-W	(楕円形)	2.02 × (1.4)	84	袋状	平皿	自然	縄文土器-磨石	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30-SK-31より新しい SK-30より新しい
115	C2aa	N-18°-E	楕円形	3.04 × 2.92	24	外傾	子供ビット2	自然	縄文土器	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
116	C2aa	N-60°-E	(楕円形)	2.60 × 2.14	62	垂直	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
117	C2aa	N-28°-E	(楕円形)	2.32 × (1.1)	76	袋状	平皿	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期 SK-30より新しい
118	C2aa	N-34°-W	(不整形円形)	3.48 × 2.70	74	袋状	子供ビット2	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい SK-30より新しい
119	C2aa	N-6°-W	円形	1.00 × 0.94	42	外傾	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期 SK-30より新しい
120	C2aa	N-86°-E	(楕円形)	(2.4) × (1.2)	58	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30-SK-35より新しい SK-30より新しい
121	C3aa	N-86°-E	(円形)	(2.4) × (2.2)	92	袋状	子供ビット3	自然	縄文土器-土器-磨石-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器)
122	C3aa	N-4°-E	円形	0.92 × 0.82	60	外傾	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期 SK-30より新しい
123	C2aa	N-28°-W	円形	1.90 × 1.40	96	袋状	子供ビット2	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器)
124	C2aa	N-58°-E	(円形)	1.90 × (1.3)	82	外傾	平皿	自然	縄文土器-石器	縄文時代前期 SK-30より新しい
125	C2aa	N-88°-W	(不整形円形)	(2.4) × (1.4)	80	袋状	子供ビット2	自然	縄文土器	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
126	C2aa	N-66°-W	(円形)	3.00 × (2.9)	96	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器-小形磨石-磨石-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器)
127	C1aa	N-74°-W	楕円形	2.94 × 2.42	70	垂直	子供ビット2	自然	縄文土器-磨石-石器	縄文時代前期(加賀野原式土器)
128	C2aa	N-50°-W	楕円形	3.36 × 3.02	62	垂直	平皿	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器)
129	C2aa	N-48°-E	(円形)	(2.0) × 1.82	48	外傾	子供ビット3	自然	縄文土器-土器-磨石	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
130	C2aa	N-12°-E	円形	1.08 × 1.00	26	緩斜	平皿	自然	縄文土器	縄文時代前期 SK-30-SK-35より新しい
131	C2aa	N-14°-E	(不整形円形)	2.16 × (1.5)	72	袋状	子供ビット1	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい
132	C2aa	N-36°-W	楕円形	2.60 × 2.22	98	袋状	子供ビット2	自然	縄文土器-石器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30より新しい SK-30より新しい
133	C2aa	N-46°-W	(楕円形)	(2.3) × 1.98	78	袋状	平皿	自然	縄文土器-骨片	縄文時代前期(加賀野原式土器), SK-30-SK-35より新しい

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形状	規模		壁面	底面	覆土	主な遺物	備考
				長さ×幅(m)	深さ(m)					
134	C2a	N-58°-E	(横円形)	(2.8) × (1.6)	70	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器-銅片	縄文時代中期(加群段1式期), SK-12より新しい
135	D2a	N-44°-E	(横円形)	2.38 × (1.7)	66	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器-銅片	縄文時代中期(加群段1式期), SK-12より新しい
136	C2a	N-4°-W	(横円形)	(1.6) × (0.7)	68	外傾	平皿	自然	縄文土器片	縄文時代中期, SK-12より新しい
137	D2a	N-56°-W	円形	2.64 × 2.48	44	外傾	子供ビット2	自然	縄文土器-石鏝-打製石片-土器片	縄文時代中期(加群段1式期), SK-12より新しい
138	B3a	N-22°-E	横円形	1.84 × 1.32	60	外傾	凹凸	自然	縄文土器片-銅片	縄文時代中期
139	D2a	N-88°-W	(円形)	2.76 × 2.74	60	垂直	平皿	自然	縄文土器-石鏝	縄文時代中期(加群段1式期), SK-12より新しい
140	C2a	N-58°-E	(円形)	(3.3) × (1.8)	36	外傾	子供ビット?	自然	縄文土器-銅片	縄文時代中期(加群段1式期)
141	D2a	N-88°-W	(不整形円形)	(2.7) × (2.4)	20	外傾	子供ビット3	自然	縄文土器-磨石-打製石片	縄文時代中期(加群段1式期)
142	C2a	N-46°-W	横円形	1.80 × 1.46	40	外傾	平皿	自然		縄文時代中期, SK-12より新しい
143	C2a	N-14°-W	(横円形)	3.00 × 2.38	86	垂直	子供ビット1	自然	縄文土器片	縄文時代中期(加群段1式期), SK-12より新しい
144	D2a	N-24°-E	(円形)	(2.7) × (2.5)	20	外傾	子供ビット1	自然	縄文土器-銅片	縄文時代中期(加群段1式期), SK-12より新しい

(2) 溝

今回の調査では、調査区の北東部から溝1条を検出した。以下、検出した溝について記載する。

第1号溝 (第125図)

位置 調査区の北東部, 北東溝はA4b₈~A4i₈区, 北西溝はA4f₂~A4i₈区。

重複関係 本跡は第2, 3号住居跡, 第4号土坑を掘り込んで構築されており, これらの遺構より新しい。

規模と形状 溝全体は逆「L」字形を呈しており, 第3号住居跡の中に78°の角度の南コーナーがある。確認できた部分は北東溝が全長33m, 北西溝が全長15mで, 両溝とも直線的に延びており, 北東端部及び北西端部はそれぞれ調査区外に続いている。上幅は0.6~1.1m, 下幅は0.1~0.3m, 深さは54~92cmで, 断面形は段状, 逆台形あるいは「U」字形と一定ではない。南コーナー部分は深さ40cm前後と一番浅くなっている。

方向 北東溝はN-28°-E, 北西溝はN-42°-W。

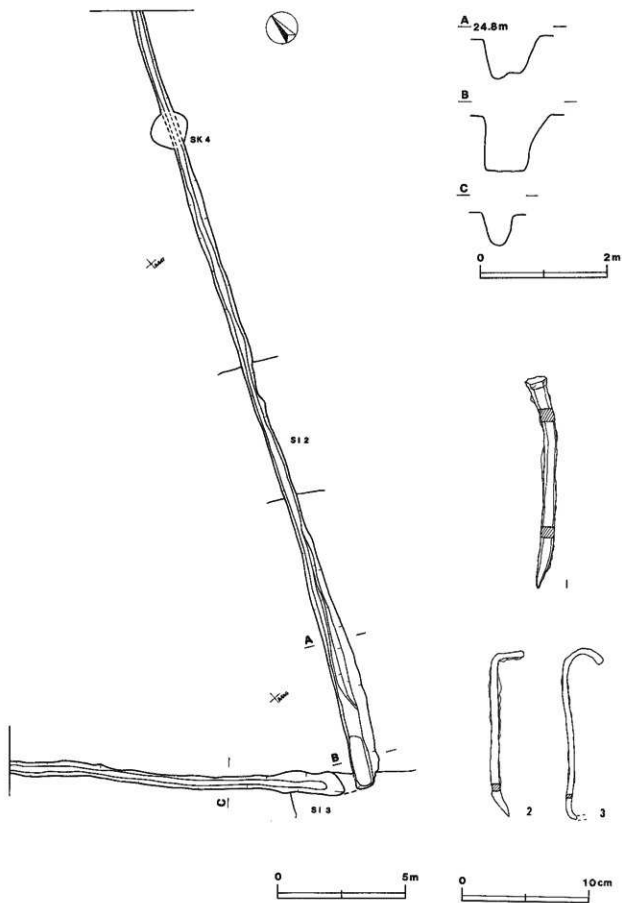
覆土 自然堆積である。

遺物 覆土中から縄文土器片が220点, 土師器片が30点, 銅片が1点ほど出土しているが, すべて本跡が埋まる過程で流れ込んだ遺物である。また, 同じく覆土中から土器として土師質土器片3点及び陶器片5点, 鉄製品として第125図1の釘, 2の鋸及び3の耳金が出土している。

所見 本跡は, 地境の内側にほぼ平行して掘り込まれており, 地境に伴う区画溝あるいは根切溝と思われる。正確な時期は不明であるが近世以降と考えたい。

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	種別	計 測 値				現存率(%)	材質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第125図1	釘	16.8	1.8	1.7	88.5	100	鉄	覆土	M3 PL47
2	鋸	13.2	2.6	0.6	23.2	100	鉄	覆土	M4 PL47
3	耳金	13.5	3.3	0.4	(13.3)	90	鉄	覆土	M5 PL47



第125图 第1号沟渠测，出土遗物测图

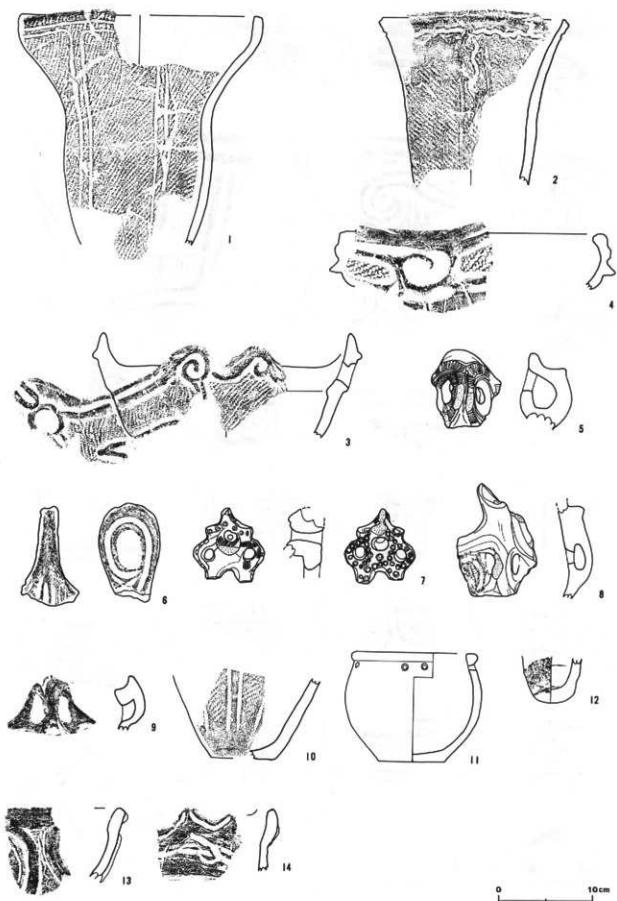
4 遺構外出土遺物

今回の調査では、表土層、遺構確認面及び覆土中から、遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、旧石器時代の削器及び尖頭器、縄文時代の縄文土器、耳栓、土器片鏟、土製円板、土製有孔円板、有舌尖頭器、石鏟、石錐、磨製石斧、小形磨製石斧、打製石斧、礫器、磨石、敲石、軽石及び石皿、古墳時代の土師器、須恵器、土玉、双孔方板及びガラス製小玉、近世の灯明受皿、小碗、撚鉢、泥面子及び砥石など特徴的なものについて実測図及び拓影図を掲載し、解説は一覧表等に記載した。

なお、第135図54の石棒は、調査区の東側に隣接する畑より出土したものであるが、参考資料として実測図を掲載した。

遺構外出土縄文土器観察表

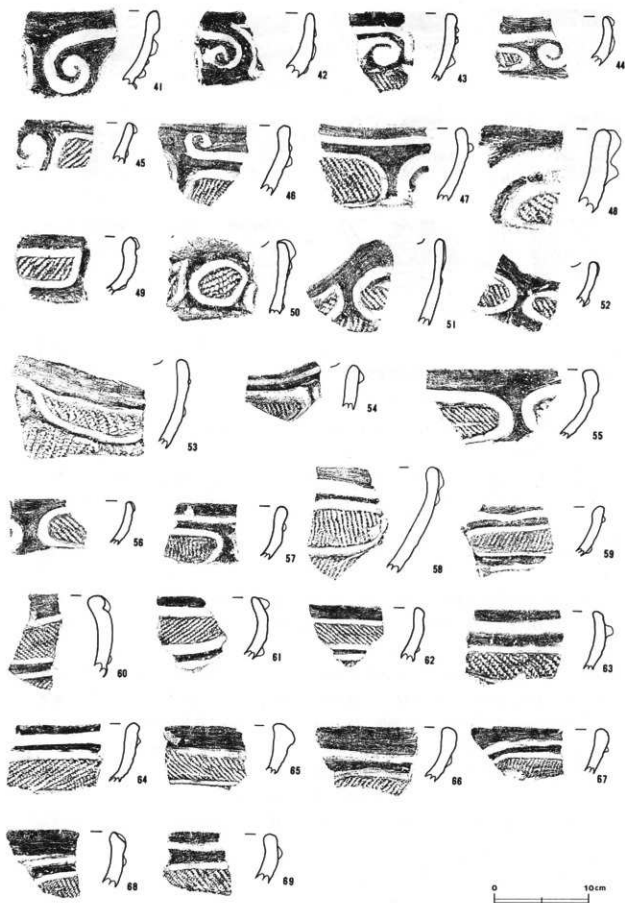
図番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (25.8)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は地文に単節 R L の縄文が施され、上部に 2 条単位の沈線を通らしている。胴部は地文に単節 R L の縄文が施され、2 条単位の沈線と口縁部の沈線から直線状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P134 30% D ₂ 区付近表土 敷材中(南側)部 PL40
		B (24.3)			
2	深鉢形土器 縄文土器	A (20.0)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部上部に飾帯が帯状に貼付され、その直下に 1 条の沈線が波状に巡らしている。胴部は地文に無節 L の縄文が施され、3 条単位の沈線と口縁部の沈線から内縁の 2 条は直線状に、内の 1 条は波状に懸垂している。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P173 20% C ₂ 区付近表土 敷材中(南側)部 PL40
		B (17.5)			
3	深鉢形土器 縄文土器	A (26.6)	口縁部片。波状口縁。口縁部は地文に単節 R L の縄文が施され、その上に細目の飾帯を渦巻状及び帯状に貼付している。渦巻文が描かれたところの口唇部は舌状に突出する。その他にも、口唇部には 1 つ孔の空く穿孔把手が付き、孔の周囲に細目の飾帯を貼付している。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P174 20% 表採 敷材中(表土)部 PL41
		B (11.0)			
4	深鉢形土器 縄文土器	A (28.0)	口縁部片。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による渦巻文と長方形区画文で、区画内に波節 L R L の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P175 10% C ₂ 区付近表土 敷材中(南側)部 PL40
		B (5.8)			
5	深鉢形土器 縄文土器	B (8.3)	把手部片。把手は 3 つ孔の空く線状把手で、孔の周囲に飾帯や沈線を通らしている。飾帯には網目が施されている。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P178 5% D ₂ 区表土 敷材中(南側)部 PL41
		B (8.3)			
6	深鉢形土器 縄文土器	B (10.5)	把手部片。把手は環状把手で、孔の周囲に飾帯や沈線を通らしている。正面は沈線を持つ飾帯を貼付して区画しており、区画内に縦位の短沈線が充満されているものと思われる。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P179 5% D ₂ 区遺構確認面 敷材中(南側)部 PL41
		B (10.5)			
7	深鉢形土器 縄文土器	B (7.9)	把手部片。把手は 5 つ以上孔の空く穿孔把手である。正面及び上面は単節 R L の縄文が施され、上部には円形刺突文も施されている。裏面及び左右側面は円形刺突文が充満されている。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P180 5% C ₂ 区表土 敷材中(表土)部 PL41
		B (7.9)			
8	深鉢形土器 縄文土器	B (12.1)	把手部から口縁部にかけての破片。把手は 3 つ孔の空く穿孔把手で、把手の先端に渦巻文が描かれるものと思われる。口縁部は隆線とそれに沿う沈線による横位の区画文で、区画内に単節 R L の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P177 5% SI-2層土 敷材中(南側)部 PL41
		B (12.1)			
9	深鉢形土器 縄文土器	B (5.8)	把手部片。把手は 3 つ孔の空く穿孔把手で、把手の先端に渦巻文が描かれている。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P181 5% C ₂ 区遺構確認面 敷材中(南側)部 PL41
		B (5.8)			
10	深鉢形土器 縄文土器	B (8.5)	底部から胴部下半にかけての破片。平底。胴部は地文に単節 R L の縄文が施され、2 条の沈線と区画された磨石帯を直線状に懸垂している。胴部下部は横位の磨きである。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P182 10% C ₂ 区付近表土 敷材中(南側)部 PL41
		C (6.8)			
11	鉢形土器 縄文土器	A 13.6	平底。平縁口縁。口縁部は飾帯を帯状に貼付しており、その直下の左右 2 か所に 2 つ単位の孔が穿孔されている。口唇部以下横位の磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P183 90% C ₃ 区表土 敷材中(南側)部 PL41
		B 11.6			
		C 7.0			
12	ミニチュア土器 縄文土器	B (3.8)	口縁部欠損。丸底。胴部は細かな条線文が施されているが、底部及び内面は指ナデである。内面に輪痕みあり。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P184 50% D ₂ 区付近表土 敷材中(南側)部 PL41
		B (3.8)			



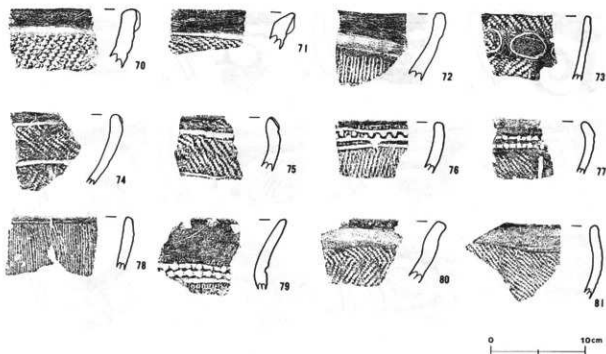
第126图 遼構外出土繩文土器実測・拓影图(1)



第127圖 遼寧外出土繩文土器實測・拓影圖(2)



第128图 遺構外出土銅文土器実測・拓影图(3)



第129図 遺構外出土縄文土器実測・拓影図(4)

第126図13, 14及び第127図15~40, 第128図41~69, 第129図70~81は縄文時代中期の深鉢形土器及び鉢形土器の口縁部片である。

第126図13は阿玉台Ⅲ式の土器である。断面がカマボコ状を呈する隆帯と結節沈線文, 沈線文が施されている。

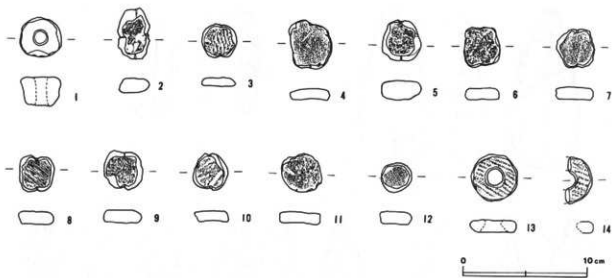
第126図14は阿玉台Ⅳ式の土器である。沈線による杵状文が描かれ, 口唇部に先端が2つの舌状把手をもっている。

第127図15~28は加曾利EⅠ式の土器群である。地文に縄文などが施され, その上に隆帯を貼付して区画がなされている。

第127図29~38は加曾利EⅡ式の土器群である。29~37は沈線を沿わせた隆帯が渦巻状及び杵状に貼付され, 渦巻文や長方形区画文などが描かれている。38は口縁部文様帯がなく, 地文に縄文が施され, その中に懸垂文が描かれている。

第127図39, 40及び第128図41~69, 第129図70~79は加曾利EⅢ式の土器群である。39~49は加曾利EⅡ式の伝統を残しており, 沈線を沿わせた隆線による渦巻文や長方形区画文などが施されているが, その渦巻文には退化が認められる。50~72は扁平化した隆線と太い沈線による楕円区画文や長方形区画文などが施されている。73~75は沈線を沿わせた隆線による区画文から, 沈線だけによる区画文になったより新しい段階のものである。76, 77は口縁部に沈線が巡らされ, さらにその沈線には円形刺突文が重ねられている。78は口縁部文様帯がなく, 地文に細かな条線文が施されている。79は鉢形土器の口縁部片である。

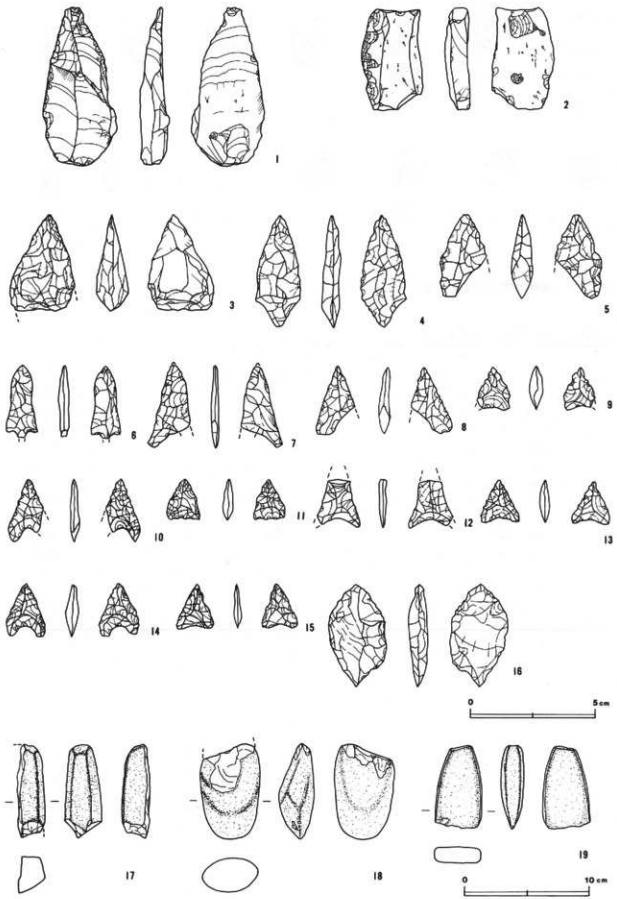
第129図80, 81は加曾利EⅣ式の土器群である。口縁部は片側をなぞる微隆起線で区画されており, 区画内は無文帯となっている。



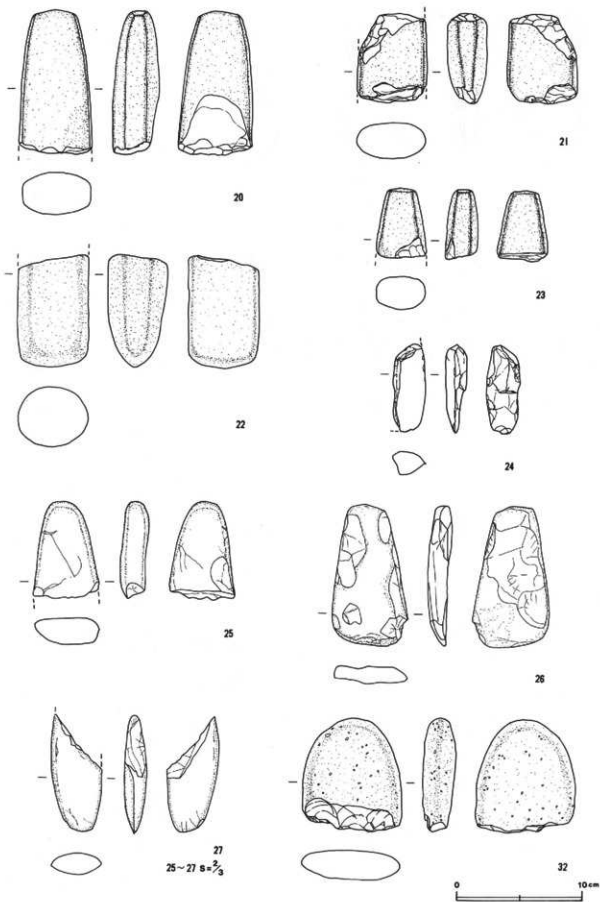
第130图 遺構外出土縄文時代土製品実測・拓影图

遺構外出土縄文時代土製品觀察表

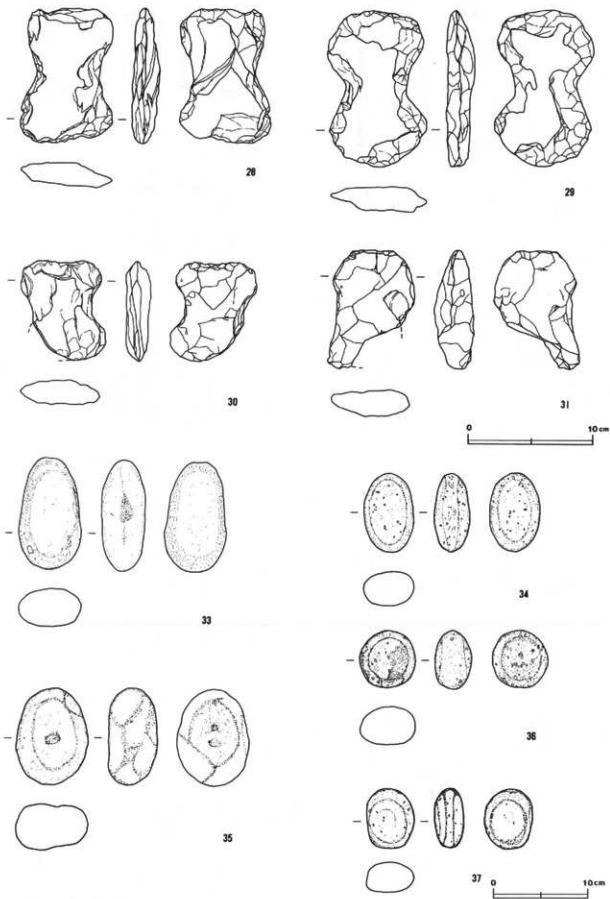
図版番号	種別	計測値					現存率(%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第130図1	耳栓	(3.1)	3.3	2.4	1.2	(25.5)	80	表探	DP46, 縄文時代, PL41
2	土器片鏝	4.1	2.7	1.2	—	12.3	100	D ₀₁ 区付近遺構確認面	DP36, 縄文時代, PL41
3	土器片鏝	2.7	2.8	0.7	—	6.1	100	SI-2覆土	DP3, 縄文時代, PL41
4	土器片鏝	3.9	3.4	0.9	—	13.4	100	C ₂₅ 区付近表土	DP47, 縄文時代, PL41
5	土器片鏝	3.2	3.4	1.6	—	14.3	100	C ₂₃ 区付近表土	DP48, 縄文時代, PL41
6	土器片鏝	3.2	3.9	0.9	—	10.8	100	C ₂₃ 区付近表土	DP49, 縄文時代, PL41
7	土器片鏝	3.1	3.0	1.0	—	9.9	100	C ₂₃ 区表土	DP52, 縄文時代, PL41
8	土器片鏝	2.9	2.9	1.0	—	9.9	100	C ₂₅ 区表土	DP51, 縄文時代, PL41
9	土器片鏝	3.2	3.1	1.1	—	10.7	100	D ₂₄ 区付近表土	DP50, 縄文時代, PL41
10	土器片鏝	3.0	2.8	0.9	—	7.8	100	D ₂₁ 区付近表土	DP53, 縄文時代, PL41
11	土製円板	3.1	3.3	1.0	—	10.3	100	C ₂₇ 区付近表土	DP54, 縄文時代, PL41
12	土製円板	2.4	2.6	1.0	—	6.4	100	C ₃₁ 区付近表土	DP55, 縄文時代, PL41
13	有孔土製円板	3.7	3.7	1.0	1.5~2.3	11.8	100	D ₂₃ 区付近表土	DP44, 縄文時代, PL41
14	有孔土製円板	3.8	(2.2)	0.9	1.5~2.1	(7.1)	50	C ₂₁ 区遺構確認面	DP45, 縄文時代, PL41



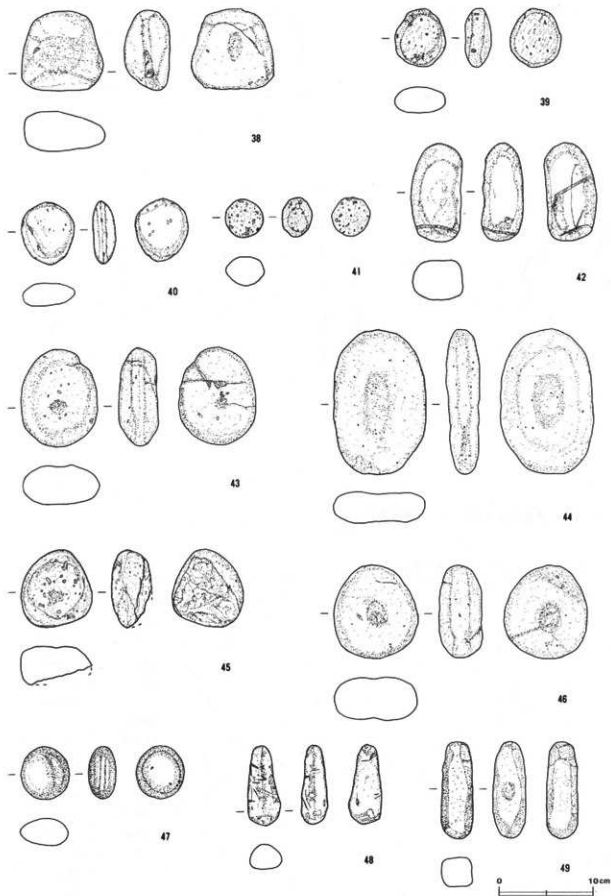
第131図 遠構外出土旧石器及び縄文時代石器実測図(1)



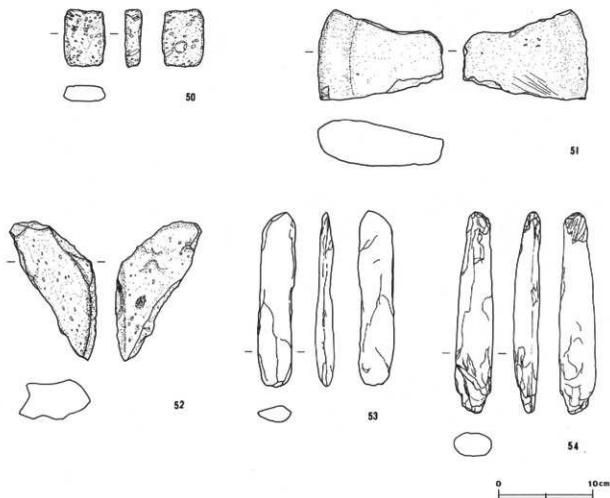
第132図 遺構外出土縄文時代石器実測図(2)



第133图 遺構外出土縄文時代石器実測図(3)



第134圖 遼寧外出土繩文時代石器實測圖(4)

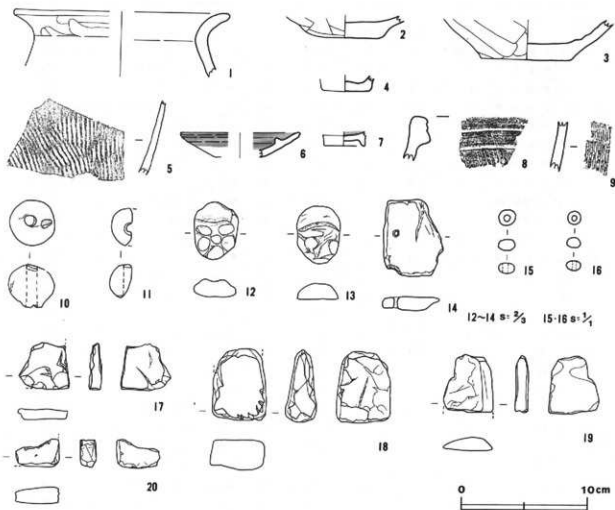


第135図 遺構外出土縄文時代石器実測図(5)

遺構外出土旧石器及び縄文時代石器観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第131図1	削器	6.4	3.0	1.1	16.5	100	黒曜石	B4 ₂₁ 区遺構確認面	Q87, 旧石器時代, PL42
2	削器	4.1	2.5	0.9	11.2	100	黒曜石	SI-2覆土	Q4, 旧石器時代, PL42
3	尖頭器	(3.4)	(2.6)	1.3	(9.8)	50	安山岩	A4 ₂₁ 区遺構確認面	Q83, 旧石器時代, PL42
4	有舌尖頭器	4.5	1.8	0.7	5.1	100	安山岩	A4 ₂₁ 区遺構確認面	Q84, 縄文時代, PL42
5	有舌尖頭器	(3.3)	(1.9)	0.9	(4.7)	70	チャート	C3 ₂₁ 区付近表土	Q85, 縄文時代, PL42
6	石鏃	(2.9)	1.3	0.4	(1.3)	95	チャート	A4 ₂₁ 区遺構確認面	Q73, 縄文時代, PL42
7	石鏃	(3.2)	(1.7)	0.4	(1.1)	80	凝灰岩	A4 ₂₁ 区遺構確認面	Q72, 縄文時代, PL42
8	石鏃	2.7	(1.6)	0.4	(1.2)	80	チャート	A4 ₂₁ 区表土	Q79, 縄文時代, PL42
9	石鏃	1.8	(1.3)	0.6	(0.8)	95	黒曜石	C2 ₂₁ 区表土	Q82, 縄文時代, PL42
10	石鏃	2.5	(1.4)	0.4	(0.8)	80	チャート	C2 ₂₁ 区付近表土	Q77, 縄文時代, PL42
11	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.7	100	チャート	C3 ₂₁ 区付近遺構確認面	Q75, 縄文時代, PL42
12	石鏃	(2.0)	(1.7)	0.3	(0.9)	70	チャート	C3 ₂₁ 区付近遺構確認面	Q78, 縄文時代, PL42
13	石鏃	1.7	1.5	0.4	0.8	100	黒曜石	C3 ₂₁ 区付近表土	Q81, 縄文時代, PL42
14	石鏃	2.1	1.5	0.5	1.3	100	チャート	表探	Q74, 縄文時代, PL42
15	石鏃	1.8	1.5	0.4	0.7	100	チャート	表探	Q76, 縄文時代, PL42
16	石鏃	4.1	2.2	0.8	6.7	100	チャート	C3 ₂₁ 区付近表土	Q86, 縄文時代, PL42

图版番号	類別	計 測 値				現存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第131図17	磨製石斧	(7.5)	(2.3)	3.0	(69.8)	40	砂岩	C2 ₁₀ 区付近表土	Q111, 縄文時代
	磨製石斧	(7.7)	4.9	2.8	(137.8)	70	凝灰岩	C3 ₁₀ 区付近遺構跡面	Q108, 縄文時代, PL42
	磨製石斧	6.7	3.8	1.8	(76.9)	95	緑泥片岩	C3 ₁₀ 区表土	Q110, 縄文時代, PL42
第132図20	磨製石斧	(11.5)	6.0	3.6	(372.7)	80	砂岩	C3 ₁₀ 区付近遺構跡面	Q105, 縄文時代, PL42
	磨製石斧	(7.2)	5.6	3.2	(195.0)	50	砂岩	D2 ₁₀ 区付近表土	Q107, 縄文時代, PL42
22	磨製石斧	(9.0)	5.8	4.9	(379.3)	80	安山岩	表探	Q106, 縄文時代, PL42
23	磨製石斧	(5.7)	(4.0)	2.5	(85.6)	50	安山岩	表探	Q109, 縄文時代, PL42
24	磨製石斧	(7.1)	(2.6)	1.8	(35.8)	40	緑泥片岩	表探	Q112, 縄文時代, PL42
25	小形磨製石斧	(3.9)	(2.5)	1.0	(18.5)	70	凝灰岩	C3 ₁₀ 区表土	Q103, 縄文時代, PL42
26	小形磨製石斧	5.6	(3.0)	0.9	(20.9)	95	凝灰岩	表探	Q102, 縄文時代, PL42
27	小形磨製石斧	(4.8)	2.0	0.9	(9.0)	80	凝灰岩	表探	Q104, 縄文時代, PL42
第133図28	打製石斧	10.8	7.4	2.3	189.7	100	安山岩	C2 ₁₀ 区表土	Q114, 縄文時代, PL42
	打製石斧	12.6	8.0	2.4	266.2	100	安山岩	C3 ₁₀ 区付近遺構跡面	Q113, 縄文時代, PL42
	打製石斧	8.0	(6.9)	2.0	(108.1)	80	安山岩	C3 ₁₀ 区付近遺構跡面	Q116, 縄文時代, PL42
	打製石斧	9.5	(6.8)	3.2	(191.3)	70	砂岩	C3 ₁₀ 区付近表土	Q115, 縄文時代, PL42
第132図32	磨 器	9.1	7.9	2.7	256.1	100	安山岩	A4 ₁₀ 区付近表土	Q117, 縄文時代, PL42
第133図33	磨 石	11.8	6.8	4.9	506.1	100	砂岩	SI-3覆土	Q6, 縄文時代, PL43
	磨 石	8.3	5.4	3.8	227.5	100	安山岩	SI-7覆土	Q7, 縄文時代, PL43
	磨 石	10.3	7.7	5.2	573.8	100	砂岩	A4 ₁₀ 区遺構跡面	Q93, 縄文時代, PL43
36	磨 石	6.1	5.9	4.0	184.9	100	安山岩	A4 ₁₀ 区遺構跡面	Q96, 縄文時代
37	磨 石	6.3	5.1	3.1	154.5	100	安山岩	A4 ₁₀ 区付近表土	Q97, 縄文時代
第134図38	磨 石	8.5	8.8	4.9	488.2	100	砂岩	A4 ₁₀ 区付近表土	Q92, 縄文時代, PL43
39	磨 石	6.1	5.4	2.8	131.8	100	安山岩	B4 ₁₀ 区付近表土	Q99, 縄文時代
40	磨 石	6.6	5.7	2.4	101.1	100	安山岩	B4 ₁₀ 区付近表土	Q100, 縄文時代
41	磨 石	4.2	4.0	3.1	63.0	100	安山岩	C1 ₁₀ 区付近表土	Q101, 縄文時代
42	磨 石	10.5	5.6	4.4	399.9	100	砂岩	C2 ₁₀ 区表土	Q94, 縄文時代, PL43
43	磨 石	10.4	8.1	4.2	507.5	100	安山岩	C2 ₁₀ 区付近表土	Q91, 縄文時代, PL43
44	磨 石	15.3	9.6	3.5	638.0	100	安山岩	C3 ₁₀ 区表土	Q89, 縄文時代, PL43
45	磨 石	8.3	7.5	(4.2)	(285.4)	70	安山岩	D2 ₁₀ 区付近表土	Q95, 縄文時代
46	磨 石	9.9	8.9	4.6	617.5	100	安山岩	表探	Q90, 縄文時代, PL43
47	磨 石	5.7	5.4	3.8	111.7	100	安山岩	表探	Q98, 縄文時代
48	磨 石	8.4	3.6	2.9	87.6	100	凝灰岩	表探	Q118, 縄文時代, PL43
49	磨 石	10.3	3.4	3.5	177.6	100	砂岩	表探	Q119, 縄文時代, PL43
第135図50	磨 石	6.0	4.4	1.8	7.5	100	磨石	表探	Q120, 縄文時代, PL43
51	石 皿	(9.6)	(13.3)	5.0	(749.1)	20	安山岩	A4 ₁₀ 区遺構跡面	Q121, 縄文時代, PL43
52	石 皿	(14.6)	(9.2)	4.4	(322.9)	20	安山岩	A4 ₁₀ 区遺構跡面	Q122, 縄文時代, PL43
53	不明石器	18.5	4.1	2.0	168.3	100	霞石片岩	C2 ₁₀ 区表土	Q123, 縄文時代
54	石 棒	(21.3)	(4.0)	2.8	(327.1)	70	虎骨片岩	調査区奥側隣地	Q124, 縄文時代, PL42 参考資料



第136図 遺構外出土古墳時代及び近世遺物実測・拓影図

遺構外出土土師器・須恵器・陶器観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	壺 土師器	A [17.0] B (4.4)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナゲ後斜位のヘラ削り、内面横ナゲ。	砂粒・長石・雲母 にふい・褐色 普通	P176 10% SI-3付近表土 古墳時代中層(3段後半) PL48
2	壺 土師器	B (1.6) C 6.4	底部片。平底。	体部下端及び底部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナゲ。	砂粒・長石・雲母・石英 にふい・褐色 普通	P189 10% SK-95覆土 古墳時代中層(3段後半) PL48
3	壺 土師器	B (3.0) C 7.0	底部片。平底。	体部下端及び底部外面斜位のヘラ削り、内面ヘラナゲ。	砂粒・長石・雲母 にふい・褐色 普通	P138 10% SK-95覆土 古墳時代中層(3段後半) PL48
4	ヒツシア土器 土師器	B (1.3) C 3.8	口縁部欠損。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部下端及び底部外面ヘラナゲ、内面指ナゲ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P186 70% 表塚 古墳時代中層(3段後半) PL48
6	灯明受皿 陶器	A (9.4) B 1.9 C [4.0]	平底。体部及び口縁部は外傾しながら立ち上がる。体部内面中に環状の仕切が付く。	ロクロ成形。仕切取り付け。内面へ口縁部外面に鉄軸を施軸。	砂粒・長石 胎土にふい・褐色、 軸：灰赤色 普通、瀬戸・美濃系	P187 20% SD-1付近表土 近世後半(18-19世紀) PL48
7	小陶器	B (1.2) D 3.2 E 0.8	底部片。底部は平底で、断面形が「U」字形の輪高台が付く。	ロクロ成形。削り出し高台。内面に鉄軸を施軸。	砂粒・長石 胎土：灰白色、 軸：明オリブ灰色 普通、瀬戸・美濃系	P188 10% A4、区付近表土 近世後半(18-19世紀)

第136図5は表採された古墳時代中期後半の須恵器甕の体部片で、平行印きが施されており、第7号住居跡出土の須恵器甕と同一個体と思われる。

第136図8は第1号溝付近の表土から出土した近世前半の明石・堺系播鉢の口縁部片で、8条以上1単位の播目が施されている。また、9はC3a区付近の表土から出土した同じく近世前半の明石・堺系播鉢の体部片で、7条以上1単位の播目が施されている。

遺構外出土古墳時代及び近世土製品観察表

図版番号	種別	計測値					現存率(%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第136図10	土玉	3.4	3.6	3.6	0.9	34.8	100	SI-14A覆土	DP15, 古墳時代, PL48
11	土玉	(2.7)	(1.6)	(3.0)	(0.8)	(9.2)	40	SI-1付近表土	DP56, 古墳時代, PL48
12	泥面子	2.3	1.8	0.8	—	1.9	100	SK-44覆土	DP24, 近世, PL48
13	泥面子	2.4	1.7	0.7	—	1.8	100	表採	DP57, 近世, PL48

遺構外出土古墳時代及び近世石・ガラス製品観察表

図版番号	種別	計測値				現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第136図14	双孔方板	3.0	(2.4)	0.5	(5.8)	70	滑石	表採	Q88, 古墳時代, PL48
15	ガラス製小玉	0.3	0.4	0.4	0.1	100	白色ガラス	SI-14A覆土	Q15, 古墳時代, PL48
16	ガラス製小玉	0.3	0.35	0.35	0.1	100	緑色ガラス	SI-30覆土	Q21, 古墳時代, PL48
17	礫石	(4.0)	(3.7)	1.0	(17.3)	40	凝灰岩	SI-18覆土	Q125, 近世
18	礫石	(5.7)	4.3	2.5	(72.8)	50	砂岩	SD-1付近表土	Q126, 近世
19	礫石	(4.5)	4.0	1.1	(21.6)	50	凝灰岩	SD-1付近表土	Q127, 近世
20	礫石	(2.2)	(3.4)	1.3	(11.2)	30	凝灰岩	B4a区付近表土	Q128, 近世

第4節 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡38軒、土坑117基及び陥穴6基、古墳時代中期の竪穴住居跡4軒及び土坑4基、中世の土坑1基、時期不明の土坑3基及び溝1条である。また、出土した遺物は、旧石器時代の石器から近世の陶器まで、多種及び多期にわたっている。ここでは、主としてそれぞれの時代の検出遺構と出土遺物についての概要を述べ、まとめとする。

1 旧石器時代

黒曜石の削器2点、安山岩の尖頭器1点及び割片十数点が、表土層、遺構確認面及び他の遺構の覆土中から出土している。しかし、今回の調査では旧石器時代の明瞭な石器集中地点は検出されなかった。

2 縄文時代

今回の調査では調査区のほぼ全域から当該期に属する竪穴住居跡38軒、土坑117基及び陥穴6基を検出した。これらの遺構からは深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、器台形土器、有孔鏝付土器及びミニチュア土器等の縄文土器、土器片鏟及び土製円板等の土製品、石鏃、石錐、搔器、ナイフ形石器、磨製石斧、小形磨製石斧、打製石斧、磨石、石皿及び凹石等の石器が出土している。

これらの検出された遺構は、出土遺物からほとんどが縄文時代中期のものと考えられるが、さらに6つの時期に区分することができる。以下、それぞれの時期の様相について見てみたい。

(1) 中期前半：阿玉台IV式期

この時期の遺構は、調査区の南西部に位置している第60号土坑の1基が該当するだけで、当該期の住居跡は検出されなかった。

土坑は、形態的に分類すると、袋状で底面に子供ピットをもつタイプのものである。

当該期の縄文土器は、沈線文が描かれていたり、地文に縄文が施されていることなどが文様の特徴となっている。

(2) 中期後半：中峠式期

この時期の遺構は、調査区の南西部に位置している第79、118、125、133号土坑の4基が該当するだけで、阿玉台IV式期と同じく当該期の住居跡は検出されなかった。

土坑は、形態的に分類すると、袋状で底面に子供ピットをもつタイプのものが2基、袋状で底面が平坦なタイプのものが1基、円筒状で底面が平坦なタイプのものが1基である。

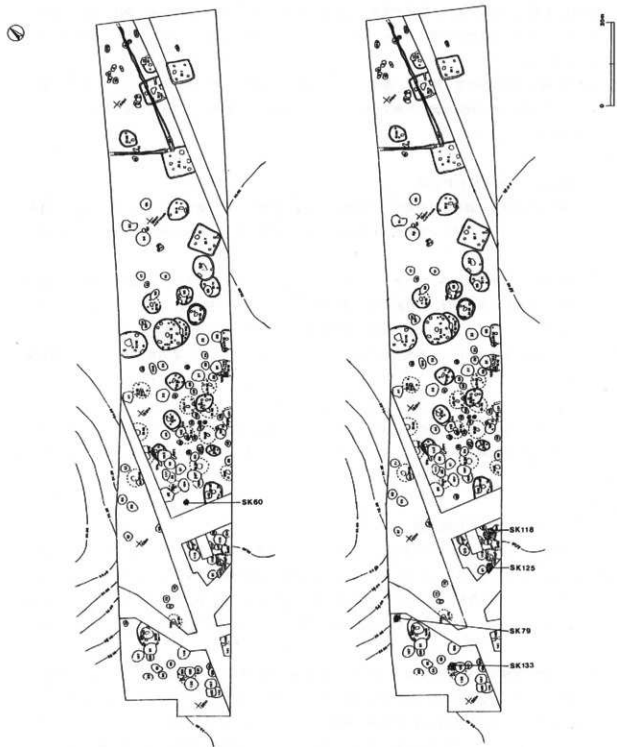
当該期の縄文土器は、口縁部文様帯に交互刺突文が見られたり、隆帯上に刻み目や縄文が施されていることなどが文様の特徴となっている。

(3) 中期後半：加曾利E I式期

この時期の住居跡は、調査区の中央部から南西部にかけて位置している第11、20、23、28、32号住居跡の5軒が該当する。また、土坑は、同じく中央部から南西部にかけて位置している第18、44、72、84、108、110、113、114、116、121、123、131、132、134、137、139、140、144号土坑の18基が該当する。

阿玉台IV式期

中峠式期



第137図 縄文時代遺構配置図(1)

竪穴住居跡の規模及び平面形は、長径3.9～5.3mの楕円形を呈している。主柱穴は、確認できたものだけをみると2～5か所となる。炉は、すべて床面を掘り窪めた地床炉である。

土坑は、形態的に分類すると、袋状で底面に子供ピットをもつタイプのものが5基、袋状で底面が平坦なタイプのものが2基、円筒状で底面に子供ピットをもつタイプのものが6基、円筒状で底面が平坦なタイプのものが5基である。

当該期の縄文土器の口縁部文様帯は、隆帯によって区画されており、その中に隆帯をクランク状や波状に貼付していることなどや、胴部は縄文を地文とし、その上に沈線による懸垂文や渦巻文が施されていることなどが文様の特徴となっている。

(4) 中期後半：加曾利EⅡ式期

この時期の住居跡は、調査区の中央部から南西部にかけて位置している第21、25、26、50号住居跡の4軒が該当する。また、土坑は、同じく中央部から南西部にかけて位置している第26、28、61号土坑の3基が該当する。

竪穴住居跡は、重複関係が激しいためその全容を知ることができるものが少なく、第25号住居跡以外は不明な点が多い。規模及び平面形は、長径約5.1mの楕円形を呈している。主柱穴は、確認できたのだけを見ると2～5か所となる。炉は、3軒が床面を掘り窪めた地床炉であるが、第25号住居跡内には炉が2つ遺存していた。また、第26号住居跡の炉は土器埋設炉である。その他の内部施設として、第50号住居跡からは壁溝が検出されている。

土坑は、形態的に分類すると、3基ともすべて円筒状で底面に子供ピットをもつタイプのものである。

当該期の縄文土器の口縁部文様帯は、隆帯と沈線による渦巻文、楕円区画文及び長方形区画文が施されていることなどや、胴部は縄文を地文とし、その上に沈線による幅の狭い懸垂文が施されているが、この間は細く磨消されていることなどが文様の特徴となっている。

(5) 中期後半：加曾利EⅢ式期

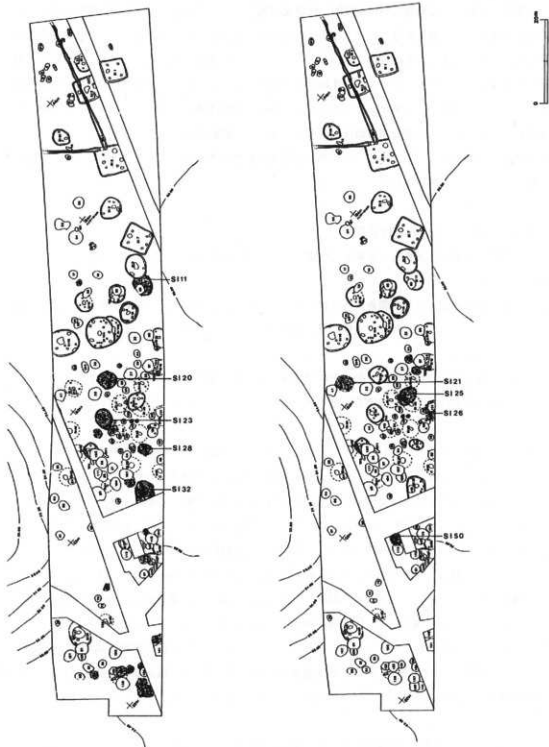
この時期の住居跡は、調査区の中央部から南西部にかけて位置している第6、9、10、12、14-A及びB、15、16、18、19、29、30、33、37、41、43、44、48号住居跡の18軒が該当する。また、土坑は、同じく中央部から南西部にかけて位置している第17、19、20、22、24、27、31～33、41、45、52、55～59、62、64～67、81～83、85、90～92、94～97、100-A、102、104、107、111、120、126～129、141号土坑の44基が該当する。

竪穴住居跡の規模及び平面形は、長径(直径)3.8～7.8mの楕円形あるいは円形を呈しているが、第9、14-A及びB、16、33号住居跡の5軒は、長径が6mを超える大形の住居跡である。さらに、第33号住居跡は、床面に2つの段をもっており、有段式竪穴住居跡の様相を呈している。主柱穴は、確認できたのだけを見ると1～7か所となる。炉は、13軒が床面を掘り窪めた地床炉であるが、第9号住居跡の炉は造り替えが行われた可能性がある。第18及び41号住居跡の炉は土器埋設炉、第29及び30号住居跡の炉は石囲炉であり、第10号住居跡の炉は土器埋設炉、第43号住居跡の炉は土器囲炉であった可能性が高い。また、第33号住居跡内には炉が2つ遺存しており、1つは地床炉であるが、もう1つは石・土器囲炉であった。その他の内部施設として、第15号住居跡からは壁溝が検出されている。

土坑は、形態的に分類すると、円筒状で底面に子供ピットをもつタイプのものが31基、円筒状で底面が平坦

加曾利E I 式期

加曾利E II 式期



第138図 縄文時代遺構配置図(2)

なタイプのものが1基、平面形や断面形及び底面があまり整わないタイプのものが2基である。

当該期の縄文土器は、文様構成の変化によってさらに細分することができる。口縁部文様帯は、退化しているが隆線と沈線による渦巻文が残る段階、渦巻文が見られなくなり楕円区画文や長方形区画文だけが施される段階、隆線による区画文が見られなくなり沈線だけによる区画文が残る段階、そして1～2条の沈線だけあるいは胴部文様と一体化する段階へと変わっていく。こうした変化に伴って、口縁部文様と胴部文様の境も、隆線と沈線による区画から、1～2条の沈線だけの区画となり、さらに口縁部文様の下端と胴部文様の上端が連結し、ついには境そのものがなくなっていくのである。胴部は縄文を地文とし、その上に沈線による懸垂文が施されているが、この懸垂文間の幅は広がっていき、太く磨消されるようになる。さらに新しくなると、曲線的な磨消帯も見られるようになる。その他、連弧文土器群が多く伴出していることなども、当該期の土器様相の特徴の一つとして挙げられる。

(6) 中期後半：加曾利EIV式期

この時期の遺構は、調査区の北東部に位置している第4号住居跡の1軒が該当するだけで、当該期の土坑は検出されなかった。

その竪穴住居跡も、半分が調査区外に延びているため不明点が多い。規模及び平面形は、直径約5.0mの円形を呈しているものと思われる。主柱穴は、確認できたものだけをみると2か所となる。炉は、床面を掘り窪めた地床炉である。

当該期の縄文土器の口縁部は、微隆起線で区画された無文帯であることなどや、胴部は縄文を地文とし、その上に微隆起線で区画された磨消帯が垂下されていることなどが文様の特徴となっている。

次に6基の陥し穴について見てみよう。陥し穴はすべて調査区の中央部から北東部にかけて位置している。特に、第3、4及び5号陥し穴は、最北東部に位置しており、当遺跡が立地している舌状台地の最先端部に当たる。平面形で分類すると、楕円形が3基、長楕円形が2基、不整長方形が1基で、短径（短軸）方向の断面形で分類すると、「V」字形が3基、「U」字形が2基、2段の逆台形が1基である。長径（長軸）方向は、 $N-6^{\circ}-W-N-60^{\circ}-E$ の範囲の中にすべて収まり、当遺跡が立地している舌状台地の延びる方向性に近い。これらの陥し穴群は、台地の中央部よりも縁辺部に、ある程度の間隔を空けて、等高線に直交するようなかたちで構築されていたものと思われる。遺物は、第3、5号陥し穴の覆土中から少量の縄文土器片、第6号陥し穴の覆土中から少量の縄文土器片、土器片鱗及び剥片がそれぞれ1点ずつ出土しただけで、それ以外の陥し穴からはまったく遺物が出土していない。したがって、これらの陥し穴群の時期は縄文時代中期以前と思われるのだが、詳細は不明である。しかし、宮前遺跡が立地している台地の縁辺部は、縄文時代のある時期には、小動物を捕獲するための狩猟場として利用されていたことはまちがいないと言うことができる。

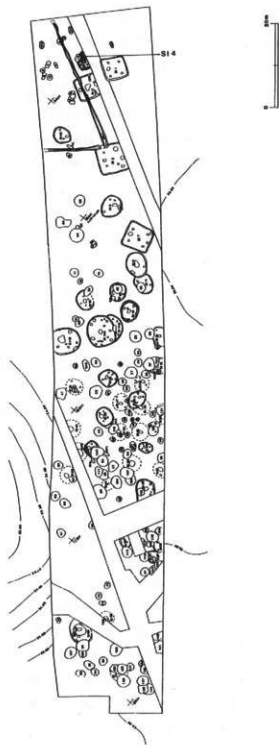
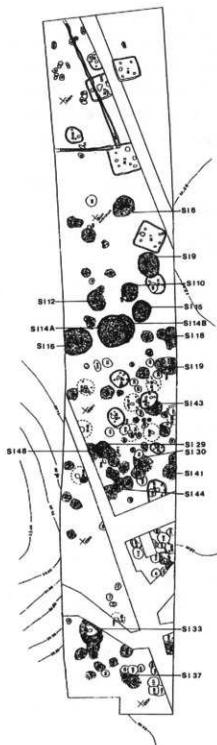
その他にも、表土層、遺構確認面及び他の遺構の覆土中から、縄文土器片を中心とする遺構に伴わない縄文時代の遺物が多量に出土している。その中には特に、耳栓及び有孔円板等の土製品や、有舌尖頭器、磗器、敲石及び砥石等の石器も含まれている。

3 古墳時代

今回の調査では当該期に属する第1～3及び7号の竪穴住居跡4軒と、第7、9、10及び13-A号の土坑4基

加曾利E III式期

加曾利E IV式期



第139圖 縄文時代遺構配置図(3)

を検出した。これらの遺構はすべて調査区の中央部から北東部にかけて位置しており、当遺跡が立地している舌状台地の先端部に当たる。

竪穴住居跡の主軸方向を見てみると、北から順に位置する第1、2及び3号住居跡は、N-54°~64°-Wであるのに対して、一番南に位置する第7号住居跡はN-20°-Wと他の3軒よりも約40度南向きである。

竪穴住居跡の出土遺物のセット関係を見てみると、一番北に位置する第1号住居跡は土師器の坏、甕、甌に、土製品として土玉が加わる。第2号住居跡は土師器の坏、椀、甕、甌及び須恵器の甕に、土製品として土玉、滑石製品として白玉が加わる。第3号住居跡は土師器の坏、小形坏、椀、甕、手捏土器及び須恵器片に、土製品として土玉、滑石製品として紡錘車、鉄製品として刀子及び鎌が加わる。一番南に位置する第7号住居跡は土師器の坏、甕及び須恵器の坏身、甕に、土製品として土玉が加わる。

先に述べたように第1~3号住居跡と第7号住居跡の主軸方向は異なっているが、これらの住居跡から出土した遺物群には、あまり時期差が認められない。以下、この土器様相について見てみたい。

まず、形態変化が明瞭な坏を中心に、それに小形坏及び椀を含め、底部形態、口縁部形態、須恵器坏模倣形態などを基にして分類してみることにする。

なお、ここでいう器種の小形坏は坏よりも口径が小さいものを指し、椀は坏よりも器高が高いものを指している。

A類a：平底で、体部と口縁部との境に弱い稜をもち、口縁部は内傾するもの

b：平底で、体部と口縁部との境に弱い稜をもち、口縁部は直立するもの

B類a：丸底で、体部と口縁部との境に弱い稜をもち、口縁部は内傾するもの

b：丸底で、体部と口縁部との境に弱い稜をもち、口縁部は直立するもの

c：丸底で、体部と口縁部との境に弱い稜をもち、口縁部は外傾するもの

C類b：丸底で、口縁部内面に稜をもち、口縁部は直立するもの

c：丸底で、口縁部内面に稜をもち、口縁部は外傾するもの

D類b：須恵器坏蓋の模倣で、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立するもの

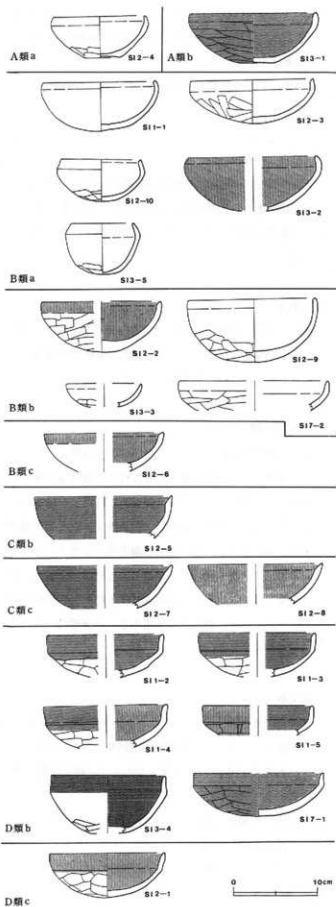
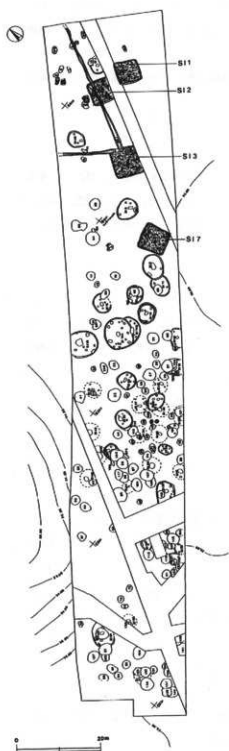
c：須恵器坏蓋の模倣で、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は外傾するもの

第1号住居跡はB類a 1個体、D類b 4個体で、赤彩率は80%である。第2号住居跡はA類a 1個体、B類a 2個体、B類b 2個体、B類c 1個体、C類b 1個体、C類c 2個体、D類c 1個体で、赤彩率は60%である。第3号住居跡はA類b 1個体、B類a 2個体、B類b 1個体、D類b 1個体で、赤彩率は60%である。第7号住居跡はB類b 1個体、D類b 1個体で、赤彩率は50%である。

その他の器種も見てみよう。甕は器形がほぼ球形で、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反するものがほとんどであるが、第2号住居跡の12の甕は、その頸部から口縁部にかけて、わずかながら直立化の兆しが認められる。さらに、第2号住居跡の14の甕のようなものも見られる。また、甕は第2号住居跡から折り返し口縁のものが1個体、甌は第1号住居跡から単孔式のものが1個体出土しているが、高坏、埴はどの住居跡からも出土していない。

須恵器は、断片的な資料ではあるが、第2号住居跡から出土した甕、第7号住居跡から出土した坏身及び甕を陶器編年に照らし合わせてみると、TK23あるいはTK47型式併行のものと思われる。

以上のような土器様相から、第1~3及び7号住居跡の時期を古墳時代中期の5世紀後半に比定した。しかし、後半でもどちらかということと末葉に近く、新しい様相を多く兼ね備えている点から、5世紀第IV四半期という年代が与えられよう。



第140图 古墳時代遺構配置図，出土土器分類図

次に4基の土坑について見てみよう。平面形で分類すると、楕円形土坑が2基、長方形（不整形）土坑が2基である。これらの土坑からは、竪穴住居跡から出土した遺物とほぼ同時期と思われる土師器片及び須恵器片が少量出土している。

その他にも、当該期の双孔方板及びガラス製小玉等が、表土層、遺構確認面及び他の遺構の覆土中から出土している。

4 奈良・平安時代

今回の調査では当該期の遺構は確認されなかったが、古墳時代中期の第2号住居跡の覆土上層から、平安時代の土師器甕の上半部が投げ込まれたような状態で出土している。このことによって、今回の調査区内には当該期の集落は存在していなかったが、調査区に隣接あるいは近接する同一遺跡地内には集落が存在していたものと想定できる。

5 中世

今回の調査では当該期に属する土坑1基を検出した。本跡は長径約1.3mの楕円形、深さ0.8mを呈しているが、覆土には多量の焼土を含んでおり、人為堆積の状況を示している。遺物は、陶器、鉄製品の細片及び鉄滓等が少量出土しているが、性格等については不明である。

6 近世以降

今回の調査では詳細は分からないが近世以降と思われる溝1条を検出した。この第1号溝の性格は、地境に伴う区画溝あるいは根切溝と考えられる。遺物は、覆土中から釘、錠及び耳金等の鉄製品が出土しており、本跡付近の表土層からは近世の灯明受皿、播鉢及び磁石が出土している。

その他にも、近世の小碗及び泥面子等が、表土層、遺構確認面及び他の遺構の覆土中から出土している。泥面子は、攪乱を受けた他の遺構の覆土中から出土したものと、表採されたものとであるが、2点とも人面などの面相を示す「芥子面」タイプのものである。当遺跡の調査前の現況は畑であったわけだが、「芥子面」タイプの泥面子が8点出土した水海道市豊岡町所在の三本松遺跡の場合も、同じように調査前の現況は畑であった。このことによって、泥面子の使用あるいは廃棄は、やはり畑作と密接に関係していたものと想像できるのではないだろうか。

参考文献

- ・ 神奈川考古同人会 「シンポジウム'80 縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曽利E式と曾利式土器との関係について— 土器資料集成図録」『神奈川考古第10号』1980年12月
- ・ 日本考古学協会 「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」（日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウム資料1）1981年10月
- ・ 取手市史編さん委員会 『取手市史 原始古代(考古)資料編』取手市教育委員会 1989年3月
- ・ 土浦市史編さん委員会 『図説 土浦の歴史』土浦市教育委員会 1991年3月
- ・ 土生朗治 「常陸地方出土のI期の須恵器の性格について(下)」『研究ノート創刊号』茨城県教育財団 1992年7月
- ・ 櫻村宣行 「県南部における鬼高式土器について」『研究ノート2号』茨城県教育財団 1993年7月

- ・荒井保雄 「中久喜遺跡出土の古式須恵器について」『研究ノート3号』茨城県教育財団 1994年6月
- ・黒沢秀雄 「茨城県の縄文時代中期のフラスコ状土坑について—西茨城郡岩瀬町裏山遺跡を例として—」『研究ノート3号』茨城県教育財団 1994年6月
- ・戸沢充則編 『縄文時代研究事典』東京堂出版 1994年9月
- ・縄文時代研究班 「茨城県における縄文時代中期前半の住居跡形態について」『研究ノート4号』茨城県教育財団 1995年6月
- ・吹野富美夫 「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」『研究ノート4号』茨城県教育財団 1995年6月
- ・柳澤清一 「茨城県における加曾利E4式編年の検討」『茨城県考古学協会誌第7号』茨城県考古学協会 1995年8月
- ・縄文時代研究班 「茨城県における縄文時代中期の有段式堅穴遺構について」『研究ノート5号』茨城県教育財団 1996年6月
- ・櫻村宣行 「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」『研究ノート5号』茨城県教育財団 1996年6月
- ・茨城県教育財団 『一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡・大門通遺跡・三本松遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第114集) 1996年6月
- ・白田正子 「古墳時代中期後葉における土器編年細分案—牛久地域を取り上げて—」『茨城県考古学協会誌第8号』茨城県考古学協会 1995年7月

付章 宮前遺跡自然科学分析報告

パリーノ・サーヴェイ株式会社

I はじめに

茨城県南部に広がる常陸台地は、霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され、東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの台地にわかれていた。

今回の自然科学分析調査は、常陸台地南部の稲敷台地上に立地する宮前遺跡におけるローム層序の対比についての検討を行う。

II 宮前遺跡のローム層序

茨城県南部に広がる常陸台地は、霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され、東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの台地にわかれていた。これらの台地の地形・地質は、坂本(1986)により以下のように記載されている。常陸台地は下総台地に対比される段丘で、その構成層は後期更新世の海成層である見和層である。見和層は最終間氷期の下末古海進に伴って堆積したものである。その上位に堆積する茨城粘土層は、下総台地をはじめとする関東平野中南部の台地に広く認められる常総粘土層に対比される。常総粘土層は、菊地(1981)によれば約4万9千年前に噴出した(町田・鈴木, 1971)箱根-東京軽石の降灰直前まで堆積したとされる。さらに、その上位には褐色火山灰土層(いわゆるローム層)が認められる。

常陸台地の南部に位置する稲敷台地は、北を桜川に、南および西を小貝川の低地に、東を霞ヶ浦により限られている。南部では、台地は花室川や小野川とその支流の乙戸川や桂川などにより開析が進んでいる。

宮前遺跡は、この稲敷台地の中央よりやや北よりの花室川右岸の台地上に位置する。遺跡の北に広がる花室川の右岸は樹枝状の支谷が発達し、間には台地が舌状となって南西から北東方向にのびている。本遺跡もこの舌状台地上に立地する。

今回の発掘調査により、旧石器時代、縄文時代、古墳時代の遺構・遺物が検出されており、縄文時代および古墳時代には集落が形成されていたと考えられている。

今回の自然科学分析調査では、本遺跡のローム層の層序対比を行うために火山ガラス比分析および重鉱物分析を行う。火山ガラス比分析では、ローム層中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラスの産状を調べることで、降灰層を推定する。重鉱物分析では、ローム層中の重鉱物組成を調べ、その層位的変化を指標として対比に用いる。本分析法は、武蔵野台地に立川ローム層で対比資料が比較的多く蓄積されているため、とくに有効な手段となっている。本遺跡周辺で分析例は少ないが、武蔵野台地や栃木県～茨城県北部のローム層との対比を行いたい。

1 試料

テストピットの土層断面は上位より1層～13層に分層されている。1層は褐色ローム層、2層は明黄褐色ローム層、3層・4層は黄褐色ローム層、5層は褐色ローム層、6層・7層は黄褐色ローム層、8層はよい黄褐色ローム層、9層は黄褐色ローム層、10層・11層は褐色ローム層、12層はよい黄褐色ローム層、13層は灰黄褐色粘土層とされている。1層は武蔵野台地の立川ローム層の第一暗色帯(BBI)、4層・5層は第二暗色帯(BBII)と考えられている。なお、ローム層の最上部に認められることが多いソフトローム層は本地点では認められない。

試料は1層～13層まで上位より試料番号1～40が採取されている。この中から、本地域のローム層上部の指

標テフラである立川ローム層最上部ガラス質火山灰（UG：山崎，1978）や始良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）などが検出されると考えられる試料番号1～16の計16点の試料を選択する。同一試料を二分して、両分析に用いた。以上の1層～6層までの柱状図と試料の採取位置を図一に示す。

2 分析方法

(1) 重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後，篩別し，得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離，重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は，「その他」とする。

(2) 火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察，火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し，碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，便宜上軽鉱物にいれ，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

3 結果

結果を表1・図1に示す。

(1) 分析

カンラン石は，下部の試料番号8～16で量比が比較的高く，上部の試料番号1～7で量比が比較的低い。試料番号2に量比の極小層準が認められるが，極大層準は明瞭ではない。

斜方輝石と単斜輝石の両輝石は，カンラン石とほぼ逆の傾向を示す。試料番号2に量比の極大層準が認められるが，極小層準は明瞭ではない。

角閃石は下部の試料番号8～16で微量認められるが，上部ではほとんど認められない。

(2) 火山ガラス比分析

試料番号1～9ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位より見て，試料番号11から9で急増，試料番号9から8で増加，試料番号8から6で漸増，それより上位では減少する。この火山ガラスは，その形態と色調および産出層準からATに由来すると考えられる。ATは，鹿児島県の始良カルデラを給源とし，降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている（町田・新井，1992）。一般に，土壌中に特定のテフラが混交して産出する場合，テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い（早津，1988）。これに従えば，本地点のATの降灰層準は試料番号8～9の4層中部～下部付近と考えられる。

4 考察

本地域のローム層上部の指標テフラには，UGやATなどがある。UGは，浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており，その降灰年代は約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるIII層上部が降灰層準と考えられており，南関東地方に広く分布する。一方，当社によるこれまでの分析例により，UGによく類似するテフラが栃木県～茨城県北部に広く分布することが認められており，その降灰層準もローム層の最上部にある場合が多い。UGやUGに類似するテフラの由来と考えられている浅間軽石流期のテフラには，浅間板鼻黄色テフラ（As-YP）やAs-YPと同一噴火輪廻のテフラと

表1 宮前遺跡重鉱物および火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	37	142	12	3	22	34	250	41	3	2	204	250
2	20	168	17	4	20	21	250	55	1	2	192	250
3	29	154	16	0	29	22	250	69	2	5	174	250
4	41	143	22	1	26	17	250	95	0	1	154	250
5	48	138	18	2	27	17	250	122	0	3	125	250
6	54	134	22	2	21	17	250	154	2	2	92	250
7	58	122	26	1	17	26	250	145	0	2	103	250
8	93	111	13	4	11	18	250	138	0	4	108	250
9	106	96	14	8	6	20	250	102	2	1	145	250
10	107	87	13	8	10	25	250	35	0	2	213	250
11	111	95	11	1	9	23	250	15	0	2	233	250
12	114	79	19	6	12	20	250	4	0	0	246	250
13	127	85	7	6	8	17	250	0	0	1	249	250
14	118	83	9	5	7	28	250	1	2	2	245	250
15	130	76	11	5	7	21	250	0	2	2	246	250
16	130	68	6	13	5	28	250	0	0	2	248	250

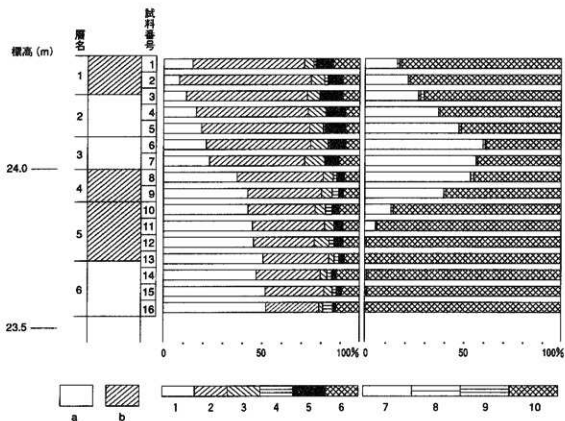


図1 宮前遺跡柱状図・試料採取位置および重鉱物組成・火山ガラス比

a: ローム, b: 暗色帯

1: カンラン石, 2: 斜方輝石, 3: 単斜輝石, 4: 角閃石, 5: 不透明鉱物, 6: その他,

7: バブル型火山ガラス, 8: 中間型火山ガラス, 9: 軽石型火山ガラス, 10: その他,

考えられている浅間草津テフラ (As-k) などがある (町田・新井, 1992)。As-YPの分布主軸は東南東で、主に群馬県南部に分布し、その降灰年代は約1.3~1.4万年前と考えられている (町田・新井, 1992)。As-kの分布主軸は北東で、主に群馬県北西部から新潟県南部に分布する (町田・新井, 1992)。さらに、As-k (引用文献中ではAs-YPk) に対比されるテフラは、東北地方南部から中部でも認められている (小岩・早田, 1994)。UGまたはUGに類似するテフラは、いずれにしてもこれらの浅間火山のテフラに由来すると考えられる。今回の分析結果ではUGの降灰層準が認められなかったため、その降灰層準は1層よりさらに上位である。したがって、本地点では、ローム層の最上部が削削を受けていると考えられる。

ATの降灰層準は、武蔵野台地の立川ローム層の標準層序では第二暗色帯 (BBII) のVII層上限付近にある場合が多い。また、栃木県~茨城県北部ではATの降灰層準は田原ローム層と宝木ローム層の境界層の暗色帯の上部 (町田・新井, 1976) におかれている。今回の分析結果から、4層中部~下部付近が武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるVII層上限に対比される。また、栃木県~茨城県北部のローム層との対比では、本遺跡の4層中部~下部付近が宝木ローム層の最上部に対比される。

重鉱物組成上の指標には、武蔵野台地の立川ローム層の第一暗色帯 (BB I) のV層上限付近の輝石の極大層準がある (小林ほか, 1971など)。今回の分析結果により、試料番号の2の1層下部の閃輝石の極大層準がこれに対比される。また、下位では当社の分析例により、ATの降灰層準 (VII層上限) のやや下位のカンラン石の極大層準が指標として認められている。今回の分析結果から、カンラン石の極大層準は明瞭には認められなかったが、試料番号9の4層下部以下でカンラン石の量比が高い傾向がこれにあたると思われる。

角閃石は栃木県~茨城県北部の分析例では、宝木ローム層の上部 (暗色帯上部) 付近すなわちATの降灰層準付近において下位に向かって増加することが認められている。この角閃石は、宝木ローム層の中部に降灰層準がある赤城鹿沼軽石 (Ag-KP: 新井, 1962) に由来すると考えられる。Ag-KPは赤城火山を給源とし、降灰年代は約3.1~3.2万年前と考えられている (町田・新井, 1992)。本遺跡の角閃石の産状は、栃木県~茨城県北部の宝木ローム層とやや類似する。

以上のように、本遺跡のローム層の重鉱物組成には、栃木県~茨城県北部のローム層の重鉱物組成と南関東のローム層の重鉱物組成の両方の特徴が認められている。

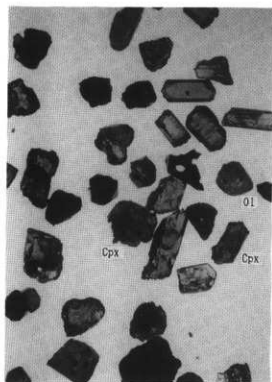
層序対比をまとめると、1層中部以上が武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるIV層以上、1層中部~4層中部が同じくV層およびVI層、4層中部~下部以下が同じくVII層以下に対比される。また、栃木県~茨城県北部のローム層との対比では4層中部以上が田原ローム層、4層中部~下部以下が宝木ローム層に対比される。

ところで、ローム層中の暗色帯の成因については、かつてそれが表層土であった時に腐植が形成され集積したためと考えられている (黒部, 1963)。また、腐植の給源はススキ・ササなどのイネ科草本であるともいわれている (加藤, 1962)。しかし、腐植の集積には周辺植生以外にも気候、母材の堆積状況などの様々な要因が関連すると考えられる。したがって、同時期でも地点によりその形成条件は異なっており、暗色帯は厳密には層序対比の指標とはならない。本遺跡で認められたATの降灰層準と暗色帯との層位関係や閃輝石の極大層準と暗色帯との層位関係は、武蔵野台地で標準的に認められるものとはずれがあるが、これは上述のような暗色帯の形勢条件の場所による違いを示唆している。

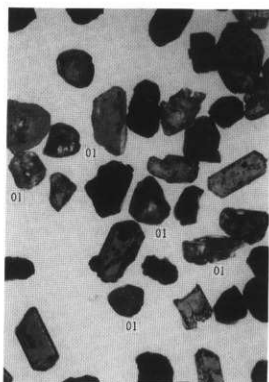
引用文献

- ・新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, 4, p. 1-79.
- ・早津賢治 (1988) テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー—ATにまつわる議論に關係して—。考古学研究, 34, p.18-32.
- ・加藤芳朗 (1962) 関東ローム層の細砂軽鉱物組成。地球科学, 62, p.11-19.
- ・菊地隆男 (1981) 常総粘土層の堆積環境。地質学論集, 20, p.129-145.
- ・小林達夫・小田静夫・羽島謙三・鈴木正男 (1971) 野川先土器時代遺跡の研究。第四紀研究, 10, p.231-252.
- ・小岩直人・早田勉 (1994) 東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ。地学雑誌, 103, p.68-76.
- ・黒部隆 (1963) 立川ローム層の腐植に関する生成学的研究 (第1・第2報)。日本土壤肥科学雑誌, 34, p.182-184, 203-204.
- ・町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p.339-347.
- ・町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 276p., 東京大学出版会。
- ・町田洋・鈴木正男 (1971) 火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッション・トラック法による試み—。科学, 41, p.263-270.
- ・坂本亨 (1986) 3.4関東平野北部の更新統 (9) 常陸台地。「日本の地質3 関東地方」, p.189-190, 共立出版。
- ・山崎晴雄 (1978) 立川断層との第四紀後期の運動。第四紀研究, 16, p.231-246.

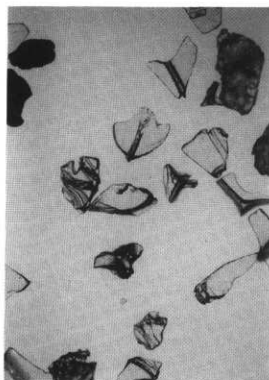
図版 宮前遺跡重鉱物および火山ガラス



1. 重鉱物 (試料番号 2)



2. 重鉱物 (試料番号 13)



3. A T火山ガラス (試料番号 6)

O1 : カンラン石, Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石.

